

911.3

丰

宮本氏

宮本氏之助

茨城縣東區那火國村湯久

寺持齋

大補季持扇寄

附録

白雄坊苗代水

青雲堂梓

俳諧持扇の序

俳諧持扇の序

常小腰やそ物小節

人小節を愛敬の様はなりけ

ハ扇なりその愛敬を眼り

そ人懐のふ中お好ある

のハ俳諧なりふりハ金堂

とつて人ハ扇を造りて

四時と雑の五ツをわくこふ

あはれあるをこふハ

す先やう人の彼是をを

あつたて持扇のうら書

甘ふは友奴冬扇のうら

うらハ持扇のあやまら

秋うぬをこゝろこき
の考訂を注と要と括
をてあてふてその持
の幸をいなりぬあはれ
所序凡右ふ欠つて
そのにて秋も持る
ふいりてさうりり

丙寅孟夏

蘆明庵五休識

うらみかきあのもみ
あくとみあまのひ
まもあまのひ
月也あ中もつのも
のまつと一何まも思
くも

大増補四季の持扇

山金堂主人著
椿園主人補

春

春ハ蠢々動て生むる貌春ハ晴
る此意をハあゝ又春を

張く草木の
芽のまゝ

○太簇

律太簇と
いふハ太ハ

ふいぐと訓簇ハまゝむとよあり春
の陽氣て万物まゝ生むる心あり

○立春

節大寒の後十五日
斗艮は建あり

○雨水

中立春の後十五日
斗寅はさまあり

正月

睦月。孟春。王春月。阪
月。夏正。太郎月。初空月

○霞初月。早緑月。年端月。暮新
月。初春月。祝ひ月。年待月。とら月

元日

元旦歳旦上日履端けさの春け
ふの春四方の春と空初と一月の

ふの春玉の年「新玉の妻」つのおあ
く年「くち」君「春」子代の妻

勢うぬをこゝに考じ

の考訂を所と要と括り

をてり哉ふそりそ持解

の幸とふなりぬあはひよく

所序凡右ふ欠つゝさる

その下して大なる事なり

元日賀

今日をかくる始めの本朝は
てい神武天皇の御宇より始
る唐山より漢の世より始めて
を行ふ日本より四百年より後の
元日賀

四方拜

元日寅の一天主上属星を
唱へ天地四方の山陵を拜し

星佛

當年
星佛

御藥を供む

天子晝
の御坐

屠蘇

白散
屠蘇

度嶂散屠

ちやうどとくちの蘇ハヤミ
をよみくちとくちの蘇ハヤミ

御菜を召あかりぬふ

御菜を召あかりぬふ

菜子

おまへ作を奉る人童女の
いさぐ嫁せざる者よも吞

齒固

ハ餅を焼
くして向ふふ人ハ齒を以て命とす
ゆハ齒の字をよみいと訓齒をこの

鏡餅

神ハ供ふ餅を焼の
あう

椒酒

椒柏酒。柏葉酒。椒
觴。椒盃。椒盤あまハ

桃湯

凡土に
走らむとあり

朝拜

朝賀。奏賀。奏瑞。小朝拜
元日ハ群臣天子を拜しやま

元日節會

元日ハ院系の人ハ院の
御所ハおれあるあま

諸司奏

事あり宴會と書て
とありあまのうとあり

七曜御

元日節會の席ハ右の支
とあり天子ハ奏しなま

氷室の厚薄寸

法瓦石を以てそのたまりとて奏する

宮内省

主水司を奏す氷室の厚薄寸

水司を奏す

法瓦石を以てそのたまりとて奏する

奏す

法瓦石を以てそのたまりとて奏する

奏す

法瓦石を以てそのたまりとて奏する

奏す

法瓦石を以てそのたまりとて奏する

奏す

法瓦石を以てそのたまりとて奏する

奏す

法瓦石を以てそのたまりとて奏する

奏す

法瓦石を以てそのたまりとて奏する

奏す

法瓦石を以てそのたまりとて奏する

奏す

法瓦石を以てそのたまりとて奏する

奏す

法瓦石を以てそのたまりとて奏する

奏す

法瓦石を以てそのたまりとて奏する

奏す

法瓦石を以てそのたまりとて奏する

奏す

法瓦石を以てそのたまりとて奏する

奏す

法瓦石を以てそのたまりとて奏する

元日賀

今日を元とする始めの本朝よ
てい神武天皇の御宇より始
る唐山より漢の世より始めて
を行ふ日本より四百年より後の
元日

四方拜

元日寅の一天主上属星を
唱へ天地四方の山陵を拜し

星佛

當年
の星の九曜を
御藥を供へ
天子晝
の御坐

屠蘇

白散
は出御成て菓子白散の
御茶を召あかりぬふて

度嶂散屠

はちやうとよむ邪氣をちやうばー人の神
をよみぬふとよむとよむの理之医家
は多く屠の尸はを加て屠字は作
る是尸をちやうとよむ字あるね
は忌避て尸は書ぬとよむ

菓子

はちやうとよむ邪氣をちやうばー人の神
をよみぬふとよむとよむの理之医家
は多く屠の尸はを加て屠字は作
る是尸をちやうとよむ字あるね
は忌避て尸は書ぬとよむ

齒固

は餅を焼
とて向ふふ人ハ齒を以て命とよむ
ゆハ齒の字をよむと訓齒をこの

鏡餅

神は供ふ餅を焼の
あう

椒酒

椒柏酒。柏葉酒。椒
觴。椒盃。椒盤あま

桃湯

はちやうとよむ邪氣をちやうばー人の神
をよみぬふとよむとよむの理之医家
は多く屠の尸はを加て屠字は作
る是尸をちやうとよむ字あるね
は忌避て尸は書ぬとよむ

朝拜

朝賀。奏賀。奏瑞。小朝拜
元日は群臣天子を拜しやま

院拜

はちやうとよむ邪氣をちやうばー人の神
をよみぬふとよむとよむの理之医家
は多く屠の尸はを加て屠字は作
る是尸をちやうとよむ字あるね
は忌避て尸は書ぬとよむ

元日節

元日は院家の人の院の
礼

會

はちやうとよむ邪氣をちやうばー人の神
をよみぬふとよむとよむの理之医家
は多く屠の尸はを加て屠字は作
る是尸をちやうとよむ字あるね
は忌避て尸は書ぬとよむ

諸司

はちやうとよむ邪氣をちやうばー人の神
をよみぬふとよむとよむの理之医家
は多く屠の尸はを加て屠字は作
る是尸をちやうとよむ字あるね
は忌避て尸は書ぬとよむ

七曜御

はちやうとよむ邪氣をちやうばー人の神
をよみぬふとよむとよむの理之医家
は多く屠の尸はを加て屠字は作
る是尸をちやうとよむ字あるね
は忌避て尸は書ぬとよむ

水の様

はちやうとよむ邪氣をちやうばー人の神
をよみぬふとよむとよむの理之医家
は多く屠の尸はを加て屠字は作
る是尸をちやうとよむ字あるね
は忌避て尸は書ぬとよむ

法瓦石

はちやうとよむ邪氣をちやうばー人の神
をよみぬふとよむとよむの理之医家
は多く屠の尸はを加て屠字は作
る是尸をちやうとよむ字あるね
は忌避て尸は書ぬとよむ

○國栖奏

國栖笛応神天皇芳野へ行幸の時芳野に

其後毎年糸肉にて羊魚やうの物をさきう歌をうたひて今糸肉をさきう歌をうたひて

○腹赤の奏 腹赤の贅をさきう歌をうたひて

○祇園の削掛元朝寅の一天祇園の社にて松の木に削掛し

用ゆる火をうけて大腹雜煮のたれをさきう歌をうたひて

○門松 一説は火晦日の夜あらうとさきう歌をうたひて

○建松 飾松。飾葉。注連飾。飾竹。飾繩。飾炭。飾海老

門の神棚 在家の妻戸は松をさきう歌をうたひて

○齒祭 齒白。山をさきう歌をうたひて

○懸鯛 元日鯛魚二双葉索と草 以喉を結ひ齒祭ゆり

○歳徳神 葉を挿して寛の上は掛。あきまをうけ鯛ゆり

○恵方棚 婆利賽の神を恵方へ祝ひて鏡餅雜煮をさきう歌をうたひて

○元日不開戸 江戸の商家元日多き戸を開き一日

○若夷 市にてさきう歌をうたひて

○大黒舞 又夷の舞をいふ俣俣師のあきまをうたひて

○春 悲田寺極外の物ありと星の姿をさきう歌をうたひて

○鳥追 正月七日の白馬を模したる葉をさきう歌をうたひて

○田疇の女 元日より十五日まで田疇の女をさきう歌をうたひて

○馬追 追ふよう歌をうたひて馬の母女をさきう歌をうたひて

春

○國柵奏

國柵笛応神天皇芳野へ行幸の時芳野に

奥國柵とのふ処の者あつて醴酒を奉る其後毎年糸肉にて年魚やうの物をさきり歌をうたひて今糸肉をさる夏ハヤ今國柵の奏とて歌流ひ笛やう芳野より

○腰赤の奏

腰赤の贅

とも云流奏より

○祇園の削掛元朝

寅の二天祇園の社とて松の木に削掛し新しき火をたいて大腹雜煮のためよ用ゆるあゝあゝ洛中洛外の家よりあゝの火をうけよ来訪の人あびた

一説は晦日の夜より

○門松

建松。飾松。飾葉。注連飾。飾竹。飾繩。飾炭。飾海老

門の神棚

在家の妻戸は棚をかりへて祭る夜を土忌は灯

○齒祭

裏白。山。齒祭より祭る

といふ意は是を用ゐる上齒を

る雪おはあやせのまき

○扛

草

○懸鯛 元日は鯛魚二双葉索以喉を結ひ齒祭より

葉を挿そ電の上は掛

○歳徳神

○恵方棚

婆利賽の神を恵方よりひて鏡餅雜煮より休

祭。○元日不開戸

江戸の商家元日く戸を開き一

年の陽氣をとりんまの儀より

昆沙門功德經

糸の町は鞍馬の昆沙天の紙符とて糸の

○若夷

市より来り

○大黒無廻

又夷の廻りより

悲田寺恒外の物あり大黒の姿より

鳥追

正月七日の白馬を模したる葉より

鳥追

元日より十五日より田疇の

福藁布

藁を布て物をくふやう
藁をくふ不浄を拂ふやう

福日の福鍋

七日の粥をくふにふ
福六餅の異名あり又福

粥の粥を

○喰積 連葉の餅を菓
物を食て長寿を

得んの

○やう玉 新年の粥の今の
人年を云ふ非之 ○羽

子板

○胡鬼板 ○破魔弓 破
○や羽子 遊び羽

矢

○毬打 袖ぎやうぶらぐ。練衣の厚
板を玉のあてあてて是れ射

て遊ぶ子供のりて

○宝引 福引

あそびものあり

○弓始

馬乗始

○藏開 ○湯殿始 ○あ

始

あひ火水こしど又内裡にてまをいれと
ゆいをま始のり説あり又一説はいめ

る編糲にて粥のあてまをくひに飯を
そめて食をくむあま束べー今もあま

のりあての糲

○著衣始 衣服を著
糲のきこき

船乗始

○船灵祭 船は酒饌を供
以船神をまつこ

幸木

○幸簞木の小枝をわけてまゝ魚
鳥菜葉をのけて竈の上をかざ

るをさる木とふ筑紫より今ねまる
まあるさる簞同 是をさる木と

ち能

○鬼打木 大聖玉の木とも云
門松の類にある木

幸竈

○葉盒子 ○三物連歌

昔の松竹三葉を

○三物俳諧 是
古物と云歳旦と云所

有の連歌

○裏白連歌 正月四日あり
北窓の社にて

○三物賣

○去年今歳 ○
催さる

御慶

年始状 君が春千代の春古

年新らしき年若き年宵の年

○初玉の年 ○初鶏 修旦元初

○初

夢 ○宝船敷

大晦日より元旦まで
の夢を枕夢と稱す

初曆

○試筆 試毫 言書
書初

五

福藁布

藁は藁を布て物をとふあり
藁をよふ不浄を拂ふあり

福日の福鍋

七日の粥をよふいふ
福ふ餅の異名あり又福

鍋は粥を

煮て達菜の候も藁
煮る粥をいふ

○喰積

物を食て長寿を

得んの

○や一玉

新年の粥の今の
人年を云ふ非之

○羽

子板

○胡鬼板。まねく
○や羽子。遊び羽

○破魔弓

破

矢

○毬打

毬をよふありぐ。毬打ハ厚
板をよみのおくありて是毬打

て遊ぶ子供のよて

○宝引

福引

○弓始

あそびのあり

うまのうま

ふふふふ

ふふふふ

吹初ふき 簫ふえ 舞まい

初樂田
申樂
○謠初

樂レ春ハル鶯ウ轉マ梅ウメ

たふ 是は皆僱馬車
御物の名に

帳絨 十日〇帳ろき
〇帳いそい

旦閑 俗語の点
云々

舞まひ 朝あさ 暮ぐさ 夜よ
夕ゆふ 暮ぐさ 夜よ
○

の内又同二月
六日とあるのみ ○

法師ほうし
○千秋萬歲
○三河萬戈○

降さがる
元日よち
雨あめ
○水みづ
掛か

男は水をくみし支
松永久秀怪を電馬

○懸想文賣

桃子 箭子 桃子 板子 桃子 榑子

是ハ皆門戸を建てて
既ありあるハ唐山より

樽罍の二神の形を
よみはたぐひ鬼を

雞貼。葦索。五。

をさめく百鬼
畏るゝゆふ
○葭原あしはら

とてて庚
とてて
○春盤
とてて

○ 綵燕さいえん 春燕はるえん

戴き宜毒の
 子を門子とせ
 ○初子

初子のけあのみ常一
早又子の目松を引

家山月 初子の日又春

○あさり番卸

揚州往者初
卯

社内より於て系傳の今又神
符を授て是を郊のれと云
○郊杖 郊杖

根元云云郊杖は持統天皇三年正月
郊の日大宇宿禰よりなげようあり

二宮北太郷食 二日王卿以下二の宮へ参り
お礼ありて餐食つくとある

○朝観の行幸 二日天子年のうちめ
上皇及母后の宮へ
行幸あり

○春永 永日。永陽あり
いふ祝のめとある

○臨時客 攝政園白の家は太臣以下の
公を招きて遊ひぬあり

○摩那切 定むる公勢ありされ
臨時ありといふあり

始 二日高橋大隅のあ家
是を行ふ夜といふ

宴 二日愛宕寺の午王加持之清水坂の
西あり今日夜は入る門前の弦刺
客ありあつたり各宴飲も

○たう薬 是を天狗の酒のうといふ

○東叡山 三日主上へ千瘡膏といふ
膏薬を進むといふあり

大黒湯 三日武江東叡山中護国院は
大黒天あり正月三日餅を湯よ

履新の慶 浸し事柄の今修む
あきと大黒の湯といふ

○がみ 履新のまゝといふ左傳より昔は
半の端をあらへてなまるとある

開 神あ冥前寔を外ありかりとある
元日より餅を供するを饗候といふ

○叙位 五日六日。諸臣の年簡を奏し
次升し位を叙するあり

○萬歳 木造始 禁裏の
行夏に

○六月年越 七日八式日ある
今日をいふ

○白馬郎會 七目白馬をさむる、邪を拂
あといふ禁中より七日は白馬

○人日 七日正月一日を指し二月八日
三月八日四月八日五月八日

○靈辰 馬七日八日
老より云天地八萬
物の父母人八万物の

○七日正月 人日といふ
本朝より今日を
五節句の一日とす

○初若菜 若菜
○七種 七種

齋蒿摘礮菜摘○菜まろく摘川の

○箕面の富

篤會 ス松屋又移て 五月八日より十四日
 よりふう七日の間家持王經を撰

の御作法 豊盛 先生人習志裏生言
院に於て撰授國家五教
女又立八日女所又立著一

新を賜ふ。居龍夷祭
振、民西の云、大和宮の祭あり。村民九日

島の子社まの目男女の名を布の帯に

記の政始 きやうせいし 吉言を構む或いふ九日 きちごんをくはむあるいふくじふにち

目。具足淺用元日具足。通。
○住

削花ぎやうふ 土四折の枝をけり

十四日。あけつちり。里。〇。かき。の。終。
〇。少。け。終。の。端。歌。の。大。正。月。十。四。

月付よりい或ハ蘭虫と名づく今ハ只

○綱弓儀

○廿九。あづふ。あきふ。
○そあふ。ひのせ

○蓴菜摘

○齋蒿摘 蓴菜摘 ○菜摘川の

神事

七日吉野神社の神の祭あり西の社の神人氏人の男女より川辺より

お蔭を拝し、神を清める

○箕面の富

七日今夜法へ掛長無面山の毎夫又競い集りて堂上は富をつくあり

○御

齋會

大松殿に於て正月八月より十四日あり七日の間家祭を修む

せらせと朝祭あるを修む

○眞言

院の御修法

宿主人願裏書院に於て修護國家五穀

を饒の

○女叙位

八日女府に位階を降せらるゝあり

○女王祿

八日女王よ祿を賜ふ

○居籠実祭

十日松尾西の宮に神宮の祭あり村民九日の祭あり夜ありを國で修むあり城

○常陸帯の神事

十日。常陸

國麻島神社の日男女の祭を布の帯と

あふ、神ありて社人等を招くありて

○縣召代徐目

土日外友を仕せ

むと

○外記の政始

吉日を撰む或は九月九日外記に依る除時の

政を執りて友ありて正月、

○御具足

鏡

吉日。具足鏡用元日具足は鏡を雜煮とあり

○住

吉の御弓

十三日松尾神社の社人正始に准り三尺の的を立てて立合

削花

十四日柳の枝をけり

是を射る縁起を

○里

掛へ門戸ありて柳ハ陽木ありて

○里

踏歌

あけ松の踏歌あり正月十四

○十四年越

市祭の

○削

骨より大豆と酒の糟を入り黄麹にて煮物
とす此を

骨正月 ○廿日正月 春日

○天穿 天穿は儼ふりのうへ

○女入鏡臺祝 女の日は祝ふ事
○女入鏡臺祝 女の日は祝ふ事

○嚴 近き故にいふ

島祭 下り芝州安藝郡

○内宴 廿日仁壽殿にて行ふ文人影を飾り

○御 詩を依り御前にて演ぜしむる事

○敷入 十九日あり廿五日と國是大師の忌日あり

○初天神 同家の寺院にて別事法會あり

○初不動 俗に無常より免れし事あり

○初不動 十六日の祭。今入元宿入りの祀り廿日

○餘寒 男女祝の家より到り或は神社より詣て山

○餘寒 心のおもひを収婢にまよを

○残雪淡雪 残雪は雪よりある

○のあゝ水 水は成るものけつ

○若草 木の芽

○若草 花を白むる事

○若草 花を白むる事

○若草 花を白むる事

○若草 花を白むる事

○若草 花を白むる事

○若草 花を白むる事

○若草 花を白むる事

根堀入

野薔のばら 蔓つる 花はな 赤あか 白しろ 土つち の

○ 附

鋤

田に入るの畑に入るの畑の種つゝ
田の土をまきまきまきまきまき

梅

○春告^{ハルノツキ}の香散見^{カニシ}る。匂い^{ニオイ}も。いふ
あつち^{アツチ}の白く^{シロク}いつか^{イツカ}あつた^{アツタ}

花の兄

好こ文ぶん木ぎ こぶぎ 晉しん武ぶ

古事
飛梅

筑北よりゆう 葎
 家の取組あり
 未刈紅 漬の
 糞

寺の梅
の名

鷺宿梅
○論有梅
○行棗梅
鎗梅

めうし梅

西行の歌よ とめお 梅さ
しうあうとやいふなりいふ

とて名一

○梅屋鋪

○卧龍梅

の枝樹あり枝條地は横よりうて

臥せり就のみに
よりて歎名あり

○梅曆
山中、大梅の怪を
見て、其を以て

あうたふ
とらふ

○子の月夜衣 何をもて子
の月夜衣にお

うも
を云
○梅の花衣

表向裏 種方 土月より
表向裏 種方 二月より

梅
子

○鶯袖鶯の衣
是衣の
衣より

東小袖とて衣の
腋縫と袖あり

○柳の衣表白裏青○

櫻衣

表に表蘊 ○朝雁鳥 ○あきまを
枅にあり ○あきまを

かういふまういふのちのまづあまをく負
徒の後は是ハ雪ハ雄子の体にはぞうねを

事あるは初よりと云城守を待ともきとと

○米尾の鷹

此の心持をさすなり（糸原の應）

鷹の尾は勢が著き、ばくといふ羽を能く

雪舟のうらやみに石をせきこみ入路をあけ
てうへへあがり、あそびをせき尻又白尾のうへへ

佐保姬鷹

春の聲
をいふ ○鳥ささの尾
をいふ

以之交命を命ず
由急を急と命ず

○猫の妻乞
書もにせ

ど年城お後よう
まゆりのみさき

○白魚 鰱魚也
吳名白魚

飯蛸

二月の内事を歩み
○堀○淺

○春のけり春は向てありあうてけり
八雲方向てあり万葉集中は出雲
けて六方の字を畧
せるあり

二月 夾鍾 律夾鍾八律の第一之夾を
字甲也百の物に金

○驚蟄 節雨水の後五日
水甲は建をいふ

春分 中驚蟄の後十日斗卯は建を
いふ九十日の中よりあるなるを春分

○仲春。今月。如月。梅見月。陽中
○小草生月。桃花月。雪消月。養老

中和節 朔日唐の徳宗の時
上巳九星を加て三星は ○獻生子

唐山民間の若青き袋は百穀成実の種
をまきて相共ふふはつて祝ふ之を

○二日笑 二月二日男は笑ふ
も選ふは月二日計

○初午 福
出の月二日をを用ゆるものなり

○水間祭 上
系之山城伏見の神社を
略して流玉は是を祀る

○東 東
系之山城伏見の神社を
略して流玉は是を祀る

○本妙寺 本妙寺
或は延式をいふなり

福寺懺法 上午日蓮日山福寺は法の東
南あり懺法は天台大師

○春日祭 春日祭
上午江長三上山の迎へ田はあり今も二
月廿午迄あり此寺山に属し

○秋奠 秋奠
天台宗あり今ハ寺
院修し

○魔耶泰 魔耶泰
上申智恵添上取
春日の祭あり

吉野の餅配 朔日花僧懺法の遊行人
奉寄るは御供也

○新の能 新の能
唐唐より傳
なすあり

○二月堂の行 二月堂の行
能をいふなり

○二月堂の行 二月堂の行
能をいふなり

○二月堂の行 二月堂の行
能をいふなり

○二月堂の行 二月堂の行
能をいふなり

○二月堂の行 二月堂の行
能をいふなり

節月より十四日まで南都東大寺より何り
牛生か耕の妨法上七日ハ大徳親者下七日ハ

小親者より勤勞の儀を
○氷取 二月事の
儀は開

初井あり儀にせむをみ候の井と
○事

いふ此日の井を取て使はあ
納 八月廿供書
○祈年祭 四月休祇
官は格て

足るをあるを年を
○園韓兩神祭

上野兩神とも宮内省に祀
○行基祭

神あり本荒神といふ是
○祇園御八講

伊の玉昆陽川迎節はあり行基達を
○社日 亥分
の土屋

此一昭の軒あり縁記墨ス忠友のうら
○列見

りの月も宮う
○遺教經會 九日より十五日と
訓讀會とも

十日ハ佐以下の祭能あり老を撰きて
○湯島天神砥餅 十日江戸湯島
天満宮別當

喜見院より秋日餅を砥石のおとく四角
○比良の八講 近江の比良
ぬきんを

よとち神供と後氏子に配る世俗湯島
○雪の果 毎年木の皮をくぎある世俗
清く雪の残りハ但樂といふ

○砥餅 九日より十五日と
○治聲酒 正月酒を飲ハ
耳聾を治す

○西行忌 十五日西行法師より徳大寺
おの被官侶名を儀法といふ

○暖帳の柱炬 十五日今夜清涼殿より御あて
松の燭燈をよきて是釈迦

と葵と
餅花剪 十五日東師の儀に
月用や、此の餅

十五
十五

花を狩へおきて涅槃會あまのりやうき十六日
一孝天皇の御宇にありて

○積塔あまのりやうき光
孝天皇の御宇にありて

日ありて翌日於此の宮にありて

○貝寄あまのりやうき
孝天皇の御宇にありて

○聖天會あまのりやうき
孝天皇の御宇にありて

○聖天會あまのりやうき
孝天皇の御宇にありて

○聖天會あまのりやうき
孝天皇の御宇にありて

○聖天會あまのりやうき
孝天皇の御宇にありて

○聖天會あまのりやうき
孝天皇の御宇にありて

○聖天會あまのりやうき
孝天皇の御宇にありて

○聖天會あまのりやうき
孝天皇の御宇にありて

○聖天會あまのりやうき
孝天皇の御宇にありて

○聖天會あまのりやうき
孝天皇の御宇にありて

○聖天會あまのりやうき
孝天皇の御宇にありて

○聖天會あまのりやうき
孝天皇の御宇にありて

○聖天會あまのりやうき
孝天皇の御宇にありて

○聖天會あまのりやうき
孝天皇の御宇にありて

○聖天會あまのりやうき
孝天皇の御宇にありて

○聖天會あまのりやうき
孝天皇の御宇にありて

○聖天會あまのりやうき
孝天皇の御宇にありて

○聖天會あまのりやうき
孝天皇の御宇にありて

○聖天會あまのりやうき
孝天皇の御宇にありて

○聖天會あまのりやうき
孝天皇の御宇にありて

○聖天會あまのりやうき
孝天皇の御宇にありて

今食麻と
ある草あり ○蕨 ○早蕨 ○猪蕨 ○
蕨と○異名を紫

の茎と
いふ 山根草 花玉抄
○蒲公

○異名僕公墨蒲が丁
○和名「おちのこ」
○抄菜 ちけて

葉をゆへて煮たりといふ或は煎た葉をゆへて
別によき煮たりといふ此草ありといふ

○狗脊 大蕨草の形ち脊骨のおとく
草の葉を煮たりして使ふ

○杓杷 本草曰杓杷春青青清
と名く 子といふ夏杓杷葉と

いふ秋杓杷老子といふ
冬地骨根といふ ○五加木 異名を
文章草

○八角茶 五葉一枝の五葉あるも
トといふも茶葉を取て食用とす ○虎

杖 一名さいころといふ
又古名をタチビと云 ○連翹 ○韭

蒜 胡葱 野蒜 ○水葱 摘 一名
薺

菜 三ツ面會といふ草あり夏花あり
冬あり但ち花といふは三枝あり ○浮

高 沢括梗 水葱と云 ○薺花 異
同名別種あり

を護生草三樹州といふ花中 小兒安州の
草といふ人入るも引連ひて三枝の草あり

花の葉の
草 ○菜の花 ○大根花 ○薺

草 女児の髪を結ふ草と
云ふあかき草を薺州といふ ○草の

若葉 ○赤黒の薄 葉の中は焼く
必しはまていふ草と云ふ

田舎草と云ふ草と云ふ
いふ草ありといふ ○萩の焼原 ○萩の

末黒 ○草芳 角組 角
○若

芦の 蓬摘 二月三月は採るもよき
五月五日の草に花

接骨木の花 ○銀杏の花

○若紫 紫針草といふ草と云ふ
は草の草と云ふ草と云ふ

○紅梅 八重梅 若梅 櫻梅

岸櫻 山櫻 日本ありといふ

○糸櫻 一重草といふ一種

○一重櫻 ○姥くら花

くまのき ○熊谷櫻 花の軒しふ

○児くら 山くらの一

○大櫻 桜も桜も

○椿 白椿 赤入枝 二階枝

○初花

○接木 接木 春かお後

○初雷 初雷 雷声を収む

○菊の若葉 ○鳥の若葉 ○芳宜

○果鳥

○雄 雄 雄の鳥祖を祀る

○鳥の

○鳥の

○鳥の

○鳥の

○鳥の

○鳥の

○鳥の

○鳥の

○鳥の

○鳥の

○鳥の

○鳥の

○鳥の

巢

○引鶴 引鶴 引鶴の鳥

○松むで

○孕雀 孕雀 雀の雛

○孕鹿 孕鹿 鹿の雛

○鹿の角落

○蜂 蜂 蜂の巣

○蝶 蝶 蝶の食物

○鳳車

○胡蝶の夢 ○馬刀

○寄居虫

○蜷 蜷 蜷の字

強ひつゝ

○一重櫻 ○姥くら

く葉あき ○熊谷櫻 花の軒といふ

○児くら 山崎の二

○大櫻 極みぬ様

○椿 皇椿 飛入枝 三階楼

○初花

○花を待 ○接木 接木 春かあ後

○初雷 初電 雷を数

○菊の若葉 ○鳥の若葉 ○芳宜

○若葉 ○果鳥

○雄 雄 雄の漢の長后の名を雄と

○燕 燕 燕の漢の長后の名を燕と

○鳥の

○引鶴 引鴨 引鶴 引鴨

○松むで 菊の松むで

○孕雀 孕鹿 孕雀 孕鹿

鹿の角落 鹿の角落

○蚕 ○蜂 蜂 蜂

○蝶 蝶 蝶

鳳車 鳳車

○胡蝶の夢 ○馬刀

○寄居虫

○蜷 蜷 蜷

故小肥 故小肥

○諸子魚

三才圖會のいふ文
字不詳とあり

○ 鮎ふんの子と

取

東医宝鑑
青魚○カトコ

○蒸葉

田畝

青田螺鳴

く
○
龜鳴うめう 龜かめ 田螺でな

黄子
○
蛙

月つきのあかり
異名とすちがひしな子蟄こぢの石蜂いしはちと云いふ

ふと外山蛤 ありあり

蛙子うゐこ名となと無吉

蛙 江戸小石

川傳通院の書声ありと云ふ

山の蛙と封ド

参上人 草学の妨ごとて
司鹿 こまのまふき 鹿と

蛙あかひつ 本首

平云蛙眼莫狄反
○宅原へいそん

出る

出代 昔の二月三日奴婢

月五日九月

の生代りなり今

月
姑とぎ
洗せん
建

[傳] 姑洗の姑とは古洗さんなり

○清

節 庚子の後十五日斗

中
清明

後十五日

斗辰子述

四月○嘉○月○中○
姓○

見月。梯月。

○春惜月

○春晚

四天王寺
うん

仁者 本字

如表歸紀意
○寒食
○三日
○自疾風

あひまひ

食とふ
○上
是已
水辺に枝々疾

[illegible]

病を除くは世間

日と月の中をめぐり
てを運ぶ時分

○江戸の材木源
○利佳 禁裏うき

てふがせりあ
高の園雛を

○陸奥 朱提院の

船市。○青と踏三月三日踏
續船。船初青鞋履

上と唐の信上
己と遊戯する云
○油花洛陽の婦女
○巴巡水宴會

○曲水の會巡水宴會
○巴巡水宴會

字水曲水の形巴の字朗誦
○御

燈三日天子北斗
○柳の髪三日上巳

栗津祭三日江列鳥
○潮干三日

○蛤泥中の
○土佐の海硯石取三日

○石山祭三日江列石光
○石清水祭山石寺の

○一乘寺祭五日八大天王の
○吉野社洛北の一乘寺

○水尾山城の玉男山八幡宮天祿三年
○水尾三月八日臨時の祭あり南無と称す

祭九日丹波國栗田郡愛宕山の
○吉野傍あり多神清和天皇と云

會式十日大和國吉野山子孫の
○吉野の神樂本名入海御と云花會式と

○壬生念佛十四日あり廿
○壬生念佛四日と云心淨

○壬生念佛四日と云心淨
○壬生念佛四日と云心淨

○壬生念佛四日と云心淨
○壬生念佛四日と云心淨

○壬生念佛四日と云心淨
○壬生念佛四日と云心淨

○壬生念佛四日と云心淨
○壬生念佛四日と云心淨

○壬生念佛四日と云心淨
○壬生念佛四日と云心淨

○壬生念佛四日と云心淨
○壬生念佛四日と云心淨

○壬生念佛四日と云心淨
○壬生念佛四日と云心淨

○壬生念佛四日と云心淨
○壬生念佛四日と云心淨

○壬生念佛四日と云心淨
○壬生念佛四日と云心淨

○壬生念佛四日と云心淨
○壬生念佛四日と云心淨

○壬生念佛四日と云心淨
○壬生念佛四日と云心淨

本母寺大會佛會
正月五日 臘月
梅柳山隅思德木

讀書會
九月廿五日

上卷三月轉寫しては之を天竺の大菩薩
 衆を誦す紀典の儒者も詩聯句を著す

○淺草祭 大目。歌ふもの。兼市松村
寺後岡三社権現のまつり

人曆也
大田の六今日富都所至
地盤主之今主事之七和歌共

流赤の目と云
○御身裁
九日山城玉

敬會古德（祥具）
 暖清涼寺の

之徒以縁を拭ひ拂ふ事此を忌む事

池上千部 十九日より廿日までの長堂出来
門寺武蔵野の池上村にて法華經を

一、各池上村、
 亦千石の産涌あり日蓮宗、
 御景供、廿

孝慈堂の大意あり
徳景傳一日

○永代

山閑 廿日江安後川富岡八幡宮の別當大雲山張寺詠 卷之三月

日弘法大師の弘教供を供する節永

○靈間 晦目○茶人○步

○爐門をきく 多しをきく 化装

法十月より今月此月根、四月朔日より此曜に至る。

○小弓

○香○

○杏の張○

○鮓○田鼠化鷄成○萍生

花
○花さか。○花も。○花を来。○花

花の肌。花の奴。花の唇。花の鼻。

天。花_ハ名。花_ニ生。花_ノ子。花_ノ病
麻。花_ハ名。花_ニ生。花_ノ子。花_ノ病

靡。花^い之^は意。花^{はな}之^の心。花^{はな}之^の袖。花^{はな}

花桶。花入。花量車。花車。花袋。
花筒。花瓶。花盆。花臺。花の

花の香。花踊

都。花浴。花入。花のあし。社名。
花の種。花の雨。花の錦。

幕。花のま。花の鏡。護花鈴。

○花軍

一、

木母寺大念佛會

同日武乃隅田川
梅柳山隅田木

母寺

えんが

十五日。三月

說人彙集

○勸學會

九月廿五

真珠寺月輪殿よりふく天台大徳院
花を摘む紀典の儒者も詩聯句をなす

○淺草祭

十八日。ばんざうら。蕨市出陣
寺境内三社権現のおまつり

人磨忌

十八日いすへ今日官事所彩供
を修まると之今は至うて和歌若

流るる日を以て

印

十九日山城玉嘆

歌會卷之四

社身挂

暖清涼寺の

本号親迹也來今日聞此より寺傍白中
を以て似像を拭ひ拂ふ事等を以て身拭といふ

○池上干部

十九日より廿八日まで。長栄山本
門寺 武蔵平栗の 石法華經寺
々池上村

部十口の廣福あり目蓮宗

と云ふく
廿

江戸近辺の太寺あり

往景佳
日

弘法大師の正統供之仁和寺をの外

真言宗の寺に於て墨を傳へ

平

寺山関

廿日江安河川富岡八幡宮の別
當大業山永代寺台より北へ三月

廿日弘法大師の心教供を供まゐる節永

[illegible]

○花血

仏供する花をりる等々

○花雪

吹

花を吹く

○花園

宇治の花

○花

花ものいふ

○花の縁

一花は花の淵の

○花細

花を細くする

法の花雨花智恵の花

落花飛花惜花殘花

花を惜む

○櫻

山さくら。ななな桜。うは桜。雲井の桜。滝桜。朱桜。榊桜。さくら。八重桜。山中の桜。八重桜。八重桜。花の同より花のちる桜。花の鼻と茶と齒と訓四

○八重桜

山中の桜。八重桜。八重桜。花の同より花のちる桜。花の鼻と茶と齒と訓四

普賢像

花の鼻と茶と齒と訓四

楊貴妃 奥福寺の僧玄宗が

墨染櫻 通ずる

珠櫻

馬。唐鞍の雲

虎の尾

伊勢櫻 非

江戸櫻 花大輪

塩蘆 花大輪

金玉櫻 花大輪

石門櫻 花大輪

歌仙櫻 花大輪

秋色櫻 花大輪

櫻狩 花大輪

櫻田 花大輪

人丸櫻 花大輪

鞠櫻 花大輪

○花血

仙は供する花をりて雲に
花籠もあのかかる

○花雪

吹き
流るるを
見るに
いと
いと

○花園
宇治の花
園、秋之

花

1854-5

○花の縁

一、及よ花の園の
候、もやと云り

○花細

法のりの花
雨あめ花
智ち惠ゑの花
是ハ皆
聚あはり
○

落花 飛花 惜花 殘花

りふ
○櫻
山きふもたふは櫻はふは櫻

○多木の檣。南原のきんぐ。朱檣。樺檣。

○權座。○手搦。○庭檜。○時莢さく。○女
さく。○重嬰。山中の影。六年權外。

花探ハナウラ（ノ）木。之の久々、金山中に
ふげんを葉の同より花の歩る。楊之
又自象。

二音 花と鼻と菜と齒と訓
まが加ふ部より

思おもひよき名ア、**楊貴妃**
僧玄宗

名もせり
墨染櫻
るづ
唐鞍の雲うらを八重

珠櫻 珠はしらと名を 虎尾 樹

修屈しゆくの意い、木き、
花葉はなは班はん文ぶんある、
家いえより、
伴ばん勘かん櫻おう

花の傍りには
やまなづ
江戸櫻
花大踊り

鹽長く下。
 塩蘊

ハ名
金王櫻
戸法名ハ情の社也

陸谷金王持
 石部櫻
 村延守
 江戶四ツ木

師堂のまゝつ着武田吉集より右
掲を巻せしが尚ほ栢木村より左

やあきふとて後人臣民勅諭の
拍木を重くし假借しそ名づくは
歌仙

大井川八幡の社
 秋色櫻
 東叡山
 堂のう

井の傍にあり一名大般若橋といふ

櫻田 地名

見草「曙草」古名。二日草。「仇名草」

以上より
異名あり。○桃の花昔桃。二歳桃。油桃。蟠桃。毛桃。

又異名あり。三才草「碧桃」白桃。源平

桃金糸桃。八重桃。西王母八重。大福。壽。

星桃八重。○海棠睡。

○薔薇の花花本邦。一。あの方。

荊花のり。○李花異名。東苑。道。

花を。○杏の花異名。甜梅。林檎花

異名あり。頻婆果。○櫻桃の花。○梨花

花梅。○石楠花唐人の詩。

○沉丁花瑞香。膳香。春を。○梨

の花の家の花。○木の花。○楊

梅の花。○葡萄の花異名。草龍珠。

束花大。小。二。○木蓮花木。○胡

桃花。○辛夷四。食。○馬酔木の

花。○長春花。一。あ。長。春。の。花。

○躑躅山。一。餅。の。花。蓮。

○瑤瑤姫。一。源。平。の。小。武。郎。の。

平戸一。琉。球。の。花。比。名。

事場赤。紫。餅。天取草異名也。

蓮花の。四。種。の。花。○映

半躑躅吉野。一。遠。く。の。花。

山紅葉。少。一。圓。く。花。赤。一。又。小。映。山。あ。

藤の花花。一。花。明。く。花。赤。一。又。小。映。山。あ。

○令法

氣のふき葉のしきもとり三種ありて凶年より飯を文て食ふ

はよめあつ

○通草の花 蔓草の花

さもあり鞍馬の木

○小粉團の花 紫或ハ白

の芽は淡ハちきこ

○茶蔴花。

白山吹 〇ハムふにる茶

万葉集あり

の矢

○稻花 俗ハこまや

○春

菊

○高麗菊

○東菊

てはは

○櫻草

○旌節草

○九輪草 〇七重草

○仙臺萩

花は似て花黄

○華鬘草

首宿とふふ

○馬蘭 葉長サ二三尺

幅二三分花六瓣淡紫

○碎米

薺

蓮華花の五形もが

○母子草

〇無心草

○白茅

〇鬼

〇仙耳草

〇焚の花

〇美

〇人草

〇眉作花

〇鬼

海金沙

〇美

海老根

〇丁子草

〇金盞花

〇化

〇春菊

〇化

〇桔頭

〇化

〇春菊

〇化

〇桔頭

〇化

〇春菊

〇化

〇桔頭

〇化

偷草びめ○莖たかき

壺莖○草の形

○榎くろし檀たんの花はな

木李もくり○木

外國の花くわいこく桐とう

○蜜花ちみつ○青

菊きくの植うゑ替か

清明穀せいめいこく○梅うめの

葉は新あらた小生こせい

○秦椒しんしやう若葉わくは

○若蔣わくしやう○蘘荷りやうか○

の莖いふ○萍生へいせいそむる○

月蘿げん蔔ぼく

○楊花やうか蘆あし菴あう菴あう春日かすひ

茶摘ちやてき

茶と採の時ちやとと分ぶん早はやさ時とき

教しやうお穀雨こくうの前の五日ごにちと以上いじやう

後五日ごにちこゝより次つぎく後のちおあは湯ゆ

と雨あめ中なかつは採とハハより一いつつらも

手て始はじ三月さんげつ朔日しやくにち或ハ二日ふたにち

○青葉せいゑ○弥生山やよひさん

○綿時わたとき

ハ十六夜じふろくにちと五六

と上うへ時ときと一いつハ十六夜じふろくにちと五六

○種くさ植うゑ

○移載うつし

○喚子鳥わんし

○小入鳥せうに

鳥とり中なかつ雲うみももり鳥とり帰かへも

○残のこるる雀すずめ

二月ふたつきより引ひくる雀すずめの

○雲うみ

○小入鳥せうに

鳥とり中なかつ雲うみももり鳥とり帰かへも

○鶺鴒せうりやう

和朝わあさ

○櫻魚おうぎ

○櫻鯛おうだい

○柳やなぎ

○柳やなぎ

○柳やなぎ

○柳やなぎ

○柳やなぎ

○柳やなぎ

○柳やなぎ

○柳やなぎ

時の景物を賞
美の初ともしふ

○柳鰈俗に牛の舌くし

魚こめ○小魚若鮎

○鮎鮎○鮎鮎

○蟹うひこ

○蚕飼蚕飼○桑吞桑吞

○新来摘新来摘○上上

梁やま

梁やま魚をとりし具之上り梁ハ鮎の上をとりて取る

鷹の巢鷹の巢

○老の老の

鶯

○目目がる時蛙の鳴る

○眠眠を催す

忘霜別霜

○八十八夜立春の節

俗説は名残の霜と云

○櫻衣櫻衣

表白裡青又表白裡蒲

山吹衣

又花山吹表

裏黄裡黄
朽葉裏黄

黄黄山吹山吹上上つじ衣

表蘇枋
裏青打

又つじの下重ハ表蘇枋裏赤

表紅裏紫白白表紅裡むらさきあり

○女服白とん

アめんのかよ水山吹う桜川ういざまふても暮ゆく春の摸振金銀箔を

以てゑがきとを同義みて俳倫子俳縮編のかいよりよき

又も、色は柳のえけもやうせ、ちうけしもちゆるくもやうハありとも

地金よと上悉くをへ一見ハ上つゝの式之四民見よなり

○行行

○春春○暮春○夏近き○春のかきり

○春春○春の暮○春を惜む○春の港

○春春○春の暮○春を惜む○春の港

○仲呂仲呂

○立夏立夏

○小満小満

四月

○首夏。孟夏。初夏。踴躍。
卯月。卯の忌月。余月。正陽

月。乾月。巳月。花残り月
○得る羽月。このまゝり月

更衣

朝日 白重とち。四
月朝日より給

を利ふやうなハト小袖を
着せしむを白くしよと云ふ

卯の花

衣表白
裏青

○給綿綖○夏羽織

下ケ帯

五月五日より女房上下かゝ
ひらと色くよ添て附帯く

是ハ間中の由り凡俗より地白く
ひらトケ帯を用ひ又四月朝日より

ト下帯

○青簾 朝日。青系
簾と云ふ

翡翠の簾

翡翠の簾と云ふ
及山の翠なるを云ふ

孟夏の旬

夏冬季のあらうと云ふ
始は下下し酒を賜

ひ改むす一食く旬とハ
皇の政は殊くやあり

築戸祭

近江國坂田郡筑戸の庄筑戸の社祭

祭る所内倉

氷と供

四月朝日
より給

て九月晦日は冬に
主水司よりなるあり

住吉卯

の祭

初平。松州住吉の冬に祭の
日神主祈宜等各卯杖と

持ッらんを忘
まがれと云ふ

大神祭

上卯。大
和玉城上

郡祭神大己貴の神よりて三輪明
神之大神と八大之輪の神よりて大

物主の神

稻荷祭

中卯山城
必紀伊郡

四月卯の日ニツアレ
ハ初卯の日を月と云ふ

山科祭

○勧修寺の南の境内往還路係
の木の辺にあり社を云ふ祭る所

醍醐帝の外祖宮路氏夫婦
の冥社にて勧修寺の祖より

八

瀬の祭

上辰。ハ王子天満宮お社
の祭く天満宮の社ハ山城

愛宕郡矢野

平野祭

今絶

り祭る所五ヶ所

江州幡祭

祭天神の西より

神ノ郊。法花ノ峯ハ幡宮ハ淡海國
蒲生郡ハ幡村ニあり祭ル神名清
水ノ

月一〇多賀祭 近江國大上郡
多賀ノ神伊弉諾
ノミテ例祭四月二ノ
午戌ハ上ノ巳日ト云ク

上〇松尾祭 上ノ酉山城ハ葛城
郡祭ル神大山飛

ノ神又ハ一説市
押島姫ト云ル

上〇當麻祭 上ノ申
大和

國禪林寺世俗當麻ノ号ス用明帝
才四ノ皇子麻呂子創止ル云々

上〇當宗祭 上ノ酉。河内志紀郡
宗ノ社ハ仁和四年四月

始テ勅
請カリ

上〇梅宮祭 上ノ申。この祭
ハ佐ノリ土人僅

ニ見セタリ
アテマ信姫姫ノ婦女當社ノ砂
ニテテ祭ル

上〇大津祭 上ノ亥。四
宮ノ神社

ハ江州大津四ノ宮ニあり祭ル神小
日枝大日枝系ハ小幡所カ

山崎日ノ使 三日。日ノ使ハ幡

治承三年逆程

勅使ノ義アリ

上〇水屋能 四ノ五日

南都水屋川ノ南ハ水屋ノ社アリ
祭ル神ニ聖素盞盞鳥綿田姫ノを

ノ日申ニあり北ノ人
能ヲ祀ル

上〇廣瀬菴

田祭 四日。この社ハ大和必ニあり
祭ノ日廢勢ノ年ハ二度行ハ

ル使ハ祭ノ日ハ大
忌風神ノ祭ト云

上〇擬階ノ奏

七日。誰々を加階ニシテ
儀ニ奏ス奏儀ノあり

上〇灌佛 八日。浴仏。仏生會。南華
會。仏産湯。甘水。五香

水凡今日諸も佛仏會を修む此品
の香を以て小堂を作りその中より

其料ホの香水をそぐ

上〇賀

茂の祭 中の酉但ニツアハハ
酉。癸祭。市形の日

。癸ノ祭。然ラツル未の日ニハ陣
ノ為テ六府をリ

を作を當日の使ハ

近所の中おつて

上〇戒檀堂開

帳 八日。江州比叡山よりあり諸人集
請き女人常ハ叡山よりあること
をいさるも今日ハ祥して東坂下花

橘の社より詣りてむ是を忌撫と云
花摘 亦月一傳教の母妙
徳婦人を祭るとり

山崎祭 八日。山城比叡宮ハ幡の
傍より大山祇の舎へ

地主祭 九日。清水比叡権現の堂
より林奥午刻還幸あり

その後獅子舞田楽ホ
義経より康富記より

練供養 十二日より十四日に至て大和比叡
もて法舎を修む十四日練供養

ありこれ中ね
娘の忌日あり

千團子 十六日
江州三

井古の鬼子母葬へて日諸人集福す
この葬一千の子あるを以てお子一
ふと供も

日光祭 十七日。十六
日例幣使

聖州日光山へ
糸向拝礼へ

和哥祭 十七日。
紀州和

哥山よりあり東照宮の所
祭一名離賀祭とも云

靈嚴

寺千部 朝日より十日迄。江戸
泳川乃本山吳嚴寺より

浄心寺千部 十九日
廿八日迄

花供 廿一日。高野山宝亀院の
住持代りあるを預る

王祭 申ノ日但二ツあれハ二申迄
江の比叡枝の神社ハ滋賀

の郡坂本よりあり
祭大巳等

神祭 此月
祭

神取 祭
祭

三枝祭 大和国添上郡率川阿波
の神社の祭る吉日を撰

吉田祭 中の子吉田
の春日ハ中

納言山蔭々
の建まきり ○駒牽 せせり廿八日
のうちは

四月はあきとあり八月も
名八国しはきと心ハとまり ○矢

數 洛東三十三間堂蓮華王院と
いふ池中杜若と壯觀とて凡

このふの矢數毎年四五月永日の
のうち晴天を候て作るふあり

江の嶋掃除浪 相州擾のまよ
嵐奇天この

嶋島月一日波濤突衝して屈のう
ちよ入るも天文洪波を以て屈中

の汚穢を拂ふと と ○松前渡
と掃除浪といふ

是ハ南部津輕の商人產物支
易の爲に帆夷松前へ渡るを

凡北海冬春の間常気強く波お
かやうからむ故に四月よりめて出

岸より ○梅天 唐人成都を以て
南京とす蜀中の

梅中則四月はありとて四月の
梅雨といふ熟梅天黄梅天といふ

つづきと略し ○和清の天
と梅天といふ

もと清和の天なるをと和清と鎮廟
しとハ清和の所名と避る事係氏

物語はハ和して ○煮酒 酒の気
味と失ハ

又清しとて 味と失ハ
する為は煮酒の法を用ふ ○余花 よく

京師とてと酒煮と称す 余花
春ふとて ○若葉 新樹 結 結

葉 葉と葉の 若葉の楓 若
葉交る事

葉の花 可なり葉 病葉之紅葉
のてく赤く

黄くとも又朽て ○夏木 立木 叶
黄くともとて

茂ふ木下闇 ○葉櫻 櫻の葉
茂ふ木下闇

夕花 山ろ木。若根ろ木。ニッ葉
ろ木。唐ろ木。岩本ろ木

司ろ草雪見草垣見草
以上夕の花

○夕花 夕の花
の異名あり

る雨と ○桐花 白桐。黄桐
紫桐。椅桐

三十

梧桐

相は似て皮青く棘皮を一日月の国を知るへくして十二

葉ありてより加えて十二葉の中小葉あり八其月国に鳳凰の栖する

ハ此 ○檀の花 杜仲思 仙木綿 ○枳

花 紫ハ橙のくく木 ○蜜柑の花 橘の白花を開く

大和本神小其花を ○柑子花 花 子と 乳柑花 久年母花ハ

也云 ○橙の花 ○柚花 花香甚 ○

金柑の花 白き云 ○雲州橘の

花 佛手柑の花 実熟く

花 橘 軒生草 昔草

一名と云ふの氏と云ふ ○厚朴の

花 葉櫛の葉に似て鋸葉 ○秦椒

花 山椒

○椶櫚の花 葉の初

花 柳の花 樹の

花 槐の花 月星咲

花 繡毬の花 山茱萸

花 要の花 金縷子

花 箱根茨 和名和太々

花 木天蓼 非今花

花 敷椿の花 覆

花 盆子樹 蛇莓

花 丹 富貴草 夜白草

花 山橘 豊橘

花 花王

花 花王

牡丹の 白牡丹 名は白く 重なる

紅牡丹 芍薬 名は赤く 重なる

の宰相。えび 杜若 燕子花木 草小馬蘭

以上杜若の異名。白花とハ白をの 唱ころう堂の名。又白花ハ芍薬を

いふもより万葉 罌粟の花

葵 二葉草。蜀葵。立葵 知

母の花 一八の花 異名を 紫羅草

阿片 鴉片。阿芙蓉。いふ 〇

踊花 白頂花 美人草

〇虞美人草 〇云 〇宝鐸の花

花 胡蝶花 〇

茶挽草 崔麥穂あり 〇刀豆

花 紫蘭花 紫又白

〇風車の花 〇虎耳草

虎耳ハ葉小よりて名づく 鴨足草

〇根都古草 針のやう

万葉 猪殃々 葎花とも云く 或ハ八重むらう

〇蘭の花 〇玉卷葛

芽出の 〇玉卷芭蕉 新葉未 開く

物名 〇荀 竹筍。初莖

淡竹筍 紫竹筍 味ハ俱 〇

篠筍 篠ハ小竹よりて俗 〇夏

〇夏

〇夏

〇夏

不如歸時々の鳴声 便伎羅といふとぞ

くまらハ時々のハチノミ 謝豹虫之蓋を以

梵語之とくりホトキス 老て死す云

此去時々の声ハサハ則死を乱常。四月よりりてをれぬや

故より親をりて謝豹といふ義つる之故は老のなあり乱常の

鷺乱常。四月よりりてをれぬや 鷓鴣時々の

ト同 諫鼓鳥の雌といふ

割葦鳥葦原雀 鷹の埤よきより

入春四月羽毛を如んとする時葦

繆繆とくきる葦の内は放ち羽毛

生して七月の中生あり 飛蟻蟹

旬日のことく云く飛蟻。飛蟻。

白蟻俗より白蟻俗より 蜉蝣蟹

とくものあり蟹 魚蟹

○松魚。肥蟹 鯉釣蟹

○鯉魚。堅魚蟹 鮓蟹

鯨牙小蟹 烏帽子魚蟹

て釣之蟹 豆相の海蟹

枯草 くさ 葉ももとの はももとの ○石藤 いそふぢ まつ

つらふ つらふ 葉ももとの はももとの ○盧陀草 ろだそう

仲より紫白の三種あり ななよりむらさきしろのさんしゆあり ○薔薇 ばい 蓮の はすの

昔婆三礼草の近世 むかしはさんれいそうのきんせい 南蛮より来る州之 なんばんよりくるしゅうの

なり ○綿蒔 わたまき ○麥秋 むぎあき 秋ハ百穀 あきハひやくこく 成熟の期之 じきくしゅくのき

々孟夏とくとも麦は種てハ 々もんげとくともむぎはくさてハ ○麥の むぎの

秋風 あきふう ○麦葉笛 むぎはふえ 二年 にねん

う州俱小 うしゅうきせう ○杜鵑 とくせん 子規 しき 郭公 くわくこう

麦の異名之 むぎのいみな 杜宇 とこ 百声 ひやくせい

名。魂迎 たまむかひ 名。田哥 でんか 名。早苗 さなへ 名。妻 つま

戀 こひ 名。田長 でんぢやう。無常 むじやう 名。夕預 ゆふよ 名。妹 い

背 せ 冥途鳥 めいどうとり 蜀王杜宇の古事 しよくわうとこ 四 よ

手の田長 てのでんぢやう 凡諸を道二指 おほむねをみちふたさし 杜鵑 とくせん

宿まると時ハ二指前より向ハ二指後 しゆくまるとときハふたさしめよりむかふふたさしあと

向ふ田長の田長ハ是とて名づく むかふでんぢやうのでんぢやうハこれとてなづく

四手を死出 しよてをしでしで ○菅直鳥 くさなちどり 是ハ時 こゝハとき

枯草 くさ 葉ももとの はももとの

仲より紫白の三種あり ななよりむらさきしろのさんしゆあり

昔婆三礼草の近世 むかしはさんれいそうのきんせい

なり ○綿蒔 わたまき ○麥秋 むぎあき

則秋之故より麦秋といふ すなはちあきのゆゑよりむぎあきといふ

秋風 あきふう ○麦葉笛 むぎはふえ

う州俱小 うしゅうきせう ○杜鵑 とくせん

麦の異名之 むぎのいみな 杜宇 とこ

名。魂迎 たまむかひ 名。田哥 でんか

戀 こひ 名。田長 でんぢやう。無常 むじやう

背 せ 冥途鳥 めいどうとり 蜀王杜宇の古事 しよくわうとこ

手の田長 てのでんぢやう 凡諸を道二指 おほむねをみちふたさし

宿まると時ハ二指前より向ハ二指後 しゆくまるとときハふたさしめよりむかふふたさしあと

向ふ田長の田長ハ是とて名づく むかふでんぢやうのでんぢやうハこれとてなづく

四手を死出 しよてをしでしで ○菅直鳥 くさなちどり

石藤 いそふぢ まつ

盧陀草 ろだそう

薔薇 ばい 蓮の はすの

綿蒔 わたまき 麥秋 むぎあき 秋ハ百穀 あきハひやくこく

麥の むぎの

麥葉笛 むぎはふえ 二年 にねん

杜鵑 とくせん 子規 しき 郭公 くわくこう

杜宇 とこ 百声 ひやくせい

早苗 さなへ 妻 つま

夕預 ゆふよ 妹 い

蜀王杜宇の古事 しよくわうとこ 四 よ

菅直鳥 くさなちどり 是ハ時 こゝハとき

俱伎羅 くきろ

謝豹 しやうへう 虫之蓋 むしのがさ

此虫時名の声ハ少ハ則死 こゝのむしときの名のこゑハ少ハすなはちしで

あまのほろもろを獲ることを獲るをいふ
しといふ漁者此もの漂流をいふ
いて獲るその獲
備はうろくし
○生郎 鯉の
と脯をうろくするものなり
江戸の俗名をいふなり
○鹿の

袋角 鹿茸。去るて四月より生
ふる角は袋のやうに袋角
と斗ふてい
○蚕の蛹。蚕繭。
蚕蛾を
作る時と
いごとく云
○枝至 木の枝のまむこ
雨蛙といふなり

茄子の花。○書頁。○弱
○夏三夏物 夏の月
○短夜暑。○涼
○汗衫汗巾。○日傘。青傘。
○夏の柳。○神柳。

○夏三夏物 夏の月
○短夜暑。○涼
○汗衫汗巾。○日傘。青傘。
○夏の柳。○神柳。
○夏三夏物 夏の月
○短夜暑。○涼
○汗衫汗巾。○日傘。青傘。
○夏の柳。○神柳。

○夏三夏物 夏の月
○短夜暑。○涼
○汗衫汗巾。○日傘。青傘。
○夏の柳。○神柳。

○夏三夏物 夏の月
○短夜暑。○涼
○汗衫汗巾。○日傘。青傘。
○夏の柳。○神柳。

○夏三夏物 夏の月
○短夜暑。○涼
○汗衫汗巾。○日傘。青傘。
○夏の柳。○神柳。

○夏三夏物 夏の月
○短夜暑。○涼
○汗衫汗巾。○日傘。青傘。
○夏の柳。○神柳。

○夏三夏物 夏の月
○短夜暑。○涼
○汗衫汗巾。○日傘。青傘。
○夏の柳。○神柳。

○夏三夏物 夏の月
○短夜暑。○涼
○汗衫汗巾。○日傘。青傘。
○夏の柳。○神柳。

○夏三夏物 夏の月
○短夜暑。○涼
○汗衫汗巾。○日傘。青傘。
○夏の柳。○神柳。

○螢。新螢。山。○蟪蛄。蚊の

巢とく虫。○目小見ぬ鳥。こま

と云。○蚊母鳥。口より蚊を

草。蚊とま虫。○子子。蚊とま

蝸牛。かきつむり或。○蛞蝓。虫

壁虎。○蚯蚓。歌女。あり。○

蝙蝠。伏翼。天鼠。仙鼠。○

鷄川。鷄。鷄舟。遺鷄。鷄細

魚を吐く。○魚梁。上り下りといふ

又妙あり。○水鯪。潮小浸

胡鮈。子あり。○水鯪。用中我肉

ふてハ毛を切落し。○水鯪。五月

○千。魚

鹽鳥賊。○鯉。洗ひ鱸

○津波頂。餅の小

○魚。休。外。谷川。あり

○目耳。魚。其声。ぐくといふ

○金角。小魚。之。京師。の人。ハ毛をそ

銀魚。○蟹。鯉。塩漬。志

鷺。蒼鷺。和名。み

○通鴨。凡。み。其。を。し。し。る。もの。ハ。必。を。ま

○方目鳥。○鮓。さ。さ。此。以。内。甚。大。之

○蟹。○蛇。鱗。鮓。もし。ハ。天。蟹

毛虫。○蛭。○火虫。夏。の。衣

夏。三十五

○螢。新螢。山。○蟪蛄。蚊の

巢とく虫。○目小見ぬ鳥。こま

と云。○蚊母鳥。口より蚊を

草。蚊とまを。○子子。子と化し

蝸牛。かきつむり或。○蛞蝓。中

壁虎。○蚯蚓。歌女。なり。○

蝙蝠。伏翼。天鼠。仙鼠。

鷄川。鷄飼。鷄舟。遣鷄。鷄御

魚を吐く。○魚梁。上り下りといふ

胡鮈。ふりの。○水鯪。潮小浸

ふてハ毛と切落し。○水鱧。五月

約山自然と多し。此時破辺

よろと細くて江二毛と水鱧と云

鱧。○干鰯。名古屋。○干鰯

塩鳥賊。○鰾。○洗ひ鱸

ちるものと。○津波頭。餅の小

と。○魚。休。谷川よりあり

小魚之京師の人ハ毛を多

と。○金。○銀魚。○鰻。○主

鷺。蒼鷺。和名み

凡ある物をしるものハ必

古栗へくものものをよめるか

さるものと。○方目鳥。○鰻

鰻。鰻。○鰻。○鰻。○鰻

毛虫。○蜘蛛。○火虫。夏の

とらんと
てらんとあり
○結夏
夏籠。夏行。夏断。

夏虫。夏経。夏花。凡俗者四月十六日より七月十六日まで一夏九旬の間

禁足して安
○海羅干と○

木布
布のいぬたざらざら
○單

物內衣
○新麥
ふきものを
二月のまき

○切麥
冷
煮冷

○扇
異名。氷紈。雪雀。
招涼。かへり

○風うず
伏翼
扇はもと蛇
をみて作り

○夏雲
夏風
の

○夏雲
夏風
の

○夏雲
夏風
の

○夏雲
夏風
の

○夏雲
夏風
の

○夏雲
夏風
の

○夏雲
夏風
の

○夏雲
夏風
の

○夏雲
夏風
の

○夏雲
夏風
の

○夏雲
夏風
の

○夏雲
夏風
の

○夏雲
夏風
の

○夏雲
夏風
の

○夏雲
夏風
の

○夏雲
夏風
の

○夏雲
夏風
の

とらんと
てくるあり
○結夏けつげ
夏なつの夏なつ断ことわり。

夏虫。夏経。夏花。凡おほ者四月十六日より七月十六日までの一夏九旬の間

禁足して安やす。
○海羅干かいらかんと○

木布もふ
布のいぬたざらざら
○單ひとへ

物もの内衣うちえ○新麥しんむぎ
おきもの
三月のまき

○切麥きりむぎ煮冷ひや

○冷ひや○扇あふぎ
異名。氷純。雪雀。
回風。招涼。かへり

○風ふううう牝め伏翼ふくよく
扇あふぎハムと蝙蝠ひょうぶ
をみて作り

出でるゆゑ扇あふぎと虫むしはかへりといふ
枕まくら子こ綫いとはたみといふといふ

の去年こぞのか
團扇だんせん○夏風なつふうの

風ふうハ中なかつを吹く
物ものと虫むし出でるといふ
○夏雲なつぐも夏霞なつがは

暑あつは西にしの方ほう赤くして南みなみへ
白しろきハ日ひれといふといふ

五月ごご庭賓ていひん
庭賓ハ庭ていハ下したに
て至いたる庭ていハ客きやくなり

陽やう光くわうこ小こきとあるを陰いん気き主しゅ
人ひとと成なりて客きやくを殺ころするの義ぎなり
○芒ぼう

種しゅ圃ぼ小満せうまんの後のち十じゅう
五日斗と酉う小こまき
○夏至げし圃ぼ芒ぼう種しゅの

後のち十五日斗と午う小こまきとあり。茂林もうりん。
鶉う月げつ。皐こう月げつ。南詔なんてう。蒲月ぼげつ。夏五なつご。

夏半なつはん。盛夏せうなつ。さ月げつ。早苗月さなづき。いつ
色月いろげつ。梅うめの色月いろげつ。きくさ月げつ。吹ふき

月つき。きくさ月げつ
○賀茂かもちの足揃あしぞろ

朝あさ日ひ至いたハ上かみ賀茂かもちの氏人うぢひと等ら無馬むまとて
それ速すみと争あらそひをあらわさの甲乙こうえつとさ

めを是こゝ競きやうるの
○松本祭まつもとまつり
新日江しんひえ州大津しゅうおほつ

松本村まつもとむら之祭まつり平へい也や大明神だいめいじんより
て神体かみ仁徳にとく天皇てんかうが唐からなり

菖蒲しょうぶと献けん也や
三日を日内裡にちのうちに
○

菖蒲しょうぶの壘うゑ
友とも友ともの近傍きんぱうを唐からの六む
府ふあやめの壘うゑと有ある

の階かいの東ひがしより又また時の至いたる
○早瓜さうか

をわけて月つきくおくとあり

と供を

四日山城の陣國より内膳
司の面、早瓜と借一を

○菖蒲膏

四日都鄙となく
ちまの粉よあやめ

をふくすハ仲夏の時節毒虫多く生
まるとより 是とふくすんるよりふく

蓬ふく

是七あや
め小同ド

○端午

端午と
ハ初五

といふごとく月ハ午のみの始あり
日ハ午の五の始あり 端とハけ

○天中の節

五日午の
刺をう

てふ

○艾虎

艾人。艾虎ハ艾を
以て虎の形を造り

或ハ糸をまき小虎と一は艾
葉よりけり内人多いといふあり

天師を画く

端午より人を呼
を画さるをま

又泥塑の天師を作り艾を以髪鬚と
一蒜を拳と一門よりきて邪をさ

○儀方と書

五月五日寸許の
紙は儀方の三を

をちて家の四方に貼まれ

○粽

ちまき。角黍。銀粽。艾粽。秤鉾
粽。九子粽。笹粽。飴粽。飾粽。

かざり粽ちまきハ千巻なりおおくを
といふをふてまて毒虫とまをま

といふ ちまき粽 飾

堦 けづり掛
のかぶ

○五日異名

重五
重午

○端五。端陽。地臘。蒲節。
鮮粽。天中。艾節。朱符。

菖蒲引

あやう新。沼はちと
小ありちて引をり

菖蒲鬘

聖武帝の時小初ふ
より 続日本紀小出たり

菖蒲案

菖蒲生菰を黒
木の机よてなる

蒲枕菖蒲帷子

菖蒲
浴衣

蘭湯小浴を菖蒲湯

五日蒲湯は浴一芳料は浴を蘭
ハ沢氣之その勾蘭葉ハあらは

菖蒲酒

石菖を切て酒は浸
て是を吞雄黄をサ

なうり加えてすまきくす
一切の邪気をはくする
菖蒲

刀いさいさへる蒲を以てかきくす
本刀のさきやを蒲につくりて
菖

蒲胃くさ削葱の甲にまじし草
長き根

菖蒲なり水府六年五月五日あや
りの根合せといふくありその式あ
合のく

一とうや
○幟のぼり飾甲。その日幟甲
の時蒙古の絨来より早良親王討
手として出陣あり親王伏見ふち
の赤木の社に祈る時は五月五日忽

地は風吹き海あきく戦ひて
勝くをほり
○棟あしちと佩かぶ五日
時例よりもの

葉をとりとを佩き
ハ悪気を返ふあり
○標あしち菖あや
めのかくおはふくくも田舎ハ

端午の日標の葉を菖蒲にありそ
せんたんと
○薬日くすりひ五日くまじ日
りふ木なり

と取或ハ九散調合せる
○薬玉
よき日なれとたり

五月のあともつり。今日菖蒲を五
色の糸にて調な（菖蒲はくくは悪気
と辨ふくやあま玉ぬ
きあやめともより

摘と五月五日と本日として
○競きこみ
この日一切の葉草と採なり

馬うま馬ハ四五月の
○百草ひゃくそうと闘たたかを
唐の中宗の時安楽公主端午
ふ百草をたてうへむと云て

命いのち縷いと襪はき繒そう五絲ごし絲いと朱索しゆさく
○長

五色ごしき縷いと壽索しゆさく條達じょうたつ條脱じょうだつ
以上の方よ
○印地打いんぢうち童の小き
いふ葉玉あり

とあまをり射より起るに印地と
ハつての地の地は付て印のくく
収より
○競渡けいど。舟車。水鳥
てなつく

競渡ハ越王勾
踐は起る五月五日の競渡ハ屈原を
と扱ふんとくを以てなり後逐よ

戦とす屈原忠の日を以汨羅小死
も人船を以これと救ふ今の競渡こ

まその選
凡ことぞ
○左近の真手結
近

の馬場にて騎射をなすなり五月三日
ハた近の荒手結四日ハた近の荒手
結五日ハた近の真手結六日
ハた近の真手結なり云々 ○むと

りの日
この日五月隨身禰のまじり
と打てゑるゆゑむとりの日
と云ふなりむとりのハ
引折の器なり云々 ○粉團を射

唐の宮中端午毎は粉團角黍を
造りて是を射るあはるもの食ふ
ことを得る蓋粉團滑膩やて射
る一都中盛は此戯をなすや云々 ○

桃印符
桃ハ西方五木
の精也仙木之
能邪気と壓伏し百鬼を制す今の
人門上は柳符を打て邪を避ふ
こと云々 ○鳥の糞鳥の糞

五月五日虎の糞とつらう百友は虎の
又虎の糞と争んもその惡を以て
のゆゑ云々云々 ○鳩の舌と云

騎射
五月五日
それ夫と去る時ハ浩と聲
五月五日昔ハ豊楽院にて騎射を
行はせしなり是と馬方と云 ○

神水
重五の日午の時雨ふらハ急
な竹と切へ一竿の中はまぐ
る神水あり是と吞めハ百病と
治も或そ丸薬を製まぜー ○

加茂競馬
五日この競馬ハ七十二
代堀川院室治七年五
穀成就天下泰平の爲始て十番是
の馬料と寄らば例年是と行也

藤の赤林祭
五日山城国
紀伊郡深岬
なり

新宮祭
五日
山の南よりあり
る神舎人親王之
新宮祭ハ三井古の山中より
是と執事あるハ新羅明神 ○生

玉の流鏑馬
五日
郡天王古の辺はあ
りある所の二座
天生玉の神なり ○六日菖蒲
江

戸の俗屋上ハ昔所の菖蒲とく
りて菖蒲湯とく是は浴をよき
三十九

五日の夜の雨露と受る
ふりて神水よるもの感

○宇治

祭

八日離宮の社ハ山城必宇治郡

宇治の里ハありあるふ二坐
応神天皇荒道雅

○今宮祭

九日之今十五日と用中山城必愛宕
郡紫野よりある神午頭天皇な

○室祭

十三日枋州室の津
ハ大社ありある神

上賀茂月例
祭五月十三日

○竹植ふ日

五月十三日と竹酔日とす又竹
迷日と云此日竹を植ふ必活と云

雨社祭

廿三日江州下坂本より唐
崎に至るの路傍ハ雨社

あり南ハ若宮權現北ハ酒井
大明神之上大本居神と崇む

○有

無の日

廿五日ハ村上天皇の御
国忌之依て禁裏ハ政

事あり然れども急用あれば
行ふ有るなりと云

○住

吉の御田植

廿八日枋州住吉ハ
あり神田と植ふ

○大原志

丹波志

り祭神一坐伊弉並尊伊弉諾尊
天照大神を以て三坐とす此社へ
詣りて昔よりおろろと云ふ
お日醜と醸して神事も供客
小も餐忘し又商売のものも
えく世俗酒祭といふと云

御田扇

伊勢山岡太神宮の内
田植之此社の宝前ハ

て神より修行の扇ありと云ふ
田扇といふ扇を以て扇をあつて風
情をもちと云ふと云ふも患なりや
いふ又産婦ハ此扇を求てお肉を
のねよくまは極め

○五月鏡

五

て産安しやと云ふ
昔唐山楊子江より銅を百と云ふ
ひての鏡を銚と云ふといふと云

り是を以て本銘
おろろと云ふ

○虎が雨

五月
廿八日

多く雨ふると虎々候の雨といふ是
ハ昔大砂の虎といふお女がお砂が
とお別る候變じて雨と云ふなり
世俗々日の雨ハ虎が候なりといふ

賑給 もハ銭 是ハ民ノ米俵等と
ウチナリ欽明天皇の内宇

より ハ 祇園の神輿洗
り ハ

晦日祇園の社は諸名各社の祭を
結て禍災と拔ふ第後といふ名

入て神 ハ 富士垢離 ハ 五月廿五日
真洗あり

二日すて富士の行人毎日河辺に
出て垢離と云ふ富士権現と云

持て是富士系 ハ 五月雨 ハ 雨。
皆小同しといふ

梅雨ささきハ五月雨クタルの
略さきハ雨ハ云々して略すもの

入梅 ハ 墜栗花。國人立玉の流庚
の日よりさきを以入梅といふ

持の後壬の日よりさき ハ 五月闇
を以入梅といふ

白と黒 ハ 白くハ入梅のうちに
小る陰ありといふ

晴んともる ハ さきと云ふ。黒と
ハ云々かき曇りてハ陰云々といふ

内 ハ 又吐る ハ 半夏生 ハ 五月
中より

十日あり世俗の目と称して
竹の子と食つて是竹節虫と生

まゐる ハ 蟬の初声 ハ 鶯音
あり

と入 ハ 反舌無声 ハ 礼記の疏
反舌と蝦蟇

○帷 ハ 秋名ハ云帷ハ固く以て
自障と云之和名架簾

衢 ハ 花 ハ 古代帷の染色と云り
況てトガ云といふと云

略してトガ云といふ是云帷
の云々名と云ふと云云

字ハ假名 ハ 羅 ハ 齊云と云
りト云と云

若竹 ハ 今年竹 ハ 外玉草河玉
新竹

草 ハ 竹 ハ 葉 ハ 葉 ハ 葉 ハ 葉 ハ 葉
の葉名

直あり ハ 業平竹 ハ 雄竹の云々
竹ハ用中

葉竹 ハ 似たり女竹男竹の
観音

竹 ハ 葉 ハ 葉 ハ 葉 ハ 葉 ハ 葉
竹 ハ 葉 ハ 葉 ハ 葉 ハ 葉 ハ 葉

○早苗。早苗取。
○早少女

○棟の花 棟或ハ樗ニ作ル又
雪見草といふ 苦

棟もろも俗しやう張はり
ていししやう稱しやう檀たん○
榊しやうの花はな
神しやう樹じゆは

作る誤て排ちやう○山さん梔しのの花はな。木
ま排ハ俗字之

越擁「同」はいとぬ色。うゝぬ。いと
おろろ。おとその名はよくてか

くハ
○石榴の花
古来より石榴
三種あり本紅

千葉白千葉黄色千葉之近世
桃色ありかりて此は愛をべし

栗の花の合あは歡むの花
 上うへ半はん 白しろく下した

半ハ紅ナリ葉ハ緑ナリとて夜ハ合
 其秘ヲ述スル如キモノナリ

木の中脈
あるべし
○天南星
一名常掌
和名おんほ

○五月躑躅 杜鵑花と云て

又む々ハコウミと申ヨあり
 の墨種類多クそのうち木と

賞するもの松の由「けー」おらま紅

○南天の花

男おとこ装まう。滌はく菽しゆく。揚やう烟えん。牛ぎう筋きん。まぐの名

筋の故は半筋を食ふと
 食ふと食ふと食ふと

忍冬ニンドウの花
冬ふゆと度たびて凋しぼさる
冬ふゆの名あり 金

銀花 忍冬の
系なり ○未央柳 其系
柳より

似て梅雨の時
 〇 瞿麥 なでしこ
 單弁 なでしこ

ものゝと名竹と名づけ^{ちんぼん}千分するもの
と洛陽花と名づく^{ちんぼん}種愛衆は抽を

故に松子より艶色千年
 と粧ふゆえに芳名とて
 天和

撫子きんし唐撫子からきんし鷺撫子さぎきんし藤

撫子川原撫子
大和撫子八紅
梅色之唐撫

すハ色々の不あり梅子ハ色の紅く
よりく名づけ菱接子ハ色よりて
の名ま
石竹 二種とまきとも接
子と因物とまきハ紫
おもふ竹とま
てーいともあり
目ぐらともま

りま下とれたま
のまきあり ○

女貞 貞木。葉もちの葉細く白
さ葉開く葉ハ接子似てま

さあゆえん接
接又ま接とま
○ 藜樹 四五月の
白きと開く

なり紫ハ女貞よ
似てま光あり
○ 百合 強羅
重箱 車

百合 ぶむら車の輪のまきとまきと
り接子とまきとト野の日光の産

ハまき色より大和より
出るハ赤色よりとま
○ 透百合 夏州

出る
あり 康の子百合博多百合相

百合 山丹。百合よ似てまきとま
小さハ紫ハ柳よ似てまきとま

百合 花のまきとま
○ 袂百合 花ハ深山
紫陽花

紫陽花 一名四葩の花。花紫とま
小手鞠よ似て唐の白

来天よりとま紫
陽と名つくとも
○ 紅の花 紅
藍花

○ 末摘花 花の色紅よりて紫藍よ
似たりなり藍の名あり此花ハ漢の

張騫よりて種と天竺より得て
る本朝へ傳へるハ異より種を得る

る
○ 下毛の花 漢名末詳小木之
花の色ま紅あり

花 一名酸母片紫とまきとま
花の色ま紅あり

○ 酢漿草の
花 一名酸母片紫とまきとま

六月より八月に至る
○ 萱草の花

○ 夏菊
花 一名酸母片紫とまきとま

○ 鉄線の花 花譜
及ハ

○ 鉄線の花 花譜
及ハ

○ 鉄線の花 花譜
及ハ

三才奇珍中も纏枝牡丹と載り
是は鉄線の花とあるむといふ所あり ○

朝露草 一名銀錢花といふ名の形
楮に似て白青うるこあ

り高サ一尺半枝ありぬ ○蚊帳釣

草 莎草ホの類く留の葉よ ○天
似て其くさくさあり

門冬花 和名をまろくさ一名くさ
せきさうつら。海辺に生え

ものくさハ杉の ○龍葵 莖葉あふ
らく和こさあり ひよ似く

実ハ茄子の小 ○石菖 花菖
さた小似り

蒲 莖あやめ ○紫羅欄花 ○

時計草 本日の内より多く、か
くも依て時計の名あり ○

花うつし 薦のふりなり ○菱の花
只かづとも云

この花日は背て昼合一夜 ○真菰
花月こまきうひて轉移

薊 ○藻薊 船 ○和布
藻薊の花

刈 石薊之紀州加田 ○海帶
より出るとカタキといふ

薊 ○胡麻時 ○柜時 ○李

杏子 甜梅 ○梅漬 梅干 梅
と云

剥 皮肉を剥きけりて晒 青梅餅
乾し梅酸とするなり

梅 梅雨の時熟まその肉 楊梅氣
黄ゆで津あく液多し

條挑 ○無花果 映日花。優
イナジツ 曇花と云く

て実 ○天仙菓 紀州山中より
のるこ イヌビハ 茶あぐて実を

結ふ枇杷に似て小 ○枇杷 ○桑
さう小兒好く食ふ

實 正字 ○薑 ○生胡桃 ○

早松茸 五月小虫 ○茄子 異名
さうしん 五とつと

畚瓜。草鼈甲俗説は秋茄子嫁
食もるといふといふ下よりいふ信へ

集のふもあり 初茄子 正名。新
集のふもあり

初茄子 正名。新
集のふもあり

茹よく出る物あり ○瓜の花 諸瓜はよく

早瓜 浅瓜。白瓜。干瓜。青瓜。胡瓜 黄瓜 姫

瓜 色白く甘きゆえ姫瓜と云ふ枕菜

児のう ○栽植る 種植移栽

る 菊椿梨 ○壅培 橙橘菊牡丹

ふこや ○獸狩 射 ○照射 是

救済く交山のくらきふ火串と云ふ

鹿の子 鹿弾 ○魚藻打 魚

ハ川中よ木を打て綱な ○水雞 ○

水鳥の巢 浮巢 諸

鳥毛を替 羽脱を云ふ此法を

けろ ○毛を替る鷹 此以ゆて

○黒鳧 大さくもて黒く鳧より

鳧の子 俗鴨と云ふ誤り 輕鳧の

子 かるの子ハも ○鳴鳴初 俗よ

舌をハつて云ふハ非なり ○鵲の

巢 堂系又巢 ○初蟬 蟬の異名

ハ 打磬蟬 空蟬とも ○鰾 室鰾

鰾 江に芝浦にある ○

蟹子 酒甕の上と花火あり後小蠅と

水馬 鯉虫。鮎 ○鼓虫 黒さ虫

一名。もううせ漏や云々 ○蛇衣と

脱 蛇脱時と云ふは口不浄と云

脱 是ハ即脱け或ハ大に飽時ハ又脱

六月

清補奥義抄は此月の農事と
もいふをまつさへるはよき月と

よ若田東唐の説はこま月と八かきま
る月の上下と時をなるとり北
説はまゝ
○林鍾 圍林鍾ハ林ハ衆
がふと
るくく物が多くあつるをいふ説を
俗鍾と鐘といて林の鐘をいふもの
あり大なる誤
○小暑 圍夏至の
後十五日斗

一いさ
○大暑 圍小暑後十五日斗未
まあり
○季夏。瓜期。且月。邇月。朔月
。陽氷。風より月。鳴神月。常夏
月。蟬の羽月。
晩夏。水無月。

氷室 朝日氷室の水ハ四月朝日より
九月晦日迄献まるとも今日
とさし
○氷室の御調 今日圍し
より氷を
秋ま
るこ 氷れおもの氷水ま
おものハ熱月まゝハ内膳ふも
氷を用ふといふ氷水まゝハ内膳氏

氷室の雪
幽谷すれば消砂り
くくまあると
月と夏砂る
○水餅祝 朝日。い
みとより
けり遠風より民間捲餅又
こまを氷まはるとさし
○勝

曼参 朝日接州四天王寺の西門は
あり本尊愛染明王毎年
この日開帳を是と
勝曼愛染明王といふ
○富士詣 朝
日
諸王の民人不
二山へをふこ
○江戸浅間参 朝
日
浅草駒込本不さる四馬のふり
桂現の社へ系詣するこ土産は麦売
の蛇ふ色細
○忌日の御飯 朝日
忌火
とハ不浄の火と
○一夜酒 朝日
けを日
打ゆるこさし

是はハ明日ハ供はるゆえは
名つけるさしその禮をいふ
○六月
四日傳教舎又長持舎といふこ
是ハ傳教大師の忌日に勅使宅

夏
四十六

六月

清浦奥義抄は此月農事と
もなままつさるるなよみな月と

よ若田東唐の説はこま月と八かきま
る月の上下と時どなりとより此
説よまゝ
○林鍾 こけしう 園林鍾ハ林ハ衆
づづー

るくく之物の多くあつるをいふ
を俗鍾と鐘とて林の鐘をいふもの

あり大なる誤
○小暑 園夏至の
後十五日斗

一いさ
○大暑 園小暑後十五日斗未
小建と大暑とを

○季夏。瓜期。且月。邇月。朝月
。陽氷。風より月。鳴神月。常夏

月。蟬の羽月。
晩夏。水無月。

氷室 朝日氷室の水ハ四月朝日より
九月晦日迄献まきとも今日

とちり
○氷室の御調 今日園
より氷を

秋ま
氷れおもの氷水と
の氷

おものハ熱月まきハ序昭ふ
氷を用ふといふ氷水とてハ深氏

氷室の雪
氷室の雪

幽谷すれハ消残り
氷室の櫻 五

月とま残る
○水餅祝 朝日。ハ
氷

ををいふ
○暎 あま

曼参 朝日接州四天王寺の西門
あり奉尊愛染明王毎

この日開帳之見と
○富士詣

諸山の民人不
○江戸浅間参 をかん

二山一をふ
浅草駒込本町なる四つ橋のふ

桂現の社へ系詣あるこ土産ま
の蛇吞色網

○忌日の御飯 いひ

とハ不浄の火を
○一夜酒 ひとよ

打ゆることなり
造是ハ明日ハ供はるゆえ
名つけらるるその醴をいふ

會 四日傳教舎又長持舎と
是ハ傳教大師の忌日に勅

山の麓あり弘仁十四年始て行る ○御躰の御

ト十日是ハ神祇友の人本宮よこ

り王上の玉躰は由はあら

んくを占 ○月次祭 是ハ六月

ひ泰まろこ 十二月は

二度諸社へ市幣をもちらせゆ

らうちり弘仁年中よりトすふ ○

神今食 六月十一日伊勢太神宮を

イタマクラ 勸請やせめひ天子を

つら神膳を供 ○解齋の御

せせせふとくや 粥 十二日この日の市坐の大床よて

臺壁一脚をきて市粥赤き土

器は和布の市汁物をふらきそ

り二口めさきて市茹をいふと

あ ○鳥越祭 九日この神社ハ

り 所はあり社主徳木氏より別當を

長来ちといふ系社天児登根命日

本武二 坐と云 ○祇園祭 七日十四日の人

融院天禄元年六月十四日よりト

する此祭は十七本の陣と出ま

長刀鉾。函谷鉾。洲濱鉾。雞鉾

。菊水鉾。月鉾三本船鉾等こ

その外 ○河原涼こ 六月七日よ

り十八日のお

よいりて四条

河原の涼こ

のこめ大い流疫せう官に

なり神田明神の社地を勸請ある

所の祇園三社の神楽をひいて街

頭を渡所よりなり疫を拂ふこ

い ○祇園臨時祭 十五日田融

ふ 依の市宇天

延三年六月十七日

初て行つるこあり

○巖島祭 十

日藝州佐伯郡宮島よりありある神

三聖市杵島姫神田々娘湍織津姫

あ ○竹生島祭 十五日江州の湖

り 中より宇賀

神魂聖武天皇天平三年

辛未竹生島の神現せと云

○津島祭

十四日十五日午頭天王の祭に尾張

海辺郡門前の庄後波の里よりあり

社より西海の對するより後

尾張の海辺に移る仍てその旧地

夏 四十七

名を奉りて
津島といふ
○芦の神輿
津島
は於て

毎年芦の神輿といふとあり周
中の疫疾変異ホとトモ
○

熱田祭
神社尾张国年魚市郡江崎松妬島千電の々よあ

り祭神
五生こ
○江戸山王祭
十五日神社江戸水田

余所
あり
○氷川祭
江戸表板よりあり風土記より小北

鳥さき稲田此咩
○浅草寺び

んざら躍
十五日江戸金亀山浅草あは於て々日びん

○かつ

嘉定錢
嘉定喰
うつろハ嘉定面

宝を中略ちありとそ又二月十六
日の嘉定ハラの終の終は嘉定通

室とあまハ勝といふ名詮
○相國

寺懺法
十七日洛の相國も園工に於て懺法と修をすく園

と懺法不といふ松風の鞍小狐の
鏡南さの弥宝ありとあハ祥家に
○

伊勢祭礼
十六日十七日外宮の所祭礼
○博

多祭
十五日博田櫛内の神ハ筑前国那珂郡よりあり祭神中多ハ櫛稻内姫命右馬ハ祇園午頭天
○

志渡寺祭
十五日より十七日まで淡州河那郡補陀洛

山清光院志渡も其の年さハ十二面
観音より補陀洛観音の所重作之
ふ
○西園寺殿妙音講
十六日或

ハ十七日西園寺家妙音講と修
もろる。妙音天ハ弁才天あり
○

座頭の涼
十九日盲人清聚庵は余り納涼舎を行

ふ是と
○鞍馬の竹切
廿日洛外鞍馬さ

はあり竹切といふハ数千の竹と截
て天と祀る是毒蛇と退治とむ

四十八

名を奉りて ○芦の神輿 津島
津島と云ふ

毎年芦の神輿と云ふとあり周
中の疫疾変異ホと云ふ ○

熱田祭 神社尾張国年魚市郡江
崎松崎島千竈の々

り祭神 ○江戸山王祭 十五日神社
江戸水田

五生こ 江戸水田

余所 ○氷川祭 江戸水田あり
風土記より小六此

鳥 鳥 ○浅草寺び

ん ん 躍 十五日江戸金竜山浅
草あり於てそ日びん

画 画 ○かつ

嘉定錢 嘉定喰 嘉定喰

宝 宝 中略 中略 ありとそ又二月十二
日の嘉定ハラの糸の終り嘉定通

室 室 ありハ勝と云ふ名詮 ○相國

寺懺法 十七日洛の相國も園工
於て懺法と修をす園

と懺法 と懺法 ありハ松風の後小松の
鏡南寺の珍宝ありとあるハ釋家

伊勢祭札 十六日十七日外
宮の所祭礼 ○博

多祭 十五日博多櫛田の神ハ筑前
国那珂郡あり祭神中多

ハ櫛田姫命 右属ハ祇園午頭天
王右属ハ天照皇太神宮勸清宮 ○

志渡寺祭 十五日より十七日まで
於州宮河郡補陀洛

山清光院志渡寺 山清光院志渡寺 の中ハ十二面
観音ありと補陀洛観音の所惠作之

ふ ○西園寺殿妙音講 十六
日或

ハ十七日西園寺家妙音講と修
ありと。妙音天ハ弁才天あり ○

座頭の涼 十九日盲人清聚庵
ありと納涼會を行

ふ是と ○鞍馬の竹切 廿日洛外
鞍馬寺

はあり竹切と云ふハ数十の竹を截
て天と祀る是毒蛇と退治と云ふ

四十八

るの法み ○御手洗詣みでらぎ 十九日とより晦日み

すて加茂の市 ○紵の納涼なすのりやう 山城やまぎ 社やしろにてある

宕郡たうぐんあり紵なす或ハ只洲ひとしほは作るつくを 紵なすの宮みやと云蓋地名かきふちよりて是と

称なづき ○上難波の御祓みそぎ 攝州いづ東とう 生郡なまぐん 坂さか 云い 高津たかつのまよりありこの社やしろハ生なまのなまのなま

あり糸いと林はやし比賣ひめ古曾ふるそうの神かみ本名ほんなハ 下照姫したてりひめ 廿二日にふたに

命いのちあり ○坐摩さまの御祓みそぎ 抄州しうしう西せい 成郡なりぐん坐摩さま太神宮たいかみぐう来きたて代しろ子この市民しみんよりてある

○愛宕あいだて 千日詣せんじちぎ 廿四日にふたに丹波国たんぱくに素因郡すゐんぐん水雄みづゆう

のの小こよりあり糸いとるる非伊勢ひいせ並なら 小のこの産うぶ灵たまるる此日このひ糸詣いとぎ

まれも千度せんたはあると云 ○橋立はしだて 祭まつり 廿五日にふたに丹波たんぱ後ご云い与よ依郡いぐん良らの方かた

崎さきあり是こゝと天あまの橋はしと云又またの 名なと久志くし淡たん或あるハ久志くしの渡わたと名なつ

天満てんまんの御祓みそぎ 廿五日にふたに特州とくしう西成郡せいせいぐん 天満てんまんよりありある

神かみ菱やなぎ家けのの灵たま之の ○住吉すまぎの御祓みそぎ 晦日み 毎年まいねん

六月むつき晦日み但ただと小こ ○加茂水無月かものみづなづき 月つきハ廿九日にふたにあり

能のう 六月むつき晦日み夜よ上かみ賀茂かもちの祓はら 音おと来きたあり乃すなはチ祓はらと修しゆと云

名越なごの祓はら 荒和あらわの祓はら名越なごとハ 夏越なつごの畧りやくあり

剋金こくきんと剋こと云 ○麻あの葉は流ながと と祓はらふ

麻あの葉はと切きて幣へいと 一ひと後ごなる川がはは流ながと云

○唐崎祭たうさきまつり 晦日み近江国おうみくに唐崎たうさき大明神だいめいじんハ

女め別當べつたう山やま大宮だいみやう初顯しつけんの地ちあり 折おり 晦日み竹たけより主上しゆじやうの所ところより寸すん

法はふととりてそ祓はらはちあてく 小こよりと云よりよりの令しるしぬ宮みや

まは依よて所ところ祓はらとつくむる

大祓だいはら 晦日み百友ひやくゆう悉しつく朱しゆ菰こも ○茅ち 門かどはありて祓はらと云

の輪りん 午頭ごとう天王てんわうの種たね民たみ来きたる教きやう とかくきバ災難さいなんと通とほる

管貫くわんくわん ありその輪りんちやふて

茅の薙と同物なり茅薙
ホを以つくるものなり ○形代

○極お序扱きする人形を作りて
そまを擲て身の災難を扱ひ川は流を

なり ○夏神樂川社 川辺は柵を
り 扱へて神

をすつりて 夏扱夕扱御扱

川○鎮火祭 晦日ト部氏の人
火を打て官城の

四方の隅よりあつる
火災をふせがんぬなり ○道饗祭

晦日是れ郡の四方より鬼魁の他
方より来るを入きしらぬるなり

しは仕扱を ○小蠅ふけ神 蠅
偽へあつる

こくく悪邪多きをいふ日本紀
又出つ是れ夏の熱邪をいふ

施米 東山西山小山をくはある
つさるき法師をくは米を

ホを施さ ○雷鳴の陣 かのな
るこくく

三度高くはまはたね以下近所の
次ねるなり

○大山参 七月
と守護なる

より及び近國の俗相州大山石
き大権現へ糸詣きを初山と

ソ又七月分盆中は登 ○温風黄
山なるを盆山といふ

雀風 六月中東南の風あり ○鷹
まはをと黄雀風と云

羽遣いと學ふ 雛の志をく飛
いといふ

腐草螢とふる 月 ○溽暑暑
令

三日○夕立 白雨。凍 ○三伏
雨。暑雨

三句。夏至の分三の庫を初伏と
四の庫を中伏と立秋の後初の庚

を末伏とまき ○天祝の節 會
を三伏といふ 要

云宋の宗祥四年詔して ○土用
六月六日を天祝の節といふ

土用干 ○虫干 ○鴛鴦涼
○虫拂

まへて水多の類なり ○露涼一風
も涼しといふなり

薰る ○青嵐

夏木立の梢の
緑をよさめら

をよめ

○雲峰

夏雲多奇峰と
陶淵明の詩あり

り ○炎天日盛

日やけ 日傘
。日まけ

浚井

曝井としふ
井戸の底の水

○納涼

。川
系涼

○清水

。川
。舟遊び。波のうら

○掛香

。清水結。清水汲。
。泉。清水せく。清うしと

薰衣香

。句
い袋

○水掛合

。反敷
き小

け合まるをいふ

○萬鬼行

後
漢

の時伏日ハ鬼出るとて尽目戸
を閉或ハ湯餅を作りて辟鬼と名

づい

○竹婦人

。竹。脚馬
。抱籠をて

竹の籠をいふ或ハ足をしふせ
ふじて涼しむるうつハしのこ

簞枕

。竹を以てをを作るこ
。涼しむるうつハしのこ

○川

狩

。持細。撒網

○魚金

。青魚
。その

色まじりし名つく大なるものを
鰻魚と名つく和名あまハとあり海

中ふて

○海月取

海母取
とし虫

○鶴

鷹

。鷹はいさうをとらまふあり要
中ハハの羽をうしむる以れ

ハ飛し弱

○練雲雀

。此は毛
とて

あるをあらうし信

○蠨

。手斧
。臍俗は

水道蠅といふものなり夏をよめ
生るものなり房総三州の俗に

是をよめ

○燈蛾

。飛蛾。形は黄
臍といふ

蝶は似て

○空蟬

。まづての聲を
さすていふ

蟬の諸声

。多くうたひを
いふ

○蟬の

脱俗よりぬ

○蟬時雨

。蟬の多く
雨をいふ

よてあまきハ蟬の

○残蠅

。秋ま
。残る

薰る ○青山あしやま

夏木立の梢の
緑をみさあらし

雲峰うんのほう

夏雲なぐもの奇峰きほうと
陶淵明たうえんめいの詩あり

○炎天えんてん日盛ひさかた

日やけひさかた
日傘ひさかた

浚井しゅんせい曝井はくせいとし

○納涼なつしょう。川
系涼

○清水しみず

○清水しみず

○掛香かけかう

○掛香かけかう

薰衣香くんいかう。句

○水掛合みずかけあひ。反戾はんれき

○萬鬼行まんきこう

後漢こうかん

○竹婦人ちくふじん

竹ちく。脚馬きゃくば

○川かわ

○川かわ

○魚うしほ

○魚うしほ

○練雲雀れんうんせき

○練雲雀れんうんせき

○海月取かいげつと

海母取かいぼと

○鷓鴣けしこ

○鷓鴣けしこ

○空蟬くうせみ

○空蟬くうせみ

○燈蛾とうが

○燈蛾とうが

○蛸たこ

○蛸たこ

○練雲雀れんうんせき

○練雲雀れんうんせき

○海月取かいげつと

海母取かいぼと

○鷓鴣けしこ

○鷓鴣けしこ

○空蟬くうせみ

○空蟬くうせみ

○燈蛾とうが

○燈蛾とうが

○蛸たこ

○蛸たこ

○練雲雀れんうんせき

○練雲雀れんうんせき

○海月取かいげつと

海母取かいぼと

さきと通俗志は六月より出ま
秋ハ虫類多くあるれや
○金亀

子。蛟蟻
○鳥毛虫
蠅。蛆
蟬。蟬虫

蟻。一名地虫又根掘虫としりふ
多く土中より生れ又糞の中

○青田
六月より田ハ菜よ
さものへはし作

田草取
夏より秋より
りて二度田草を

○百日紅
紫微
花。怕

○竹の皮散
竹の皮脱
又皮剥て云

○烏扇
射子。ひあき
本州は射子を

○蓮
蓮の葉は浮葉
と云根を藕としりふ

見草露堪草
つぎふ

以上蓮の異名に又花君子藕
花水花凡露郎を云

慈姑
燕尾草と云形ち
燕の尾に似たり

○菱の花
五六月は白
花開く

玉簪花
白雀山に云大なるもの
と俗は亀がうといふ

馬鞭草
一名を云

猫児眼睛草
沢漆。野
此草の形燭臺の

草
紫花を用形約種のこと
○麒麟

麟草
高サ一尺なり形
○虎

尾草
白虎の尾
○晝顔鼓

○書顔鼓
の形ち似たり

五十二

○ 壺盧

察所

對

新

務
十

覃夕

類

蘭。仙。

果風

紫

一

化
白

俗黒く

5

白

53

○
者

...

此

三

摩手



豆

卷之

下

平。

燈

奇

張

云

2

天



1

林

...

10

12



夢の振ふ如く
 ゆえにとむふ

白糸といふ蚕の糸をいふ

青鬼燈あどろふとう
草酸漿

胡椒又高麗胡椒云

まめうり秋生まる
を秋めうりととり

さげ。十八
さげ。廿一

瓜 種類甚多、一年に
の種物の長、短、大、小、

本巢郡 もとす 素 もと

の大サ梨の

ちり四五月出る

をいかりとて
瓜の匂ひある

それハ其角の
七條よりかう

菜瓜

一種と爲て長崎の作より諸

南蠻より渡り

以て南唐の姓あり

かむぢや唐る
胡地より出可

一を以てこ
是ハ甜瓜ちんかのこ

煮て食ふ
免系郡田辺村

そこの金のごと

是西加之増山の

よ出た秋さるづ

州田村及公南都

えかつら

履を納む

も未だとふ

○汐見坂

茶色の
ふりく

海藻

○紫蘊

○赤蘊。桂荏
陸奥より食ふ

大小二
種あり

○林檎實

○夏桃

奈良漬

製ス

○納豆製

醬油製

○將酉

つくる

切茶

六月の始宇治の茶人將茶
と壺ふりて人よ銘るこ

まきとま切

○麻地酒

豊後のみ
の製る

水飯

洗ひ飯

引飯

乾飯

奥州仙臺及び河州ろ
明もよ出るもの佳

○葛水

砂糖

氷冷水賣

江戸の街々多桶一
荷と卸し冬冬よ

冷水

振舞水

夏日市井の間小
瓶と出しこまよ

柄抄茶碗ホと深往き茶と茶よ
○

冊九

增田

五十五

瓜うりの産とよとに瓊晴菜じやうせいさいと小

こゑ
○瀧おこみす鱒に鱒に○涼しやう臺

源一さ玉
解珠ささり
○夏節

小兒の
痘疹
霍乱
舌
疔の
名
瘰癧
汗
疣
熱
瘰癧

癰腫
七二
○香薷散
暑毒の取
用ゆる
暑く
取

のあぐり後の
くぐりを治す
○壅培
○橙さちばる
等より芽生

灰羊の糞とつちくハ実なるや多
菊ハ土用の後、やゝとかふ處一

○夏深さ夏の別夏小深さ

夏を隔る夏の限夏を記て

夏を追ふ夏の果秋に隣る

秋ちろさ秋と待来ぬ秋夏

のくま「夏を送る」○富士の

富士より四月の終ぶぐと雪の消ゆりくるが、永山の方

日人の形此よりく、雪の消のころより
 ありて是を農男と稱せしを抄雪
 といふる年もあり又いへる年あり
 りとの名をとりていへる年必き
 五穀孰ちま

六續、方物と續、迫て便ち

ハハふあさハ多^ニあさ^ニと通^ル方
物秋^ニはて零落^スて方^ニなる

夷則ハヤシ 圍夷則ハヤシ
六夷ハ傷ハヤシ

物始て成る
○立秋 圃大
暑の

日本押 〇處暑 圀立秋の
後十五日

孟秋。上秋。新秋。首秋。
蘭秋。菊秋。桐秋。肇秋。

蘭月。相月。涼月。文月。七夕。
月。女郎花月。親月。夷則月。子

○一葉柳ちる
菜

かきよハ折
り首よる之
○
諸寺施餓

朔日より十五日とある
例よりよく修む
○新吉

享保元年江戸吉永の遊
女玉菊が追善の爲一年

七月中の所の枡屋倉敷籠を出ま
是より例となりて毎年このりあり

カ女群集と
電見抱といふ
○洗車雨

○北野御手

城必爲聖郡水甘天潢之
月六日松梅陸氏之水也

松風の硯と穀
てゝまを供ま
○机あ

洗ひ
を六日兒童視
と洗ひ清め草の

○七

々日内膳司より當日の節
の供席を献まゝてて供

所ハ毎日ある物なれども一年
の内節々よなるを節候といふ ○七

夕 牽牛織女二年一會昏霄 三星
の令節之ゆゑは夕といふ

○牽牛星。織女。二星の名
いそぐみ星。河鼓 牛女 七上畧を

こゝろこゝろめこゝろ 倍は隻
星とい

ふく 秋さる姫。こゝろの姫。さ

う小姫百子姫。絲織姫。おづ

不姫。梶の葉姫。以上さるく
七姫の名あり

もく 秋 あふくのかさけはハ
と比さ葉といふや

しひ姫 比と知と通むと 星の契

星合彦星。星祭星の手向

七夕つめ しまつてあふくさる或ハ
たふもく女といふり

の川銀河曜衣。七夕を願

夕乞巧奠 巧ハうつくしきこと也
のひ葉の器用小女や

うくもひ 鵲 かわもとの
種れり 鵲の橋 種

の説あれと心世人志 紅葉橋 此橋
るてなれは是を眺む

てふあるくあらまたと 年の渡 年
ハあらうとといふあり

一度天の川を 星の屋形 此日
さるくろりあり

の星をみる殿 七箇の池 此箇池
圓も橋をいふ

ふ七ツの鹽は水といきて 乞巧針 婦
星の糸をうつくしきとて

七孔の針は色この糸を 蜘蛛の絲を
とて七タよを向るあり

占ふ 婦人瓜茄子ホを供へるり次
の目早瓜の上は蛛の糸を引

され巧を ○庭の立琴 是七星
ゆくりとま

る 七夕は借 物とめとて中ふも
色こま衣をうけりて

して是をとも向るあり 索餅 是を
索麵

のこころそ日の節やハ瘡と除く為
なりこのありくそ日親族索麵とお
くり互ふ
食まると
秋さり衣
衣星のそそ
日つる衣と

左小舟妻迎船
織女牽牛
とむるひは出

心なり
貝穂船妻船牽牛
の乗

りて来る舟
七種の船つるくの
宝を七ふ

とくまき
星の薫松の上れ火
より一焚板

物あり
梶の葉七タハ七枚は
梶の葉より向

のちとくまき
屋の上よりあけおくものちほより
短

冊竹賣その俗屋より向るとて
ふ色の紙を賣て短冊と

露
あより星ハ七夕のちと出付る
く草の葉のちと出付る

飛鳥井の鞠七夕日花を井井
波のち家蹴鞠の

金あり
池の坊立花七日京六
角堂方丈

怪例
一池の坊門人集り二星へち向と
て立を立其り立ふハ南位職と

参法野よ
本願寺菟花七日
東西

り物
の門の末派并家礼を数種と
以船の形を作り又摺の形とせり中

り参法野よ
逆の峰入

七日大客と称するハ即ち聖雲山に
家派ハ本山南山の別あり本山の客

ハ八則を日々聖護院のふ
く星を逆の峯へちいふなり
文

珠會八日仁明天皇の序宇より
始て東は西より行なり

六道参九日迎経又條の末北建
仁もの南ふある六所の珍

皇さるるもの
楨賣九日諸
人六ふ

よりて楨の枝を買ひぬり取り矣
ふりおく俗聖又楨の葉より集て来

より
清水千日詣十日を日集
修せられ八平

お城、その家は嫁妻妻々々々

ありて見ると里上村と宮前なる
く入て遠く見く近に於て勢州
山田くまのゆき雪のく山田
のつと入くは山田十六日あり ○松ヶ

崎題目踊 十六日松ヶ崎妙泉寺
をのちて男女う

ちやうり題目くくを ○鷹の堀
ひてくまおしく踊る

出 四月は羽抜くをまきく筆立
て七月中旬時毛をまきく時毛

をまきくを十六日堀をまきく
まきく藤屋草をまきく 鷹の山

別 是八月十五日之鷹のま
をまきく父母まきくをまきく

鷹 ありてくまおしくをまきくくくく
別くまおしくをまきくくくく

屋勝 ありてくまおしくをまきくくくく
はくまおしくをまきくくくく

初鳥狩 ありてくまおしくをまきくくくく
ありてくまおしくをまきくくくく

初鷹狩鷹 ありてくまおしくをまきくくくく
ありてくまおしくをまきくくくく

鳥を祭る ありてくまおしくをまきくくくく
ありてくまおしくをまきくくくく

御霊の御出 ありてくまおしくをまきくくくく
ありてくまおしくをまきくくくく

宗祇忌 ありてくまおしくをまきくくくく
ありてくまおしくをまきくくくく

愛宕火 ありてくまおしくをまきくくくく
ありてくまおしくをまきくくくく

文学上人忌 ありてくまおしくをまきくくくく
ありてくまおしくをまきくくくく

地藏祭 ありてくまおしくをまきくくくく
ありてくまおしくをまきくくくく

御狭山祭 ありてくまおしくをまきくくくく
ありてくまおしくをまきくくくく

ありてくまおしくをまきくくくく
ありてくまおしくをまきくくくく

ありてくまおしくをまきくくくく
ありてくまおしくをまきくくくく

ありてくまおしくをまきくくくく
ありてくまおしくをまきくくくく

ありてくまおしくをまきくくくく
ありてくまおしくをまきくくくく

ありてくまおしくをまきくくくく
ありてくまおしくをまきくくくく

ありてくまおしくをまきくくくく
ありてくまおしくをまきくくくく

まづいゝハ、力と多きを

ふハ倍々わぢあふとて心の中と
角カ又ハ相撲もて文事ハのと

。臺相撲。辻角力。壘中
より決む。使をつらふ。

○ 鳩吹 ととく 獵師の森を待

中又人々麻ありと云らせんと云ふよりを合せて喰ふと糖欠といふと加へるものなり

○殘暑

送ハカ去カ錢カネと云名の去るや
送る名なり錢と云

夏ふらぐきと古人秋をす
 るてハワキ未詳をらむ

又曰
秋之節

の
の
の

○七、加王
と王 ○

檄

楓
雞冠

木とふ和名を以てさふ
ゆゑ蟻の名に似たるが故に ○ 檀 クダ 文字
くろ

ふふを陸奥まで
紙つゝものときえ
○ 柞せ栢くわいのたえ実じ
ハ渡りて食

○ 檯 本名黃 ○ 荻 蘆荻之

萩。系種。りとあふの種。萩殿。
萩の戸。萩の坪。うさぎ萩。

い草のこまゆゑをいふ
鹿鳴草

和名 芳子よしこ 紫 芳宜草よしよしぐさ
屬之なまこ 萬の

古枝草 コエ 紅艸 ベニクサ 野苧 ノエ

草月見草ねりふまあるま

蘭らん
袴はかま

澤枯

葉ハ山丹子修て少一玉熟み
て服白人涙中みまきりるものあり

○牽牛花 一名假君子 又朝白とも云 ○女郎

花 花のつぼみ ○茶の花 花のつぼみ

○仙翁花 一名紅梅草 ○観音

草 吉祥蘭 ○翁草 本字ハ白鼠

○藥師草 牙切

草 又青葉ともいふ ○益母草

莖胡麻に似て ○鳳仙花 金鳳

花 花のつぼみ ○施覆花 野徑の

○野菊 ○鬱金の

花 紫ハ芭蕉に似たり ○茗荷の

花 ○灸花 嫩なる蔓草なり

○曼珠沙花

○燈籠花 一名名花とも云ふ ○蜀漆

の花 紫ハ梓樹に似て ○萩桐 一名

○蕁麻子 和名

○木桂 俗名を云

○薏苡仁 仁ハ穀のどし粥と云ふ

○桃の実 金桃

○牡丹 木

瓜の実 ○蓮の実 花

柿 新法 ○槐の花 六月末より

○蒲

○棗 ○刀豆 ○夕顔の

實

瓢壺ひょうこ盧ろら

○青瓢せいひょう簞だん。百

むやうさん。

○西瓜せいあ

西域せいせきより傳

せりき國こくより

○あぶ瓜あぶりか

近世きんせい盛さかる

ふあがり西せい瓜か

○秫しゆく

○粟も奴なの

苗こめの穂ほをき付つけ

○稻葉いねはの雲うみ

稻いねの穂ほのか

○稻いねの花はな

富とみ貴きなりと

以上いじやう稻いね

○稻いねの穂ほをき

○早稻はやいね

稻いねの穂ほをき

○室むろの早稻はやいね

○二百にひゃく古こ

○廿六にじゅうろく夜待よまち

○初はつ嵐あらし

○出で

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○虫むし

○蠅螂 このま好んで膝を

の名あり又暇 てりたりともよ ○秋の蝶 ○秋の

螢 ○秋蟬 浮土よりハまぐく

青令 本州云一名ハ胡蟹和名加介呂

虫 布。胡蟹。秋津虫。未卒。

色やんま何れも大小ありて色を異はまゐるの ○蛸

てちほく多 ○冷麦

無三秋物竜田姫 秋の井山を

律の調 ○千秋末。万

霧 霧の

霧 霧の

露 霧の

○身入良寒肌む

月 月のま。月のま。月の

の桂 月のま。月のま

男 二日月と云い

新月 ひ三五夜中の

日月 玉免銀免雲免玄

免 十五日後の

在明 月と云ふ

既望 十六日の

居待月 十七日の

即待月 十八日の

暉素 十九日の

中 廿日の

更まち月 廿日の

秋 六十五

常娥

嫦娥ハ羿カ妾之不死の薬偷て月中より走る是を蟾

之真如の月

清浄真如ハ雲外の月の如

の月胸の月

空は清々心は

盃の影

盃の光るがすくなくハ

秋のくさく表の月を移

月の劍

こ日月の形を

月の都月宮殿

真夜中

此二粒は子の子の二刻は空の二刻は空の子の影

椎柴「椎の葉」椎の實○杵

杵といふ木のうららと杜仲とその子お似てを別しがささのなり○

芒「薄」鬼芒「縵」芒「鷹」の羽

芒「篠」芒

是ハ志けきまは篠

芒「十寸穂」の芒

穂の長くて一尺は

芋穂の芒「芋」の束

芋麻

忍草

忍草ハ忘るる月物○萬

花○色草

秋の子

野の花○草

蕉○辨慶草○雞頭花○

荊萱○雁来紅○鬼燈○番

椒○若烟草○東埔塞瓜布

瓜南瓜冬瓜

白毛ありて種は

似たりは名づく

と妻の字を

○芋

○螺

水中より生

栗芋

柱圓子生

薯預

山の芋と

子

長芋

薯蓣の

櫻りて是を何 **○團栗** **○柳煨**
首鳥といふ

柳 とき時番中に入きて自然に
紅熟する其甘きと蜜のこに **醗**

柳干夜柳 毎年赤松寺ま
如坐十粒のけり中

登よりか **白柳** 漬柳とい枝を
よめる名あり つけり或系は

ふけて晒し **胡盧柳** **豆柳** 手材
れををいふ

之山城守 **木練柳** 柳柳より系
治は出づ 木不材といふを

以木祇 **御所柳** 大和の市村より
りとも 出づ樹法の上を

の **和淡似柳** 木不材といふて
サーガミウ **伽**

羅柳 形小はて長く **田舎柳** 是
その形は似り

材う形をく大はて味濃 **透徹柳**
しよりて餅材とまると

形長く尖あり味 **團座柳** 形大
甘美か羅材は似り 是肥

てよろ **樽拔柳** 是餅材之美奈の
らうく 俗にさきと柳拔と

蒲萄柳 味美こととんとも **柳**
食用をいふ

糕 煮粉と米粉を和し類蒸をま
し小穴よりふり血り利を止む

効 **○猿酒** 猿葉をとりて山中
あり 樹木の虚或ハ品服

の四方より下は竹へ並敷日の後 **○梨**
熟してはるのとく味甚甘味あり

子大殺 梨子之その大なるもの因
り一尺でみす小ぶりのを

紅瓶子梨 瓶子の形をて **松尾**
赤くその肉也

梨 その色をのどく衆をく世 **水**
其妙舎はの中ね尾の産

梨 ち梨は似て **空閑梨** 肥奈の
福色なり 産さ

め **○ふの浦梨** おふの浦併勢
大に なりふの浦梨

さ **妻梨** 初の妻は **鹿梨** ありの
よりあり

なりといふを忌て **○新米** 新葉
ありといふや

○今 **稻干** 稻板。稻荷 **○田の**
年米 稻舟。掛稻

色田の庵

田とよ

小田守

山田守

○晩

「そぞつ

雨あふぬれそ
ふすりれ名に

○鳴

子鳥劫引板鳴竿案山

子彈

是しじ
の名あり

焼帛

馬の尾と
焼て四よ

奇きバ麻その香をう
きて四よとぬめり

塵火屋

あれ

とも是ハ山田は猪麻のつくふよふさ
きをさうて塵埃ふきものよ火
とるじその歌とふ

○木綿取

桃吹

綿実花のくく四よ裂て中
より白綿と出は是をいふ

○鹿

一千年はて蒸麻と成る
年はて白麻と化し又五

る年よりて
故麻となる

かせた

麻をいふ秘法
抄よまうとハ北

麻をいひまふと
ハ牡麻といふり

夢野の鹿肩

校や 井代ハ麻の肩骨と

紅葉

鳥

十六

班竜錦馬

共

麻の吳

鹿笛

猶若麻とてんと
はる時笛とてさ麻

のちとすひて牡麻と争くあり
麻笛その形銀杏の葉のこころ

鹿垣

麻と四圍へさ
とて垣と作る

鹿狩

伏美氏人は教へてぬて牡とすもそ
まより唐も日本もその法を四時合

獣とかり逐て
その害とのぞき

○鳴

正字ハ驚一
又羽と作

るそ俗混合
して鳴とて

鳴の羽搔

鴨の羽た
うて是を

る羽が
まて云

○鶉

鶉羅鶉筆・蝦蟇化
して鶉となる鶉は

ひやくふあり形小さく肺
短し是雌之鳴らざるとり

片鶉

雄

按るぬと
りあり

鶉衣

短き
衣に

○鶉

伯勞
成ハ

又る舌
名は作

鶉の草ぐさ

鶉の葉
名は作

の早鶉

鶉の早鶉とハ鶉の香車と
しふくはる早鶉は姓なり

のちとてそ
ふととそ

子又上
 木と子

匹とよ越中よ
出るもの上ふこ

江柑と云ふ或ハ名吉或ハ江女
又係糸須走小江柑と云

裂脰 鰭雲
秋天鰭先よりんとする
時一片の白雲ありそ

の雲隠れにて波のこ
 とくを溺れとよ
 ○ 鰻又鰻 魚雄
 うなぎやま この

ありて此を以て禮魚と漫言する
時ハその予は禮魚の弊者又悉てせず

ゆゑは慢
積とふ
○秋の宮
皇后宮の所
ろへ皇太子

の宮は赤いまありとて赤宮とやま
る又赤の宮と号する皇后宮ハその

曲は在るを以て中宮とも
秋宮ともやなるなり ○秋七種

秋七くさの草ハ。萩。尾草。梅子
葛の草。女郎草。夏草等々。

和食古万葉
出

八月
南呂

○白露 圃處暑の後十五日

秋分 白露十五斗酒

○仲秋○桂月○竹林○壯月○中商
○中律○難月○桂秋○南呂月○素

秋。燕去月。雁来月。燕六月。葉月。さきとまき月。こころ月。くは

二月。秋風
月。月。月。

八朝ハチウ
梅ウメ
○恃怙タウキの節セツ憑ヨロの節セツ

供
この花田の實のふた田の實の節とを
よりへハ格の初種と慈恵をいふまじり

○尾花の粥
ハ月曜日尾花
と和して粥よ

繪行器初註行差の小

○天中の節この

天中礼とてける符と考抄の門戸

○ 鱸 こちま
 小ちま せいでこ
 世以古 こ

○沙魚いせ
○鰯いづ
と九万

○小瀑江魚こたけえぎ 鯛だい

江柑とよみ或ハ名吉或ハ江女
又存宗須走小き江柑とよ
○鰯イサナ鰯。

引。裂脰 鰯雲 秋天鰯先よりんと云々
時一片の白雲ありそ

の雲隙とて波のこ
とを弱雲とよ
○鰻うなぎやう魚この

ありて此を以て禮魚と漫々
時ハその予は禮魚の著より悉くせず

ゆゑに慢
積りてふ
○秋の宮
皇后宮の所
りて皇太子

の宮ハ東ノ宮ありとて東宮と云ふ
る又其の宮を心号を皇后宮ハその

西は在を以て中宮とも
秋宮ともなるなり ○秋七種

秋七くさの葉ハ。萩。尾葉の梅子。
○葛の葉。女郎葉。菱ぐつよ。

朝真古万葉

南ハ陽ニ呂ハ旅ニ
少ハ陰氣ガ陽氣ヲ旅

助^ドを
○白露
圃^ド處暑の後十五日
○

秋分 白露十五斗酉

○仲秋○桂月○竹林○壯月○中商

○中律。○難月。○桂秋。○南宮月。○素

秋。燕去月。雁來月。燕六月。葉

月。さ。と。さ。月。こ。そ。め。月。く。は。

月。秋風

月。月。月。

大朝ハ朝梅ハ朝○恃怙よむの郎セツ憑よめの節トチ

供
この黄田の字のものと田の字の併と生
りへハ絡の初穂と世々(初まり

○尾花の粥
八月朔日尾花
と和して粥よ

ある是より代
良きものと云
○ 繪行器 えぎうき 木せうて
行器の小

さとしり目か
終とまふり
○天中の節 ハ朝
この

凶惡の目有り故又吾ハ陰陽家ヨ
大申レトクニ符と考妙の門戸

は貼せ
○**絲雀** つらねの造雛。造松虫。
造雛宮のふとも名

里ひくは造りて陰るひよ
○**三村祭**

泉州堺甲斐所のふよりあり関口明神
といふこれ位吉明神の外宮と稱して

祭ハ朔
日二日
○**堺天神祭** 三日泉州堺
我町のふより

あり二月十三日と云れふと今日
と秋祭といふ神樂をいふを富へは

所あり
○**天壽の節** 四日唐土
と云り

壽の節
○**北野祭** 四日安土
と云り

ハ中將 西ハ吉祥女
帝永延元年八月五日祭れと云て

友寄あり後年
○**千秋節** 五日
四日は定めらる

唐玄宗帝降誕の日故に名
つゝ後改めて天皇節といふ
○**白**

懸閑帳 五日近江打下白髪大明神
ハ林田彦之丞ハ閑帳あり元

禄中より
○**敦賀祭** 十日越前
止り

り名神仲哀天皇
○**司召** 秋の除目
之氣比社といふ

○**京官除目** 定考
と云ふ十日の

○**待宵** 中宵月
と云ふ十日の

名月
○**名月** 名と云ふ月
名の月といふ

名月
○**待宵** 中宵月
と云ふ十日の

と云ふ十日の
○**名月** 名と云ふ月
名の月といふ

と云ふ十日の
○**待宵** 中宵月
と云ふ十日の

と云ふ十日の
○**名月** 名と云ふ月
名の月といふ

と云ふ十日の
○**待宵** 中宵月
と云ふ十日の

と云ふ十日の
○**名月** 名と云ふ月
名の月といふ

と云ふ十日の
○**待宵** 中宵月
と云ふ十日の

と云ふ十日の
○**名月** 名と云ふ月
名の月といふ

佐宮祭

十五日豊前守之八月十五日祭礼のり神社より

始め

○志賀八幡宮

十五日近江守より

箱崎祭

十五日筑前守より

○豊田祭

何

之八日より神事あり十四日宮の刻内奥の院へ後序あり十五日祭礼

安濃津祭

十五日伊勢守之者ふ社之憲九年送還

小

○豊浦祭

長門守豊浦郡あり當時祭り八九

月十五日之者ハ

○三津八幡祭

十五

州西蔵郡三津のち町あり三津とハるは春は難波は是

○富

岡八幡祭

十五日江戸城南保川ありある不惑思は同

一別當大栗山永代寺宗派川才の大社或ハ神体ハ其の作

○野

口念仏

十五日播州如古郡教信寺又あり是ハ孝謙天皇の由

宇教信より信加古川より唐より念仏と云ふ諸人の事と云ふ

の勞と助て貞觀八年八月十五日盜賊のより首級と斬らるるその唐の

江にちと建ッ教信ちと号を今日傍流よりて仏よりを

○駒

迎

○駒牽○引分使○望月の駒○より系の駒○上野駒○武蔵駒

○志子の駒○箱坂駒○若ハ此玉の牧より者のごとあり 禁中へ馬と成る

之天皇南宮より出所なりて所馬と成後一公々已下次才よりを

るるあり次ねを以て院の所不承まてもわらせりこの勅使と引を

の使と云元ハ十五日よりありと朱菰院の所因思よりある所十二

日

○菅大臣祭

十六日京の条の南後より

西洞院の条よりあり是菰が所所の旧跡よりてそが小社を存せ祭礼神

與後所の条

○御霊祭

十八日上

ハ京極通筋遠橋の四よりありハ京極通大炊門小東よりあり

兼名祭

十八日春日大明神と祭るちり勢お兼名の城下より

佐宮祭

十五日豊前守の八月十五日祭礼のり富社より

始り

○志賀八幡宮

十五日近江ふり

箱崎祭

十五日筑前ふり

○豊田祭

何

く八日より神事あり十四日宮の刻内奥の院へ後神あり十五日祭礼

安濃津祭

十五日伊勢国なるふ社之憲お九年迄受

○豊浦祭

長門ふを浦郡あり富時祭り九

月十五日なる

○三津八幡祭

十五日

州西蔵郡三津の町あり

○富

岡八幡祭

十五日江之城南赤川あり富を不替ふは同

一別當大深山水代も宗赤川才の大社之或ふ神休ハ著る作

○野

口念仏

十五日播州加古郡教信寺あり是ハ孝謙天皇の

宇教信とふ僧加古川は唐より念仏を傳へる人の事と云ふ

の旁と助て貞觀八年八月十五日盜賊のふり首級と斬らるるその唐の

江にちと建ッ教信ちと号を

○駒

迎

○駒牽○引分使○望月の駒○より系の駒○上野駒○武蔵駒

○志賀の駒○箱崎駒○若ハ諸ふの牧より駒ハ馬と云ふ禁中へ馬と云ふ者のごとあり

へ天皇南宮より出所なりて所馬と云後一公ハ已下次才より所を給

る富より次ねを以て院の所不車まてむすありをハこの勅使を引

の使と云ふ元ハ十五日よりありとも朱花院の所因思ふありる所十六

日○菅大臣祭

十六日京の南後ハ路

西洞院のふりあり是若水所不の旧院ありてを於小社と存は祭礼神

豊後所の事

○御霊祭

十八日上

ハ京極通助遠橋の因あり下の

兼名祭

十八日春日大明神と云ふちり勢州兼名の城下あり

金剛草

その根強く牛草と稱く
くはよみくまといふ

檀特の花

芭蕉の属を草といふ
くはよみくまといふ

花紫

巾傘の虫よみ草を云ふ
くはよみくまといふ

粉花

夕錦の草駿州の野徑
くはよみくまといふ

鳥頭

紫芥の似て浮き草の毛
くはよみくまといふ

苑

一名紫菀。還
魂草。夜牽牛

○露草月草

佐小おみ下
草之万の草

ハ朝日の影とほて咲くこの草
ハ月影とほて咲くこの名あり

宇治

花園

宇治ハ応神天皇の離宮を
と后ハ太子の御室とて

系日柳宮と云

○滋賀花園
近江大は

小あり天智天皇の
頃その旧記に云

○芒の穂
尾花。

名草。秘尾

○龍膽
和名抄よ

久保又述加奈と云ふ龍膽
俗ハこまを云ふと云

○黄蜀

葵

別名。蜀葵。ハ
別名。漆の花。○烟草

の花 一名相里

○苗堀
異名。苗堀。○

藍の花

○葵の花。○慕の種
○水紅花

木賊

多丹波ハ木賊
○芦

の花

○苦参引
和名。苦参引。○

○牛の舌痼茎

○胡黄蓮

○薬堀採藥

秋

○萱

○萱

柘榴

○銀

杏の子

○茴香

實

○通草
異名。鳥糞

て魚と云ふといふもの **翡翠** 一名山翠 **魚翠** 翡翠

月物とてまじに大と山谷 **連雀** の

ありて同じく魚とてまじ **菊載鳥**

大なるがこに頂は冠毛 **棕鳥**

形はよりふく頂白く脊 **来属**

灰色好んで棕の木よまむ **鴉子**

能とも虫く又まめをさす **鴉**

くふ一説イカルカとて **鴉** 雀は

鳥 雀より大く黄黒色 **鴉** 雀は

食して味よといふ **額鳥**

ひをさくとも **鶺鴒** 下くいふ

ひをさくとも **鶺鴒** 下くいふ

ひをさくとも **鶺鴒** 下くいふ

ひをさくとも **鶺鴒** 下くいふ

ひをさくとも **鶺鴒** 下くいふ

ひをさくとも **鶺鴒** 下くいふ

ひをさくとも **鶺鴒** 下くいふ

ひをさくとも **鶺鴒** 下くいふ

ひをさくとも **鶺鴒** 下くいふ

ひをさくとも **鶺鴒** 下くいふ

ひをさくとも **鶺鴒** 下くいふ

ひをさくとも **鶺鴒** 下くいふ

九月

この月おやうやくなじりたるは
お長月といふ又思へて長月

○無射 困陰氣升陽氣降て
万物陽氣上騰ひく

出て食ふことばくつハ虫魚の執蟄
伏し草木根より潜むがごとく射

ることは仍
○寒露 圃秋分の後
十五日斗辛

て急射といふ
○霜降 圃秋分の後十五日斗
戌は建星と霜降

と
○季秋○抄秋○霜の秋○暮秋○晚

秋○玄月○素秋○紅樹月○菊秋

○紅葉月○彩月○菊月○寤覚月

○木染月○色とり月○小田刈月

鞍馬祭 朝日京都之朝大明神
とふ○大巳貴きと祀事

氷室祭 朝日南郡四十四町の氏神に
おはる春日伶人舞あり

御燈 三日春三月はおろし北
斗は灯とせらるなり

幡祭 五日山城国宇治郡木幡の里
よりある神柳大明神と号

○不堪田奏 徳国の田
の損亡をくふの目録をてぬる

そをよつて租税を免しぬふとあ
り作よりくさる田といふ

○桂宮相 八日六條の小西洞院の西
にありふし拾芥抄にあり

○泉 浦寺舍利會 八月洛の泉涌ち
舍利ありて毎

年九月八日舍利會を行ふ事あり
律師湛海宗の白蓮より持るる

舎利と
○重陽 重九 重陽宴れ
いへり

九日ハ節句にて休むハ菊宴の宴行
つる是を重陽の宴といふこの日月

と日と九陽の教よから
ふかはまき陽といふ

○菊花の宴 菊花酒 是
臣は菊酒を飲ふとあり

汝南の桓景が故より出でこの
日菊を酒と呑み災厄を避る

○高 黄代衣 是はひいて吞むこと

黄代衣 是はひいて吞むこと

惟奈よありのちの神樹大明神

く天恩骨
あまのあはれ

○不堪田奏

七日昔ハ
法国の田

の損亡をくふの目録としてある
そまはつまで租税を免しつゝある

り作るよりくさる田といふ
公より不悟因とハリふ

○桂宮相

撲 八日六條の小西洞院の西
ふちよりより拾芥抄はせ

○泉

涌寺舍利會

八月洛の泉涌ち
舍利為は於て毎

年九月八日舍利金を行ふ事あり
律師湛海宋の白蓮よりうねる

舍利と

○重陽

重九

重陽宴

つへり

九日八節より休むハ菊盃の宴行
つゝ是を主功の宴とせしめ日月

○菊花の宴

と日と九陽の教よか
ふかちまき陽とハリて

○菊酒○菊瓶を日群

菊花酒

ハ

臣は菊酒を賜ふとあり

汝南の桓景が故より出でこの

○菊

日菊を酒と吞み災厄を遁る

○高

萸袋

酒はひいて吞むこと

き小登る

九月九日望々墓

○九日

小袖

九月朝日より八日はふりて各
拾と名を九日より良妙皆

綿入を

小袖

○あつめ酒

九日を日よ
り酒あつて

菊の著綿

九月九日

衣類に

表白裏紫

○菊の著綿

九月九日

の著綿ふもてえて此日の式を調
んとてあ日よりふは綿をきせ

風雲を防くことと

○菊の著綿

栗の節句

幸邦の信々九日親戚
朋友送はおおくるよ

栗を以て一菊花泥を香むゆゑ
菊の節供とも栗の節句とも

○後の雛

雛祭三月三日九月九
日に昔八重さる時節

ハチさふや重陽より雛祭るとあ
るは氏よりハチより雛遊ひありと

○海産廻

つりものあつたり

田夫野人の祝ふあはして海産の盛
売を以て勝負と定むるありと

醍醐祭

九日山城国宇治郡小野北
南涼雪山醍醐寺よりあり

御香の宮祭

九日山城必伏見京
町の東より祭神

ハ神功皇后

○貴船祭

九日山城
宇治郡

鞍馬の小一里許よりあり祭るふ二座
高霊奥奥前との二柱はて雨と祈

雨と止ることを

○鹿谷天王祭

浄土寺村十福師祭といふこと
黄北四日ありといふ九月九日

○生

玉祭

九月振州東生郡天皇の母
あり祭神一坐天皇玉余を月

流鏑馬

○十日菊

○後日菊。前後
菊。残菊。残

芳菊八九日の佳節は用ゆる物なる
よおくは十日は用ゆるをとり禁中残

菊の宴

○小重陽

俗々日舎しく

小重陽といふ本朝ふ

○四宮祭

十日
近江

必滋賀郡大津の跡あり坐る神四
坐大比叡大日小比叡小日氣比仲哀天皇

小禪師

冬出る

○下鳥羽祭

十日山城小
宇治郡下

鳥羽は在る神午頭

天王田中天王と号す

○五條天

神祭

十日京都方り坐る必彦名
命ことと京師の倍この社

と天使の

○例幣

十一日号八孝徳
天皇よりと

社といふ

やうふく例幣使とわひて代り
天子より伊勢大神宮へ幣とせり

やふ何年のこと

○御難の餅

文永
八年

るんくくより

九月十二日日蓮上人お州竜の口此厄
難白双の下僅一命を金ふやと後

世宗門の徒養を依りて像あり

一俣とこれと御難の餅といふ

○宝

の市

十三日佐吉の社地より市姫の社
といふあり例幣必の市の始

より多く外をさるゆえ外の市と
いひ又取餅をいひとてて宝の

市といふ

○白川祭

十三日天満天神
の祭はて路北白

川の里南山の上より祭あり本社は
居の前二町より西よりあり例幣九月

十三日土人

○十三夜

後の月二夜
月。栗名月。

豆名月。名残月。一寛平法皇
明月無双のより仙出る依て我朝

九月十三夜を以

て明月の夜といふ

○天王寺一乗

會

十四日抄州大坂四天主の一乗會
九月十四日或ハ十五日六時重

は是を修する事傳教大師草創
の地にして奉るハ某師日光月光

の三尊大師も

○岩倉祭

十五日
は所明

神の社ハ洛北長谷村の西岩
倉ありて初帝都の守護神也

○小

倉祭

十五日豊前必金救郡々村の
庄到津村よりあり奉る神三

坐中ハ応神天王左ハ

神功皇后右ハ玉依姫也

○栗田口祭

十五日京都之又午頭

○岡崎祭

五

日或ハ十六日洛東岡崎よりあり是東天

王の社といふ西天王の社ハ吉田山の

秋

七十九

花の頭

北日山城八幡山の社信才
子髪と刺衆は加ふる時季

祭と祭一泊宴待き之の春ハ
六月日とえらうくつりおくる

波利女祭

北日洛陽さ止の北宮町
の西より倍は繁昌の

社より子孫の栄を祈る祭也ハコト
波利女の祀り成づく元針才女と祭
るふて宴ハ
○旅夷祭
北日洛東建
仁市の門前

あり栄西因肝動法なる不はて旅
りの海上と赴く人ハ先ッ社に集り
風波の難をうらんを

上難波

祭

北一日松州西成郡大坂信芳町
あり祭神三聖才一稻荷才二祇

茵才三平聖之後三條

坐摩祭

北二日松州西成郡の惣社とよりそ
日の祭をお常八十名祭とより

淀祭

北二日山城玉紀伊郡淀の御小
橋の東河の中よりあり祭る此

北二聖天逆向津姫とより

木幡

祭

北四日山城宇治郡木幡より祭
祭の神正哉吾勝速日天忍骨の

命之是地神才二の神はて

鹿谷

祭

北四日洛東浄土
村十祿所の祭

逆髪祭

北四日洛陽賀郡琵琶湖の南お坂
関の清水大明神祿九の社と祿を

は正吉より祿なる関の清
水の旧跡なるよりせはり

天満

流鏑馬

北五日流鏑馬の式あり
祭る此の神小野二回九月

北五日流鏑馬の式あり
社よりををむむ

北山祭

北六日洛北衣笠山丑寅の林中よりあり
北六日明神より又北山天神祭とし

りふに并角より
て三番曳あり

津村祭

北七日津村
は其の社

ハ松州西成郡大坂津村よりあり祭る
神龜倉樟五郎系政より其なるより

鳴滝祭

北八日洛東の社洛西仁和寺
の西ハ鳴滝よりあり西朱雀

より西洞院よりあり九
町の擁護神といふ

福王寺

祭

佳音神送

神子新名之非美也

Handwritten text: *Handwritten signature or name, possibly "Handwritten signature or name" (illegible)*

○桂川の御の掛の川

城園葛^{しづも}郡^{おたけ}あり大樫川の末著

桂川に於て校禊を候
伊勢御

遷宮 内不^レあ^レる外^レ攘^レ社と云

九月迄十月

百夜草 葉所

金

早藏如^二之^一積見算^二千^一

伏見草藥

此等諸條の名に外。山路等。

子。鞠。花。秋。與。子。長。月。意。之。

[illegible]

楊菊。大白。金

梅、港、木、先、主、菊、八、流、系、主、昭

花の秋 秋の花

花の秋 花の秋

乙 籟我菊 真美 美之

義和菊
仁明天皇 義菊と愛しむ心

萬壽宮之藥

○ 1872 年 10 月 11 日

祭

廿八日は七時満祭之福王もの
西山崎滝より班子皇后を参る

住吉神送り

晦日抄妙住吉より
七日迄出立の儀

神送りなるを神送りといふ事社記

又月元日抄より十月を神無月と

唱へ神々出立ぬるありの事なり

いふ俗説よりてその日の神々を供

神送りとも唱

○桂川の御萩

城岡郷郡よりあり大樋川の末より

齊宮の群行ハ九月十七日之吉日この

桂川より於て萩と候

○伊勢御

遷宮

内外ありその外摂社とも七二
十一年を遷宮ハ必しも生二宮あり

る之九月を以て由

○菊

菊ハ之介烈
高潔なりて

遷宮の月と定まる

る事とて益と同一

百夜草

星

いふ事なりと云ふ

見草

金

草

蔵

霜見草

干

い倍は実や
ツブといふあり
○菩提子は枝葉に

似たり人その実をとりて念珠まつく
る倍は鬼見愁と名づく能邪氣を

辟る
○川棟の子倍はこの実と

檀とハ大は是実
と金鈴子といふ
○桐油の實実

大い油はまがり用ゆその功在の
油は似たり本字罌子桐虎子桐と

いふ
○棕の實木ハ板の木は似

成
○檳檀の實高木あり木

ハ楳榔は似てふがく是ハ愛
まじ倍よんでカラボケ云
○杼の

實和名をつるぐとふ
黒色と染るもの
○老母草

實四時紫凋さるその実あり故は

は必を用
ゆといふ
○栗落栗。穂栗。焼

剥栗。
栗子餅
栗栗と粉とな

山の
出落栗
て地は落栗故は名つ

く倍丹波の
是くといふハ出落の誤なり
三度

栗
城後及び上下の野妙はあち山の
ひて尤小栗二年は二度実のふ

と
山栗
は倍

ひやうく栗といふ山栗の田
さものほて尖らざるもの
槲栗水

婦栗栗と称する馬の村
○榛子

栗は皺多し故は
ハミバといふ
○標の子の實

悉く櫛は似て分ちが
さ毛のあるものハミバと櫛は毛の

食ふ又凶年ハ粉はて食ふ
○椎

○落椎。椎拾ふ
名ハあらま木の名ハ鉄櫛といふ

椎栗
推栗といふハ推の木のもの

は成り
○團栗
○新胡桃

楸果 ○新榎子 大木皮木は牡丹

牡丹とあり名はあ ○新松子 牡丹とあり名はあ

又松ふりて山 ○水木子 喬木に

とまよふていさ ○菜 とまよふていさ

紅 とまよふていさ ○榼藤 通葉のいさ

榎の實 胡椒の天すさまで味道

熟柿 鳥柿と云ふ ○無

花果 古名花はさきもの ○鶉

上戸 本名白英一名鬼目といふ但白

実をとり又ツクミイロ子といふ

ひよとり好んで食ふと食ふと云

仙菓 本名珊瑚葉といふ倍よから

漆の子 漆のいさ

○色かぬ松 ○破色蕉

○豆

引 一年に二回引 豌豆

豆引 ○蕎麦新蕎麦

草牡丹

佛甲草

菊

菊

菊

菊

菊

楸果 ○新榧子 大木皮木は榧

とく 北とあり名はあ ○新松子 松うさ

とく とく とく ○水木子 喬木に

とく とく とく ○菜

とく とく とく 菓

とく とく とく 榎

とく とく とく 榎

とく とく とく 榎

とく とく とく 榎

とく とく とく 榎

とく とく とく 榎

とく とく とく 榎

とく とく とく 榎

とく とく とく 榎

とく とく とく 榎

とく とく とく 榎

とく とく とく 榎

とく とく とく 榎

とく とく とく 榎

とく とく とく 榎

とく とく とく 榎

とく とく とく 榎

とく とく とく 榎

り櫛ハ食一櫛ハ食をうらむとく
いちの毛あり櫛ハ毛をうらむとく ○

梅嬌うめいさ子と結ん ○野山の錦きん葉

の ○山粧やまづかふ ○薄うすちる ○未

枯く ○枯草の露 ○鯉魚風りぎふ

九月の 風かぜといふ 風かぜといふ

稲孫田いなひら 千土生ちつち。孫稻ひら。稻の苗

遅根晚稻晚田おそねおそいねおそい

実みのも稲いね ○落水 ○露霜

露時雨 ○霜踏しもふみ鹿か 冬ふゆ

洗抄せんしやう ○尾越おしりの鴨鴨 冬ふゆ 能よて身

ゆえ山の尾おしりを城しろて来きると云 ○

紅葉もみぢ 附つの櫛くしはははは

豺祭獸さしかげ 事こと由よしの豺さしかげの祭まつり ○

熊栗架くまぐしと搔か 栗ぐしの指さしは熊くまの ○

爵入大水為蛤しやくにりおほみづをわがは 化くわして潜物せんぶつと

我果われははらまを売うむ者ものと云 ○崩魚くずれいさな

深ふか ○綱代打あづなうち 綱代あづなハ冬ふゆと云うと

代付しろ寺てらももなるゆや ○番綿ばんわた

の番船ばんふね 杉すぎ抄しやう大板おほいたより江戸えどへ移うつ出でる

綿わたくその廻めぐりハ一ひと番二ふた番三さん番の名

ありて江戸えどの洋やうの速すみ速すみとい ○赤あか

胡こ黎り 九月くがつ野外のがいと群ぐんと云うと ○

秋あきハ後あとる 秋あきより後あと 行秋ゆくあき 著

の秋あき 秋あきの著あきハ秋あきの夕ゆふ 秋あきの日ひと云

秋の限あきのかぎ 秋の名残あきのなごり 秋を惜おしむ

り極ハ食一楮ハ食まづらむとて
いちの毛あり楮ハ毛をーさ ○

梅嬾うめんどろ子と結ん ○野山の錦もみぢ

糸 ○山粧ふ ○薄ちる ○未

枯 ○枯草の露 ○鯉魚風りぎふふう

九月の 風ふうと云ふ 風ふうと云ふ

稲孫田ひつとど 千土生ちつち。孫稻まこいね。稻の苗いねのな

遅根晚稻晚田おそねおそいねおそいね

実のる稻 ○落水 ○露霜

露時雨 ○霜踏む鹿しもふか

法抄ほふしり ○尾越の鴨おし 尾おしは鴨領おしり

秋と云ふ 中なかつくさくさ花はなとてえさるにささ

紅葉もみぢ 附つの櫓ろははは

射祭獸あやまつし 事こと由よしの射あやまつの祭まつ

熊栗架くまぐしと搔か 栗ぐしの指さしは熊くま

爵入大水為蛤しやくにりみづはか 化くわして潜物せんぶつと

我果はらま売うむむむとあり ○崩魚くずれい

梁 ○綱代打あづりうち 綱代あづりは冬ふゆと云ふと

より打うちてて字信じしんの綱あづり ○番綿ばんめん

代付序しろももなるゆや

の番船ばんせん「枳州大坂より江戸へ積出を

綿くその廻船まわせんは一船二客三客の名

ありて江戸の津の速速とい ○赤あか

胡黎こり 九月野外くわんげ群ぐんと云ふと

秋あきの限かぎ「秋の名残」秋と惜む

秋の湊

何事も著秋の詞こそ秋
秋源さ。冬を待。冬を

憐。秋を属

るを。九月盡

冬

冬ハ終之物終よりるを冬ハい
こひもいさこし日本秋名よあり

應鐘

應鐘より水の成長
より心ハ陽は応るに鐘ハ

動くよりふむて

万物動さかると

立冬

霜後
のち十五

日斗乾よ

小雪

中立冬の後十五日
斗まよさるを

十月

良月。陽月。孟冬。上冬。
閑冬。玄冬。秦正。小春。

初冬。暢月。三冬。九冬。時雨月

。初霜月。神無月。小十月。かき

さり月。神

なきのり月

更衣

朔日。日。市衣。あり掃
寮。其の所。装束。と撤して

冬。の。改め。み。只。衣。更。と。む。

り。よ。て。ハ。季。ハ。四。月。と。よ。く。む。ぬ。い。

孟

冬の旬

天皇南菊。よ。出。所。あり。て。節
金。行。く。と。是。と。ま。み。

さきと庚の日亥の刻餅と食ハ病々
一見ハ開化十年十月但馬国より初
て餅と食むときゐるの
○達磨忌
この餅の始りなり

五日達磨ハ南天竺の人之初め梁よ
入る武帝契まじ江と渉て魏入
り嵩山は居る九年を経て西域は
飯る梁の大石二年十月五日入寂代
宗謚して明

○射場始
天子弓場
覚大略とふ
よ此所

ありてふ以下射藝を以て使あつた
り先代旧書本元武公事根條は三日と
残菊の宴
五日延喜の代より初
る群臣詩とつくりほ
と初ふて

○興福寺法花會
一名山階ちとつふ九月晦日より十月
六日まで妙法の大會とひらけむ
此大會ハ因陀を嗣公初めふ六日ハ
冬嗣公の父名思大臣の時忌日よあ
るゆゑその

○十夜
この月廿日よ
る十五日まで
るゆゑその
るゆゑその

○絳麻子會
十

より十八日と南都興福寺より於て
こまを供せ大職冠の忌日なりとて

金毘羅祭
十日讃州郡足郡は
ありふる社一座三
痛大明神或ハ素戔嗚尊高山の形系
の所ハ似るなりを山と号せ

芭蕉忌
十二日芭蕉庵杭まへ伊
かゝのくまへ倍姓松尾氏

初の名ハす七後は忠友工門宗茂と
改む後江戸は居して俳諧は名あ
り元禄七年十月十二日痼疾を患て
難波の祿亭は没せ其角去來大料
筆堂殿とちりて大津
の幾仲も葬るとあり

○御影供
十三日又市命攝戎公金式
と稱せ日蓮上人の忌日

○下元
十五月正月上元七月中元十
月下元とて天孫月とて

○水官
十五日水官人の善惡を
とて一以て天帝は奏せ

厄と解せ
十七日洛の赤福ちの
○聖一忌
開山忌ありそ日方丈

は什物をうさり午後聖一の像を腰
裏にきて経をの須弥壇に安置

さきと庚の日亥の刻餅と食ハ病ヲ
一是ハ開化十年十月但馬国より初
て餅と食むときあつた
この餅の始りなり ○達磨忌

五日達ハ南天竺の人之初め梁ヨ
入る武帝契まじ江と決て魏ヨ入
り嵩山ヨ居る九年を経て西域ヨ
飯る梁の大石二年十月五日入寂代

宗謚して明
覺大師とふ ○射場始 天子弓場
ありてふ以下射藝と名付あつた
り先代旧本九代ハ公事根條ヨ三目と

殘菊の宴 五日延喜の代下り初
る群臣詩とつくり酒
と初ふこと

重陽と因 ○興福寺法花會
一名山階とつふ九月晦日より十月
六日まで妙法の大會とひらけむ

武大寺ハ岡地を嗣公初めあつた六日ハ
冬嗣公の父老思大臣の時忌日よあさ
るゆゑその

○土伎 この月五日ヨ
る行々なり
るゆゑ土京の流とふ

○絳摩會
より十六日と南都興福寺ヨ於て
こまき供を大職冠の時日ヨありて

金毘羅祭 十日讃州務足郡ヨ
ありなる神一座三
輪大明神或ハ素島ヨる高山の形系

の門ヨ似たりなりを山と号せ
十二日芭蕉庵杭まゝ伊
賀のくまぐ倍姓松尾氏

芭蕉忌 初の名ハす七後ハ忠友工門宗成と
改む後江戸ヨ居して能譜ヨ名あ
り元禄七年十月十二日痢疾を患て

難波の旅亭ヨ没せ其角を本大料
筆堂骸とちりて大津
の幾仲ち葬るとあり

○御景供
十三日又所命攝政公金式
と稱せ日蓮上人の時忌日ヨ

○下元
十五日正月元七月中元十
月下元とせと天宗月とせ

○水官
厄と解せ 十五日水官人の善惡を
とる一以て天帝ヨ奏せ

○聖一忌 十七日洛の赤福寺の
開山忌ありそ日方丈
ハ什物をうきり午後聖一の像を腰
與ハ糸をて経書の須弥壇ヨ安置

前より同一宗師の人作とあり
日の全日と年中遊山の終

一百字門此
徒この月親

○夷講えいぎょうの

月廿日或ハ家例ニ依テ日定ラモ南
 門ノ後西宮大祓宮ト云ルこの祓宮
 災ト云フ
 云々
 折言文拂
 廿日此ハ夷進
 ニ商家山々

六日 是八夷進
以商山海

の弥味とうきり酒宴を設く年中出
るもの花主或ハ座この人を招き
餐食を是を拵文拂といふ是ハ
人々を欺き賣の罪と辨ふゆゑ
る故宗師小ハ官者多く是して来
四条通りより乃とある本社あり
是を拵文といふの社といふ又
大坂よりハ々々の社の社々々
○法

○法

北四日より、北八日と
仁のころより、後より

○大社の神

十一日より十七日と大社梓葉文法
宮へ出雲國神門郡梓葉村より

二年無跡毎年神祭七十二度蛇出
 十月八日^ハ泳秘の系りと云ふ凡十
 十日より十七日とを齋と稱ふこの
 風烈しく波荒き日一蛇化皮て森
 竊て海上に浮む是をとりて曲物
 盛り鉢多し納むと云りその蛇類
 蛇は似て錢形^{ぜにがた}の班文あり尾先
 尾は似て岐^{くわ}ちく屈曲して宇多神
 のこし尾形系才一と云ふものこ

梅尾寺ハ明恵
 人の関を主として

三月二茶と持五
月以壺へ詰るあ

○初霜。早霜。霧。初二
消る。霜の禱。雪

のふ。霜の
い。霜の
霜山朋生
汐藻
霜

企
上
「まはひこめ
おとりの秘蔵
よめをひこめ

日うる者のやをれうちようそらよも
さのかうくねめるといふああり

雨 又雲雨とも云ふ。初時雨也。村志

くま 雨よりふりどきまをいふ。暴雲雨に。涙の志

くま 雨よりふりどきまをいふ。何れも涙。川音

時雨 松風の時雨 川音 松風の

夜時雨 片時雨 一方ハそれ一方

横時雨 風はあつてよく。雨の志

時雨 風の。木枯 風と云ふ

より秋をいふ風は。液雨 唐國

立冬の後十日を入液と。初雪 初

消 初雪の見赤 群臣系肉をいふ

初氷 初氷解

氷ハひゆる。冬牡丹 八月より

十月より名開く。名草枯 菊

菊をいふ。冬椿 早咲椿。椿

の志ハ春に冬

開くものを名開く名づ

けて人それを愛せ

石路とも云ふ。寒菊 小菊

の大方ハ希に云ハ。八手の花 菊

多く二重なる。茶の花

白花 山茶花 一の茶の志あり

寒梅 梅

花 狂風といふ。水

是候。かきまき等の名あり

仙花

千葉あり單葉あり
市のお茶屋でその花を
○枇

杷の花

白き花小く八月より咲き
十月に盛んで臘月と

もある

○榧の花

木を畑まで牧
やりとるゆゑ

はやくは油をとるおはいぬや
て食ふづうりも小木まですく実を

むき
○散紅葉○名の草枯

る
○の字色の
○魑 風木上を
字結て秋に

といふ或ハ木枯は作る冬時の疾風
あり入倍風は作る本朝の倍字に

音詳

○鶯の子鳴

冬日常寂
中は啼くも

のありえうれと心まる
あうむ是をさう啼といふ
○落葉

諸木の葉の
風は音をいふ
○枯尾花○枯

あーは小ハき
○柊の花 和名と
さハり

もが秘花はむつりといふ
○木代葉

○木
○木葉の雨 木葉雨の雨の
ふもごとく木葉

の葉
○枯柳○冬木の櫻
と云

咲のさよハあらむ
冬咲くさうらあり
○雪の下 葉

四月に鴨足草目物なるがじ葉ハ冬
も盛なりさうといふ名は依て葉と

ある
○大根 大根引。おろし葉
小似て根大なりな

は大根
といふ

無二冬物 雪 六花 凡そ木の
花多くハ

五出雪花 雪吹 雪消 食
独六出云く 交るる

整て雪を防
くを雪けといふ
○雪消 只大

とさうりもよめりこきまの雪
をりといへる花もあり
加い

むら雪
○ふひら雪おろるる雪よ
けてうをささりふたひら

惟子の男
○雪おろれ 雪おろす
といふ

石鹽鹽 ○ 湯安

鵠こ ○ 鴈こ ○ 角鷹かくよう ○ 周鳥しゅうちう

紫鷲

鷲人の子クビ子
紫とさるをり

○鷲鷲

鷲令

鷲令をいふ
鷲を画るに

○鷲

よく
沙ス

と食ふ皆消化せし海蛤と食
ふて消化せし蜆を以て出ツ

白

鳧

○黒鳧。阿伊佐
○鶩。鶩。鶩

○あぢむら

○鳧巴。鶩。鶩
ふあぢむらと訓

○水鳥「浮寐

鳥

○行ちどり。浦多る。群ふ
鳥。万葉は乳る又ふる。川

鳥。小鳥ちどり。鶩ふる。磯
ちどり。夕波ふる。友ちどり

○水

魚氷魚の使

山城近江氷魚
網代一ヶ所を外

氷魚九月より十
二月まで賣る

○紫漬

冬月伏
足の里

人紫漬を以て

○浚取

炭を
中池

小魚をとるる

魚を浚取して

○網代

魚を取
る柵

諸魚をとる

宇治田上る。氷魚と

○夜魚

とらん。うづものる

かゝる鳥

鳥の

「鷹匠」○追

鳥狩

列卒を以雉子等の外を
一つの鳥を追出さるる○

鳥叫

鳥鳴と云ふこと又鳥の声
をあげて鳥を追出さるる

翦鷹

○偷立鳥
小かく

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

かゝる鳥

鳥の

「鷹匠」○追

鳥狩

列卒を以雉子等の外を
一つの鳥を追出さるる○

鳥叫

鳥鳴と云ふこと又鳥の声
をあげて鳥を追出さるる

翦鷹

○偷立鳥
小かく

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

○ゆきつる鳥

かーこる

鷹の

鷹匠

○追

鳥狩

セニ列卒を以雉子その外を
一てのるを追出ーとるこ

○

鳥叫

そん鳥鷹を呼ぶこ又鷗人の声
とあげてるを追立るとも

ふ 翦鷹 ○偷立鳥

ゆきしらとり 学ぶと
小かく

まじるるるの鷹はお
そきて竊はーと云

○めきこつる

鷹はあふてその蔭
おどを飛ぶをさう

○茂ー草

鷹あるふを
まじらまじら

田洛草

鷹のるを
追はー

るふの
るこ

カ草

鷹のるをとり片足
ふて子を松と飛立

をぬ
かり

○めくめる
鷗より小をさ
くは飛足とあ

いめあーい
ハ放ちやるとぞ

○列卒縄

セニ麻猫は
縄を引

麻を追ぬまに鷹ふし
列卒入るこく勿論こ

○鷹犬○

うつゑ
狩杖 犬を牽し

狩場

○真

祭

冬至。唐山の人炎帝と号する弟を奉りて茶を初めたり

医

匠乃の祖神に医所ありと云

暦

冬至は月四の休と祀せり

の奏

朔日中務省より明年の暦とて子へするをよま上南

厨

は出所ありて是を清浄ある

唐

のくどまりハ欽明天皇十四年百

濟

の博士ガ

○宮線

を添そへ晋魏の間

宮中紅線

を以日影を量る

冬玉の後長

と一線と添ふ

○履

婦人冬至の日履と襪

襪と献

を舅姑よりする

○赤豆粥

冬至。共工氏の子

冬玉は死をその子の冥疫鬼と云

まり赤豆をおさるなり冬玉の日州

豆粥を食て

疫を攘ふ

○あくらか

十二月朔日赤小豆飯を

○相嘗

用ふ是をあくらと云

祭

上郊延喜式よりおも寄るの

宗像祭

上郊延喜式よりおも寄るの

卒川祭

卒川祭

杜本祭

杜本祭

○當麻祭

○當麻祭

○中山祭

○中山祭

○大原野祭

○大原野祭

○吉田祭

○吉田祭

○梅宮祭

○梅宮祭

○山科祭

○山科祭

○平野祭

○平野祭

○五節帳臺の試

御

九十六

祭

冬至。唐山の人炎帝と号する弟を奉りて茶を初めたり

医乃の祖神に医所ありとまをへは月四の神を祀り

○曆

の奏

朔日中務省より明年の暦を天子へするをいふ上南

陽は出所ありて是を清浄ある

暦のよりよりハ欽明天皇十四年百

濟の博士が

○宮線を添

晋魏の間

宮中紅線を以日影を量る

冬至の後長きと一線を添ふ

○履

襪と献る

婦人冬至の日履と襪を舅姑よりてする

是冬至を

○赤豆粥

冬至。共工氏の子

冬至は死をその子の灵疫鬼と云まり赤豆をおさるなり冬至の日州

豆粥を食て

疫を攘ふ

○あられかき

十一月朔日赤小豆飯を

用ふ是をあられと云ふ

○相嘗

祭

上郊延喜式よりいふお嘗祭の

は

○宗像祭

佐賀県あり祭る神とす。思姫。臨織津姫。名神

姫の三女と云はは皆素戔嗚鳥の妻と云り

杜本祭

○當麻祭

卒川祭

この杜ハ素戔の子也町にあり開化天皇この

比よて四月九日山崩りの小陵なる神開化天皇。子也神。住吉の神

と云ふ祭ハ上ノ酉日

○梅宮祭

○當宗祭

○中山祭

松尾祭

○大原野祭

園韓の両祭

○吉田祭

日吉祭

○山科祭

春日祭

○平野祭

五節帳臺の試

子日或御

忌といふ心之 ○三嶋大明神祭 伊豆

祭ハ中ノ酉日之祭神大山祇イサノミコの祭礼の日決玉より商人よりて瑞の物とあるふ是をいふる ○子祭 申子祭

○子燈心 毎月子の月ちるゆゑの日は大星と云ふ二服六根黒米墨豆をいふ ○道陸神祭 十六日。大

合法辻の辺は小サさる仙あり此仙の教は米の粉とゆり供物を代へ毎々審神と申して踊る是を道陸神祭といふこの祭の二三日あよ

里村中の寺出て往來の人々供物料をとふあふふれハ縄は泥をぬりて人を走るといふ俗は ○日陰の

髪 日かげの糸。日陰のかつらハ一名とさがり昔といふ神祭の時この昔をとりて舞人神子などの髪は又袖もかざりけるを今も日かげの糸とて髪よかい

○心葉 梅花三

金のはきはあのを貝と仰るるい星を心葉といふ ○神遊

ひのす 式抄は太常寺の時近江の板田郡より老翁の糸りて綿を春くその時あさけき年の始はかくこころふとせとてた

のこさとつとといふおととふこのお古々泉よ出より又露のおももとよりうらさ山よあや雪のまふくとさふくお山おゆな ○阿

知女 是ハ神床の明物の名 ○庭燎 神床の時焼火きり。火慶焼とハふこの庭燎とあると神代

出より ○採物のす 是ハ神床をさる人その手

葛の 韓神謡 宮内省よ史 大前張小前張

神樂歌 千

伊豆

○申
子祭

大根黑米

十六日。大

恆天王寺村

山

三二日あよ

繩又泥とぬ

○日陰ひかげの

のかうらハ一

ふもとの髪

今心口上げ

集
梅花三

神遊

近江

乙卯年

ふやうの
のふち

のま
○
阿あ

庭

大虞燒と

八神楽を
人々の手

之。抄。
折。抄。

內省王史

前張

樂歌千。

哥千

被初

未明より東風の解
よおは女児ははめて被る

酒の市

酉ノ日伊豆国
三石の松あり

雞の町詣

酉ノ日經大明神の社
武州葛飾郡花又

村あり

毎年十月酉の日
市より酉の日あり

以上の石をあらはし

報恩講

二

日より廿八日と祝書上人の忌日と
西の本形より於て是を僧に

戸在宗家門の院より僧に
ハソノ寺より月と持を又

昨を討てて天を快

大師講

廿一日より

智恵粥

是天台智者
師の忌日と比

叡東叡日光の三山廿一日より廿二日
の朝より登りて笠松法同あり

福をとり一山一徳の年々金坊と
初むこれと天台より小佐間も亦

大師講と修あづま赤小豆粥と食お枯
茶とわて

御祭

廿七日春日若草の祭
と去る一町より平林の

中より序祭を春日の安居と
いふ常ハ宮もなく芝系とこの祭ハ

人皇七十五代崇徳院の御宇天下
大ニ飢饉一二年又大ニ疫癘あり

り関白法性も忠通とこの祭礼の
大祭を数夜と神めて下りする

よりて毎々

日の使

春日祭
の時関白

面よりなり

後日の能

廿八日春日は能あり祭

掛鳥

礼の後春日は後日の能と云

宇賀

ま春日祭の時を以て

祭

晦日九条東洞院より

歌舞

妓足揃顔見連見

伎の

名ハ文獻通考よりへりその儀
義妓は作る十一月春日祭に大

恒芝居敷居を之の敷せといふ

といハ三代目中村初之助云々

被初

未開より西東北の節解
よおは女兒ははめて被る

西の市

酉ノ日伊豆国
三時の辰あり

雞の町詣

酉ノ日經大明神の社
武州葛飾郡花又

村あり

毎年十月酉の日
市より酉の日よりあれは三日とち市

報恩講

二
日より廿八日と祝書上人の忌日之東

西の本形

あはれて是を修め末に

戸在宗家門の院

末詣親来を成

ハソハ寺

お月と様を又所詣ふ

師の時

天衣快恩之

修は是を所詣風とよ

大師講

廿一日より

智恵粥 是天台智者

廿四日

師の忌日之比

叡東叡日光の三山

廿一日より廿二日

の朝より

登壇法同ありこれと

詣ふ

一山一徳の年々金坊と

勅ひこれと天台寺

より小僧同も亦

大師講と修

赤小豆粥と食お枯

御祭

廿七日春日若宮の祭を

中より

所より平林の

いふ常

八宮もなり芝系之この祭ハ

人皇七十五代崇徳院

の御宇天下

大に飢饉

二年又大に疫癘あ

り関白法性も忠通

この祭礼の

大形を

散り神りて下詣るる

よりて毎

年

日の使

春日祭

後日の能

掛鳥

廿八日

春日祭あり

祭

晦日九条東洞院

歌

舞

妓足揃

顔見連見

名ハ文

歌通考より

名ハ文

歌通考より

名ハ文

歌通考より

名ハ文

歌通考より

名ハ文

歌通考より

名ハ文

歌通考より

名ハ文

歌通考より

名ハ文

歌通考より

名ハ文

歌通考より

名ハ文

歌通考より

名ハ文

歌通考より

名ハ文

歌通考より

名ハ文

歌通考より

名ハ文

歌通考より

名ハ文

歌通考より

名ハ文

歌通考より

名ハ文

歌通考より

名ハ文

歌通考より

名ハ文

歌通考より

名ハ文

歌通考より

名ハ文

歌通考より

名ハ文

歌通考より

名ハ文

歌通考より

名ハ文

歌通考より

名ハ文

歌通考より

以ふをもちむといふ 都見をよ
つらとせといふ 江戸三望の芝居
十月晦日の 荳茶店の形は移る
の燈籠を出る 是を都見せの飾
物といふ 或ハ貝原の花より酒
樽菓子のかきと山のくく 積あが
大なる 礼上某太の文をよ
く是を積物といふ くれらとん物せ
んとて 諸人 都見せ
いと更よいふべうらむ ○寒念

佛 凡そ三十日の間 仏門の徒 毎
日を 佛を唱へ 仏名を唱へて 三昧
を廻す 江戸ハ 沙彌親喜又品川千住
の法場を巡行する 是を 念仏

と 寒垢離 修験の徒 中々
云 并ハ 楊上よ 立て水
を あも 鉢を 乞ふ 是を
垢離といふ 是を 中々 水
決必 中々 製する
その 皆 定て 造と 称す

寒声 歌曲は 越ふ山の 定中 朝暮 大は
声を 發せ 是を 声といふ 或ハ
さきさき

○沢庵漬製 凡そ 十月
大根の 沢庵漬を 製する 是を 早春の
并物と 考へ 爲之 元来 川東 海老の
沢庵 和尚 始て 是を 製す

○菜食 加ハ 沢庵漬の 名ありといふ
中 虚症の人 難肉 難
肉ハ 湯梅と 食ふ

○新干蕪 新干大根 ○太山樞 ○新
生姜 一名 生薑 一名 寒苦鳥 一名 雪の

辛 是を 考へ といふ この 香 日本よ 見る
こは 天竺 印度の 雪山よ 是を 考へ
き 香は 苦く み 香く その 声 寒苦身

と 責夜明 けハ 菓を作らん 夜明て
又 唱く 夕日 死を 告ぐ 明日 死を 告
らむ 何の 故より 栖を 造て 吾等の
身を 安穩に せん といふ

○杜父魚 ありき 是を 時出る 魚といふ
魚といふ 名 川よ 多く

十二月 十二月 八日 大呂 小建の辰
防免 出んと 欲して 陰
○小寒 全の
冬十二月 百一

癸丑年五月十五日

癸丑年五月十五日

○大寒

五目半またまた建

24/10/1914

春の日の光を浴びて

臘月。季冬。除月。調年。

○塗用。○窮正。○窮月。○盡年。

二陽月。極月。春待月。第

○梅初月。三三冬月。乙乙月。乙乙月。乙乙月。

五月。六月。七月。八月。
九月。

Ring 0

五月廿二日

と云ふは、たふと八筆

（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）

走 如 禮 之 魂

なましの^暗暗^種種あり

の朔日 未の初を甲といふ事と
と云ふて終りの岡

朔日亥

乙卯七月初七日

工作部 十二月 新 日 錄 共 會

元々娯楽を好む者なり

江戸の俗うまや川邊餅と

日餅七金六
火の建

乙卯年六月 廿六日 上如

食小子子○大神祭四月

大正三
天智天皇御

三目近江志三宗廟三留寺三

卷之六 朱子集注

崇禎七年正月八日

有公及五策 爲國綱目之

天臘と五月五日と地臘と

月七日と道徳臘と十月朔日

民歲臘之十二月朔日壬午

○溫米書の彌月彌

成道の日、本朝の五山は於

一の地ちよんてふと云ふな

ハ七宝五味の粥を常に入を

却本はらひ上うへ類るい十日

百二

よもあり祢祢左中臣に於
ホ卒昭年六月とこのこととを奏す○

次の祭日○神今食 十日

月よちば土日のお祭幸ある
中和院にて終る終幸ふき時

祢祢安よ○事始 八日○六
て終る終

事納 ○御佛名 十九日より
日追仁寿

寺本寺とてして寺帳の中より
南の額の同又南北は机とて

塔形とてく仏あり香花とて
ふ廂は地獄妻の御座風とて

つけ綿 寺仏名の時寺師長
○

梨の勸盃 寺の某抄津は柏
の庄とて左近府は寺の地利

を以官人以下酒際料は宛
も水仏名の

○年の終魂祭
の時より

○今ハこの日は○十二月の晦日
の時より

星佛賣 月ナ三日ハ寺年比
属星の形と彫て寺裡

○秋と民間よりあるを寺に
京師の街上星仏と賣るものあり

荷前の使 十三日終必より秋は
の福と十陵ハ墓へ

○御髪上 下午終く
梳眉約りて主る寮 寺髪の時

○土牛童子
一向ふて焼たり

の像と立 大さの日おまは陰陽
師土牛童子の像と門

口は立青黄赤白黒の土牛と春夏
秋冬の色とて立てるは疫病

○著駄の政 五月は同
檢非違使

在京にて刑法を行ふ頭とあると金
とつひはあると駄とつひは刑具と

内侍所の御神樂 天子内侍
は行幸時持

あり刀自祝詞をいふとあり内侍
ふの前は主る寮幔を引て官人庭燎

とて本末の重 ○取勝寺灌頂
と二行は設くは

よもあり祢祢左中臣（つぐなひ）於
小卒（こそ）昭年六月とこのこととを奏す○

次の祭日（まつひ）の神今食（かみけ）十日

月よおほし土日のおほし幸あるは
中和陰よて終る終幸ふき時

祢祢左（つぐなひ）○事始（ことのはじめ）八日（やっぴつ）六箇（むつ）
て終る

事納（ことづかひ）○御佛名（ごぶつな）十九日（じゅうくにち）より
は同

寺本堂とてりして寺帳の中より
南の額の同又南北は机とてり

塔形とてり仏おほし香花とてり
ふ廂は地獄変の所風とてり

つけ綿（つけわた）寺仏名の時寺師長より
府僧より授け終る綿

梨の勸盃（りのかんばい）光むく府の中將
氣の某抄津は柏

の莊と以左近府はおもその地利
を以官人以下酒醪の料は宛

も由仏名の○年の終代魂祭（おとりのしうたいこんさい）
時のより

は同今ハこの事は○十二月の晦日
の時よおほしては月朔日外の時

星佛賣（せいぶつうり）この月十三日ハ壬午年比
属星の形と彫て基裡

は秋と民間よりあるをををた
京師の街上星仏と賣るものあり

荷前の使（かりのつかい）十三日秋より秋は
相の稻と十陵ハ墓へ

は秋と民間よりあるをををた
わふその使に○御髪上（ごかみじやう）下千歳人
梳眉ゆりて主面寮

は向ふて焼たり○土牛童子（どぶこ）
は向ふて焼たり

の像と立（おと）大さの日おほし陰陽
師土牛童子の像と門

口は立ッ青黄赤白黒の土牛と春夏
秋冬の色は立ッて立るは疫疔

は立ッて立るは疫疔
は立ッて立るは疫疔

在京よて刑法を行ふ頭はあると金
とひひあると駄とひひは刑具

内侍所の御神樂（うち侍所のみかみが）天子内侍不
は行幸内侍

あつ刀自祝詞（あつたうじしご）をいふことあり内侍
ふの前は主面寮慢を引て官人庭燎

とて本末の望
と二行は設くは○寂勝寺灌頂（じやくしょうじくわんてい）
とて本末の望

十五日松尾の傍にあり
大務のつと今絶なり ○正月事

始十三日 ○衣配 女樂と試らるゝとて
先づ衣と配らる

り ○浅草寺年の市 凡年の
市ハ八分

浅草を以て天下の市とす十七日のおふ
十八日のおふより浅草の都の登壇と

いぞ ○大徳寺開山忌 廿二日山
野郡桑野より大徳寺開山忌の

忌日 建武二年十二月廿二日寂を
○

虚耗を照 廿四日床のふより灯
と照せば貧乏とて富

貴よ ○灶の神と送 廿四日今清
の廿ハ今日

灶神天より下りて家へ灶神の
れは供物をばれ神と送る

云てそのれと焼きてとて又正月
元日は神と迎ふとて新は灶神のれ

と張て物と ○鉢叩結願 廿八日
徳楽と

のふを小て踊念仏あり
結願とていふこと ○和希祈

の神事 昨日長門守の神の
あり集人の社と称を奉

る神五宝玉依姫彦火火出見豊玉
姫不誓合既度目良良の晦日の夜

更祝衣冠帯鉾よりて鎌と携
へ炬を奉神前の石燈の下りあり

入り和布と着て踊る終る祝詞あり
元旦は和布と神前より既して

いさを撒く国 ○齋宮繪馬 晦
日は然るあり

伊勢国多気郡齋宮村にあり齋宮
の樹下乃の傍に小祠あり毎月け

祭後をかくることあり外
疫神とてむむとせざるや ○五條

天神祭 節分。勝の儀。白朮
費する神大已貴少

彦名に祭れハ九月十日は行ふ節分
の夜京師の士民系詣り白朮を

買ていさを自家に焼くメカ木の
候を食ふこの候を食ふこの候社

地を供する所の社の傍る勝軍
といふ或ハもちひとかちんとつふ

名とまて ○吉田大板 せつを
もとり 百四

初家吉田の斎場の内陣に於て清
後を修む神人一人こまきよ後ふ正月
十九日の

○厄塚建る 吉田神祇
節分の後

官に於て行くるその式座の上塚を
築くこまきよ厄塚とよ正月十九日

○追儺 儺ハ以疫を張あり
去る 古人最こまきよを重ん

ま一名おまらひといふ儺ハ晦日の
は公事根元よりえより張せ

今、節分の夜とより掛さるも
ろに小も金吾除夜進儺とあれば

多かハ後 ○鬼ハ外福ハ内こ
のよりや

俗咒治て来ること久し卧雲日件録
云文安四年十二月廿二日明日立春故

及昏景每室散燂豆因唱鬼ハ
外福内四字云くこの呪よりの哉

○終賣 終 押 ○なる此挿
の挿挿ふ直の取さきと土佐日記

小も入えより 今ハ櫛の取を用ふ
ふはハ

○燂豆 鬼
○浅草

観音追儺 除夜より七日は金
竜山浅草寺あり

今夜来詣者中より元乃チ初更の鬼
形の者入堂外より又二人方相氏
の假面を被りたるものは追て堂
と巡る後除疫の札三千枚を撒して
諸人は與ふ来詣の人各あらそひ拾
ふて持ちて自家の戸に貼る

船神祭 小方除夜肉を以船神を
祀る 孟公。孟婆

○節分○年内立春○除

夜 十二月晦日これを除夜といふ
言ころハ此夜舊年を除くより

米洗 此日よかぎりむ餅米を洗ふと
いふ一説元日は心もまよふ

○大歳 元日
いふんを米をいふ日

○晚歳 餽歳
晦日と大歳といふ

○別歳。行歳。除歳。歳暮。いなる
年。年の終。年は流る。年の果

守歳。春急ぐ。年尾。春を隣
との際。年の湊。春近き

隣ハ近シト分歲 支那の俗除夜
ソノゴトトシ

り長初あつたり飲祝頌して
散ぢあふ分歲といふとあり ○大晦

日「小はこもり 十二月小の月を
ソノ九日あり ○

私大 奥州南部の人十二月小の月を
翌朔日を以て晦日とす

と云ふ私 ○厄穢 厄落此月
大といふぞ へるより貧者

毎數十人聚をす 神鬼は装ひ男婦
鑼鼓を以門を巡り銭を乞ふ是を打

夜朗と名づく ○年忘 唐山より
厄穢ハ逐疫ニ 淫散らる

之本朝三月下旬良親戚朋友
と請して酒醺とす是を以てありこま

と年忘といふ年 ○胸摘 節季
中の芳を忘る

むうハ乞児年の暮は人家の門は
より膚とあらりよと以狗を繋ぎ

節季さむらふくといふて鈴と
こまを胃とてきこふを節季といふ

よもの ○節季 二十二日より
ハナハ日なり ○波

等 伊勢大社
○年籠 年籠一元旦

津を渡る ○孟宗竹 孟宗竹を以て
生るり せぬおふくを

八目鱧取 江海取とて是あり
州海傍の海ふくを

名産とす上飯傍下飯傍一里を
の方冬月ふくを湖而少用く厚

二三尺ふくをのり ○笹和田の鯉
いりて鯉とす

取 常陸國美馬郡の鯉常國の名
産なりあり

塩引鮓乾鮓 ○塩鯉 ○

口塩鯉 口を以て歳暮のとあり
○年

の市 松竹賣。注連飾賣。破
子夜 賣。松竹賣。注連飾賣。破

賣 ○煤掃 和漢戸の十二月下旬
屋塵を掃く漢子

乞を除残といひ我儀とてを乞ふ
と又残といひ我儀とてを乞ふ

○扎納め 杉楠のれを焼 ○餅

○ 鵲始巢 うさぎ

○雞

○年木葉内重
薪をよる御

○大原の雜曜

Handwritten text, likely a signature or name, written vertically in cursive script.

三

大晦日の夜をきき
ふりてく葉をきき

酒と味噌
酒と味噌

○豆腐藥

大晦日
夜七時

Handwritten text: *Handwritten text, possibly a signature or name, written vertically.*

枕 顔の孔。顔の凹處を言ふ。
ふ鉄といふ伝説あり。

○門松

○曆の卷之
○右の卷之曆

日午、江

櫓の東二所をあり四日市ふあり三
万歳江戸ありて服者のやそ
中ふ
るり
○年の夜の大神樂
日の夜より正月五日まで江戸の所
大神樂の物々舞々ある家々
をを

○神祇之詞

大嘗會新嘗會○宮居

○古宮○小宮。
竹の宮。宮げら。○社。荒社。古
○あそふ。朱の社。社。鳥居。朱
既。束社。玉中。ろ。玉垣。瑞
○あそふ鳥居。ふの。玉垣。瑞
とりある。丸木のる。玉垣。瑞
○朱のむぐさ。子代の古垣。あそ
玉垣。あそふむぐさ。あそふむ

片そぐ。駒犬。

拜殿。神供殿。称宜。神

長官。祭主。おちら。御

ひ。伊勢山田宇治のあそ。御

。あそら。夕むら。夜。御注連

川。由連連繩。○神樂。里神

祭。祭主。○神取。神のろ

忌竹さ。○御幣。大ぬき。

神慮。詫宜。夢想。御湯

立。拍掌。近拍。忍拍。

御闌。御贖物。木綿。

。あそふ。○便の水。御火

焼○齋いしもの物忌ものを誓文ちかひがみ

昨けふ起請○氏神うぢがみ打火切

火鎮守○三寸さんすん洗米○

繪馬○矢鏑馬○放生會やぶささけ

岩船穗屋作神いふねいさやうおろし

舟玉ふねたま金ばらきんばら○常陸帶○

東遊あづまあそび乙女子○伊勢講○

初午○小忌衣おもしろもて○庚申待

月待つきまち日ひもち

遷宮 非神祇詞ひしんぎ

元方○年德○男山○

佐保姫さほへ竜田姫りゅうでん橋姫○

竜神りゅうじん龍宮○放生川○

契しえ○山伏○柵

上己じょうぎの萩

尺教の詞しやくけうのし佛像ぶつぞう。木像。立像。

後像ごぞう○元祖げんそ。開山。祖師。○門かど

院家○國師○僧祿○

禪師ぜんし律師りつし長老ちやうらう上人

尚○西堂さいだう東堂とうだう○首くび

藏主ざうしゆ典主てんしゆ書記しき行堂ぎやうだう

正僧都しやうそうと法印ほふいん法眼ほふがん

橋阿闍梨きやうあせり檢校けんぎやう法

法躰ほふたい禪門ぜんもん入道にゅうだう發はつ

白九

新發意坊官比丘新發意坊官比丘

丘尼丘尼居坊主坊房とく

碩學碩學○僧老僧

出家出家

素門素門叔氏叔氏沙弥沙弥○寺

○裏裏○古古○荒荒○祿祿○

三井三井○清清見見○初初殿殿○

○後後堂堂○古古堂堂○越越堂堂○茶茶堂堂○

伽藍伽藍○塔塔○み重塔。三重塔

輪藏輪藏回廊回廊

大客殿大客殿厨厨眠藏眠藏○居

士行士行入山伏入山伏○輪宝頭輪宝頭

陀陀製製染染○珠數念珠

○百八百八○帽子帽子○花血花血○鈴

拂子拂子○却却むむぶぶ○能化能化

化化○修行修行導師導師喝食喝食○

鉢叩鉢叩看經看經○五輪五輪卵塔卵塔

素結素結十德十德頭襟頭襟條懸條懸

金剛杖金剛杖○喚鐘喚鐘鳥鐘鳥鐘

鐺鐺鉢鉢鯢鯢口木魚口木魚瑤瑤瑤瑤

經帷子經帷子○鉢鉢の米の米○談義談義

法論法論座禪座禪灌頂灌頂布施布施○

施我鬼施我鬼功德功德因果因果○地

獄獄流轉流轉三界三界干界干界○

五山

悟道

○茶湯○

○位牌○六

○室戶○

佛名菩薩名

○交中○
交卯○交

○天蓋賓

の臺
非^ル尺教詞
鐘○高野

山曰枝山愛宕

意に定まる詞を、但句作
を以て定むべし。然るとも

古人意の二句はありらひとよと
あり是ハ二句の目くら附くらお七
くなる時は詞は意を括せ
てお句の端と通くらあり
○
二句
シテ

一。思一。絶一。絶而久一。

意の奴。意衣。意菜。意の病。

思

ひ。嘉里ひ。里ふ人。深き里ひ。里

。あひ重ひ。重ひの、け。ほいなく重ふ

○ 巾さ情。涉さ情。情をう

涙の涙。袖の露。床の泪

山浪やまなみ

唐桑からくさあり男おとこ女をんな

望夫石ぼうふし

昔貞女ありその夫

は赴おもむく弱子じやくしと携たづなて餓うて死しす

北の山上は送り立たてて化かす

ふと又忠女あり

望夫望夫あり

婦をんなを慕慕ひて送おくす

は化かして葉はと成なる

領巾りやうきん

山やま肥ひお松浦まつらあり左ひだり

彦ひこが妻つま依用いよう媛ひめが古ふるき

尤風いうふう

郎らうのお供ともふる氏しの女をんな姑こして

當あたり大風たいふうをたてて天下てんかの婦をんなく

るは商旅しょうりを阻さまたむてとたふす

と名なづく又石郵いしゆうは作つくる石いし風ふうは

風ふうてこる

○手鬼名てにき

下総しもうさ葛くさ餅もちは同郵どうゆう中の英女えいめ

或あるハ云いふ児名こなハ武総ぶさうの方言ひやうげん女をんな

摠も称しょうあり

○夫お夫婦ふうふ

相あひあひする

と称しょう

○聶ね入い嫁娶けあ婚禮こんれい

郎らう貝桶かいとう

○媒ま氷人ひやうじん月老げつらう

御ごの熱名ねつな

○房ふ寢ね不ふ之し国くに家け

洞房どうふ兩株りやうしゆ合あ教けう花か

○翠すい

帳ちやう紅閨こうけい

○肉屏にくびやう

房中ふちゆうより

○後宮こうきゆう

禁闕きんけつ中ちゆう美人みじん

人の名な美人みじんと画え

王照君わうしやうきん

胡地こち小嫁せうけ

故事こしなり

なるはて胡地こちとつづ

て夷人えいじんの妻つまとあり

○返魂えんこん

香かう武帝へいの夫人ふじん李り

○香かう薰物くんぶつ

待まち。黄熟香わうじやくかう。十種香じしゆかう。麝香じやかう。三夕香さんせきかう。吳越香ごえつかう。沉香せんかう。國馨こくかう

山浪やまなみ

唐桑からくさはあり男おとこはあり女をんなあり

望夫石ぼうふし

昔貞女ありその

北の山上は送り立たてをて

るとうり又忠女あり

望夫望夫あり

婦を夫と慕ひて送

る化して果て成ると

山やま肥ひお松浦まつらあり左ひだり

尤風いうふうお傳はつふる氏の女をんな姑おば

郎らうの婦はつとある尤いう出で

當あたは夫ふうをたてて天下てんかの

るは商旅しやうりを阻むべしと

と名づく又石郵いしゆうは作るを

風ふうてこるかつらや

こ手児名てにあこち

ト総葛そうが解と山同郵やまどうゆう中の

或あるは云ふ児名こなは武総ぶそうの方かた言こと

惣そう称しょうあり

夫婦ふうふいりハ男おとこ

と称なづひり

○智入ちいり嫁娶けあひ婚禮こんらい

郎らう貝桶かいとう○媒まへ氷人ひやうじん月老げうらう又

御ごの熱ねつ名な○房ふ中ちゆうのふ門もん

洞房どうふ洞房どうふ兩りやう株くさ合が教けう花か

帳紅閨ちやうこうけい○肉屏にくびん房中ふちゆうより

とこ後宮こうきゆう禁闕きんけつ中ちゆう美人びやうじん

人の名美人ひとのなびやうじんと画え帝ていの宮女きやうにょ

王照君わうしやうきん胡地こち小嫁せうけ是こゝも王

故事こしなり

故郷こきやうはて胡地こちとつづ

て夷人えいじんの妻つまとありと

返魂えんこん

香かう武帝わうていの夫人ふじん李り

○香かう薰物くんぶつ

待まち黄熟香わうじくかう十種香じしゆかう麝香じやかう

三夕香さんせきかう吳越香ごえつかう沉香せんかう國麝こくじや

妓の幼稚 ○白眉神 妓院にある
かきもの

○鶺鴒 俗よりちてとふ
妓楼の老女 ○陰

間 男色を 飛子 旅陰 間 ○金剛

○野郎 伽やらふ 江戸ふて舟ま
んぢう大坂よ

て伽やらの又 ○亡八 总街小ぢひ
き仁美礼智

孝財忠信のハツと亡 ○暁傘 元祖
ふちよ七八とハ云と

江戸吉原の总街中後朝雨ふきど
傘と賣まじりとき暁傘といふ其角

が不とき暁傘と ○神媒 ○
哭ききりといふ是なり

形見 ○かきこの肩のうきこの髪のか
このみこのうきこの髪のか

○恪氣三ころ ○みくらさ
つめさこ心

○肌ふる ○共白髪 ○縁 ○う
きえ

みー○えん結び○浅き ○仇くら
えんー○きくらえん

飛紅 ○父無子 子をおろ

を ○かいよえ 虫の印 あり

びあひ ぶり心 男小き ○

屍目つらひ づとやする 忘

らる 古さる 刃ざる ざ

近まより 悲恋詞 後家 あり

賤女市女下女 桂女

無常の詞 哀傷にきよき
ささりの哀まるきり

塩干山 あゝ 鴉 鳥辺野

の烟 舟岡 ○茶毘場 火葬
場

茶毘の烟 無常の烟 死

出の山 死むの旅 みつせ川

○死にゆく川 ○死人 ○まゐる命 ○棺

○三途川 ○死にゆく川 ○死人 ○まゐる命 ○棺

よせ ○墓 ○おくつぎ ○そとを

中陰 四十九の餅 魂結び

○魂をむ ○枕食 ○自殺 ○自

害 ○白骨 ○冥途 黄泉

幽霊 ○亡鬼 ○骸骨 ○せが

ろ ○ぬるま 枕 ○ふるま 食

辞世

述懐之詞 并 懷舊 往昔

はへむく人 ○むく 海 ○いふへ

の多 ○夢の泣 ○むく の友 ○志の

ふ昔 ○むく のま 秋 ○ふは ○老

老 ○年寄 浪人 ○生死

白髪 命 ○後家 ○憂

世 ○夢の世 ○親子 ○世

帯 ○姥 ○隠居 ○世

苔の袂 ○黒漆 眉の霜

侘住 捨る身 ○零落 家

と賣 賣食 どの目 ○

古家 摺切 不仕合

借金 借金 年忌月

忌 遠忌

非述 懷詞 釣翁 賣炭

翁○賤。山「愚尉」座頭

「瞽女」○病。病○草の菴

「柴の戸」

人倫の詞雲の上人。人○

武士。士の字を付くハナ侍兵郎

等「奏者」使者「醫師」。付ハ

佛師「繪師」鑄物師

儒者。者の字ハハナシム人傳○僧

○法師。山伏。○農人。草薙。商

人。所「職人」。かめり伶人○藝

者。やく者○翁姥六尺伯永

番太「獵人」。獵師

舟人「桂女」身我獨他

関守田守「汝已」苗代守

「綱代守」○月のある

亭主兄

姉妹「海士」民「狂人」御乳

母○衆徒「樵夫」鷹匠「瞽」

女「盜賊」○祢

且「若君」臣下「恋の君」

「嫂妻」長者「伯父」伯母

祖父「祖母」姑舅「娘姪」

孫○児尉「御傳母」御師

能太夫「任丁」道心者「屠」

児男女「友達」内儀「師匠」
喝食「同宿」博士「酒醉」
張

非人倫詞「東宮」皇女「門跡」
「公家帝」親王「宮女院」本
院「仙洞」新院「太子」大君
「人間入道」山姫「仙人」長老
「二門」二家「六親」奉行「雜
式」給仕「典藥」下戸「眷属」
「祖師」我君「橋姫」本道
「外科」老若「俗大勢」勢
樹人形「龍耳」本後耳「啞盲」

目○代官「目代」目付○月
と友「花」と友「月」とあは
しづまも法者まゝともよ屋の
まづるま六人輪はありさるこ

居所之詞「家」○家居○住居
○小家○古家「門」

戸「背戸」窓「部」格子「障

子」殿○扇の内○きき扇○菊作○
花の扇○漣扇○釣どの

○不そ○樓「上」○宿「上」省○浅
い

よもぎふの省○省の振戸○屋
むぐりの省○あまふるわい

○あづまや○まろや○茅や○かりや○
苔や○まや○もや○あまふるや○いこつや

城「天守」亭「玄關」屋「形」
本

ハ館「路地」棟「軒」棚「床」庵
うり

里「村」天井「廣間」見世

「部屋」廊下「臺所」座敷壁

「居間」母屋「湯殿」納戸「屋

根」欄干「築地」垣隣「藏

椽」火燵「坪内」鴨居「囲

爐」簀の子「囲爐裏」礎

「簾」井筒「走」畳「暖簾

「外面」番所

「非居所」詞「寺」室の戸「築山

「堂」皇居「内裡」塔「伽藍」方

丈「宮」社「眠藏」柱「庫裡

「辺土」竈「火焼屋

「夜分」之詞「神樂」日待明星

七夕「夢」夢想の夢「梟」稻

妻「宵」や「あま」く「月」よ

こゑ「三々」月の入「明方」有

明錢「東雲」暗「霰」走「掃

頭」の綿「住吉」の市「炬火

「灯籠」桃燈「行燈」燭臺「燭

燭」少「し」び「漁火」花見

「埋火」家「あて」おどろむ「ま

「寢」かじく「著」はて「床

狐「照射」蚊遣火「簾」鷄

「別」の鳥「巖」嵐「蚊」香の

寢「苔」延「あ」結「東雲

蝙蝠ふふ「螢」鵜舟ういふね○あぶら火

「短檠」送り火あきまつき○油續あぶらつぎ油突

「卧」ねごと「轉寐」起あきま衾枕

「時」鐘り深更ふかやみ○紙燭あきく手燭てしろう

初鳥はつとり「鵜川」規狩わていろう網代床

衛士の焼火ゑしのか「燎」竜灯りょうとう○星

と唱な○追難ついな○産女うぶめ化物

「夜」發や辻君つじきみ

「非夜」分詞ひやぶんし法灯ほふとう鐘霞かねがすけ泊夏はくか

神樂かみがら「その曉」をるをる夜「焼」

火あひ「芦火」御火焼みかき常の燈○

夜と待月よとまちづき○明とつるあきとつる。明果あきぬ

有明あきの入いり三ヶ月出でるけ

ふの月ふのつき「けふの鐘」朝朗あさか入相

座禪の床「泊狩」○一夜酒

泊舟はくふね○夢幻やまごころ多た現

山類の詞

山やま領りやう嶽たけ岡おか岨そで坂さか谷や尾び

上うへ「高根」林麓はやし○瀧島たき棧しき「杣」

木き「炭」竈やしろ山姫やまひめ「山姥」浮島うきしま

小島こしま「小塩」山梨やまなしの類るい「山鳥」

の類るい○山やまはある関かん。逢坂おうさかの

関かん。不破ふたけの関かん○五山ごさん「葛城」了りやう

さの岩いわ橋はし。

久米路くみちのど

非山類詞就鳥の峰「雪山」島

國「淡路島」山科の宮○富

士川「竜田川」○木曾路「鈴

鹿路」小野「吉野」○「岩橋

瀧津川」初瀨「三島」岩屋宇

治の川島○杣人「炭焼」灰水

「新」山賤「仙人」下野「猿」越

路

水辺の詞「海」浦「濱」江「湊

渚」島「沖」岸「堤」治「汀」川

「水淵」瀨「洲」滝「泉」井「溝

「寄」淡潮「汐」波「氷」流「舟

橋「筏」網「釣」清水「菟」關

伽「氷柱」○温泉「塩焼」浮

水「釣瓶」下「樋」浮桶「蛸」壺

海士「狸々」和布の類○龜

永鷄「守宮」水鳥「千鳥」都

鳥「鳥」鶺鴒「藻」住虫「魚鱗

の類○橋姫「夏神樂」放生

會○御移タス○月の水水辺

「月」の玉タマ○「零漂」○「零

水」屑「蛇」籠○「藻」蓮「芦

濱」萩「杜若」菖蒲○「真

薦」萍「菱」流水○「氷」魚

田井「柴漬」亀井〇里の
蜚水主「湾」やま「住吉神」
三井寺「清見寺」志賀の
松「大津」明石「粟津」須戸
「松島」三つ小島「難波」
津「浦」ある関「八瀬」濱水
綿「非水辺詞」難波寺「志賀」
「住吉」大井「粟つが原」天の
うね橋「泪川」みづせ川夢
の浮橋「高津の宮」白川の
関「月の水」軒の玉水「布曝」
ま「室のハ」詞の海「田の

筧「苗代」〇筧屋「横川」小
田の梯「霞のう」硯水「さ
の渡」〇管「蓮肉」蓮の上
契る〇岩舟「くもり貝」淀
「思ひの淵」松浦姫〇龍干
魚「干貝」乾海「龍」天水「鵲」
の橋「紅葉の橋」

季よきしる詞附雜のる詞

葉守の神「梅の宮」雪山「か
とあり」和泉の國「放生川」
「櫻川」榊「浦」柳の水「橘の」
都「藤原の都」柞の木林「富

田井「柴漬」亀井〇里の

蟹「水主」やま湾「築」やま住吉神

三井寺「清見寺」志賀の

松「大津」明石「粟津」須戸

松島「三丁」小島「難波」

津「浦」ある関「八瀬」濱水

綿「非水」辺詞「難波」寺「志賀」

士の雪「菜つみ川」鹿角「藻」
は住虫「鳥」その虫「かいつむ」
り「鶴の巢」鷗「梟」都鳥
「玉ひび」かどす「雲雀毛の」
駒「黒牡丹」千魚の類「櫻」
柏「椋」千種「菜」白「柴」末
摘花「空蟬の君」落葉の宮
「薄殿」茶の花「香」菜飯「菜」
汁「いけ栗」梅干「煮梅」干
わらひ「いり豆」鴈の巢「經」
帽子「野遊ひ」頭の雪「眉」
の霜「梅壺」柳橋「箏笠」細

代屏風「細代車」黄泉「詞」
の花「花娘」花聲「花の帽」
子「花田」花うつと「さめり」
浪の花「さめのまや」さめむ
ら「花子の狂言」花の帶「さ」
かいらさ「造り花」さかつ不
「花丁子」花山の文をよと入きけり
春の月「月花」朧月夜「朧」
朧とむらり八月はあけぬと
影朧の夜とくもぬれど

夏の月「鉾の月」夏の夜の霜
秋の月あきよもあき
あきよもあき月あきよもあき
月の霜あきよもあき
月の霜あきよもあき

但おハ秋も陰ものさきバウ
よよりてあるものともなり
夜分よ

何なる秋の月三ヶ月出くの

月「朝の月」昼の月「暮の月」

「夕月」繪よか々る月止句の月
出る

てハ花分よあらむ。ト句の月
入るじてハ花分よあらむ
月の

字々合する時秋月は用る分

「玉兔」「玉蟾」は「男」「常娥」

「嫦娥」「盃の光」「盃の影」待

宵の影「いさよひ」「有明さ」

ゆら男

冬月「寒月」「さめる月」「月の

氷
牙る月之水也
小ハあらむ

雑の月「心の月」「胸の月」

夏の正花「余花」秋「若葉の

花も葉の「花小杜鵑」花は秋
さく

るり

秋の正花「花火」夜分「花相

撲植物よ「花燈籠」夜分

。灯籠植
物よあらむ

冬の正花「帰花」はるり

「餅花」植物食料
小ニ勺去「雑の正花」

作り花植物よ「繪の花」上「花

結び造り「花真壺」ある壺

「花轡」花形「花形」鼓

物はあ「花塗」花かいらざ物

はもやうあるは「茶の花香」食

「花子の狂言」人痛「燈火」食

花お「花鯉」食魚「花毛氈」毛氈

「花の種」花種「花種」花種

「詞の花」植物

「花やう」花

「花紅葉」雪月花

「花實」花

「花紅葉」雪月花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

「花實」花

日ニ 逢き日 鳩鳥 ふぶのうとを

句「女の字」ニ 女郎 「露」の林

馬駒ニ 後「訝」ニ 山「霰」ニ あ

「綱代」ニ 月代「ゆふ」とく

「方」とく「終末」とく「木

綿ニ 木「蟬」ニ 蛸

面と始ふもの「雷」ニ 花の散

移紅紫「初」ニ 庭「燈」ニ 照

戸ニ 谷の「とんる」ニ 木人傳のめのお

「魂」ニ 玉の「新」ニ 焼の「垣」ニ 垣

く「寐」ニ める「昔」ニ いは「海

「帯」ニ 帯

雨と「宿」ニ 宿「湊」ニ 朝庭

百歳大肉太「網」ニ 赤ニ 明「扇」ニ

扇「夕暮」ニ 夕「都」ニ 九「清水」ニ

水「壽福」ニ 木の「壽」の字ニ いのち

「志」とく「氷室」ニ うめらひ

○百韻之式

表八句 七句目月 裏十四句 九句

十三句 め花 二表十四句 十三句 二表十四

句 九句目月 三表十四句 二の表 三表

十四句 二の裏 名残表十四句 三

表 表 裏八句 七句目花 の定坐

○七十二候の式 表八句裏十四句 表十四句裏十四句

日はき日「鳩鳥」ふねのうとを

句「女の字」女郎「露鶴の林」

馬駒後「研」山「霰」あ

「網代」二月代「ゆふとく」

「以方とく」終末とく「木

綿木と「蟬」蛸

面と姫ふもの「雷」いな「花の散

「初」庭「灯」照

戸谷の「とんる」お但女めのとんる

魂玉の「薪」焼の「垣」垣「是

く淋「寐」める「昔」いは「海

「帯」帯

表十四句裏八句。首韻の三の二が
按るゝと七十二句と云ふべし

○四十四候の式

表八句裏十四句
名抄表十四句裏

八句。首韻の初めと名抄
の二がよて四十四なり

○五十韻

表八句裏十四句表十四
句裏十四句。首韻の二

の裏より五の五十韻と云ふ七十二
侯五十員四十四と云ふ花月の定
する額

は同ト

○歌仙之式

表六句

五句め月
の定坐

裏十二句

七句目
月十二

夕目

表十二句

十句め
月十二

裏十二句

花月

○源氏の式

表六句

五句め
月定坐

裏十二句

七句
め月

月十二句め
その定坐

表十二句

十一句
め月

裏十二句

二句

月花
同

表十二句

同

裏

六句

五句目その定坐。源氏ハ
このおやを仙よ加へる

表裏より二十
四句より

○長歌之式

表八句

七句
め月

裏十六句

九句目
月十三句

め
表十六句

十句
目月

二裏八句

七句
目花

○短歌之式

表四句

裏八句

初句目月
七句め花

八句

七句
め月

二裏四句

三句
目花

○長歌のハ四拍より四十八句之短歌行
三十四句之長歌坊支考り作るふといふ

○箴表六句

五句
め月

裏六句

五句

目花表六句と裏六句といふ
二十八句なりといふ

表十四句裏八句。百韻の三の二抄
按ると七十二句と云ふゆへに

○四十四候の式 表八句裏十四句
名抄表十四句裏

八句。百韻の初抄と名残
の二抄よて四十四なり

○五十韻 表八句裏十四句表十四
句裏十四句。百韻の二

の裏より五十五韻と云ふ七十二
侯と十員四十四と云ふ花月の定
する額

は同ト

○歌仙之式

表六句 五句め月
の定坐 裏十二句 七句目
月十二

句目 表十二句 十句め
月より 裏十二句 月
花

○源氏の式

表六句 五句め
月定坐 裏十二句 七句
め

月十句め 表十二句 十二句
め 裏十二句

二句 月花
同 表十二句 あま
同 裏

六句 五句目をの定坐。源氏ハ
このおをふ仙よ加へる

表裏より二十
四句よりと云

○長歌之式

表八句 七句
め月 裏十六句 九句目
月十三句

め 表十六句 十九句
目月 裏八句 七句
目花

○短歌之式

表四句 裏八句 初句目月
七句め花 二表

八句 七句
め月 二裏四句 三句
目花

○長歌の式 四抄よて四十八句之短歌行
三十四句之長歌坊支考り作るふといふ

○箴 表六句 五句
め月 裏六句 五
句

目花表六句と裏六句よりよて
二十八句なりといふ

○首尾

表六句

五句

裏六句

句

五句

○二物

幾句

句數同季

四季とも

春秋

三句より五句までつく

「夏冬」

一句

二句より五句までつて

「戀」

二句

五句より五句までつて

句末お端より出さるるあけ句は二句

をドめて出さるる

「神祇」

一句より

三句より多く

「釈教」

神祇と

二句より二句まで

「述懐」

句末お端より出さるるあけ句は二句

く「水邊」

山類

「人倫」

居所

一句より多く

「生類」

二句より二句まで

「植物」

二句より二句まで

「衣類」

二句より二句まで

「名所」

二句より二句まで

「降物」

二句より二句まで

「天象」

さびくは
ななくふ
遠くや
巻きり
舟を横ふ
客まをそ
いりおの
山をま
数ふ時の
花ふさきふ
星を白や
をりや
咲くふ
夕霞や
時くそ
山の端は
人もえぬ
濡毛は
志んく
川上と
更けや
自りや
み海や
別るや

志帆片帆
ひ合帆の
程んく
知る人ふ
舟外く
海山も
朝ちり
思ふ事
里の山
あふふ
新産の
巻あ
あふふ
川淀や
月の端の
明る帆
まふれを
老の所
一筋を
小板は
うく
僕さ
ふ

つゝのあくあきづゝ思ふあ
け亦あくゝゝとある目の附
あきを海く食むゝ皆此さ
を以て聯句と云ふ時に此
意味を傳へて乃人の助とな
けんと云ふにあはるあや
と云ふなり

○表六句

スミヤハラ

柿の香子蘭とりの中ふ海に花

あく小雛子の味と云ふ故

スミハラ

今年八月の傳ふに

卷之六

到之云物以爲常

○六月○白何等○

○
同

スミヤカ

スミタラ
江元の老を向ふ

卷之五

ふ十夜の内がひのち

亭主。石臼。十夜。

○
同

スエーデン

真の如月と云ふは

蘇子瞻詩集卷之五

續古之
服之

真。有。從。身。恨。

○
同

五言

枯柳を今ふりて
去る

あまの跡をさがし
る
月
孤
屋

思ふ

月。屏空。

体七言

同

是ハ雜の云々
ての云々

これと魂を入れて一
只の麻布

付向の宛先を
宛先

市のとり付

ふふ笑て
ふりそけ

夢の板 春 懐

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

さあきう
にそぐづ

[illegible]

と云ふは、

ふ
つ
あ
く
様
の
こ
ま
ふ

はつたふ
まふちん

世奇のふり

通うもあふ手紙の

清心丸

あそふにけし

新之魚

23
 24

有子以順

死を武士は 小骨の如く 入る人ふ 嘆く ありあり うつろひ 軍の中 かく人 言低く 涙あふ つつ 星ふ 髪を 何年か 恨 祝 荷 苦 あり 松 飯 ふ	頼れぬ 招き 少の 松 小 山の 志 生れ 頼 人 か 臺 何 来 い 重 松 養 松 正
--	--

何とせぬ 目の内 意と 旅の あり 文 一 中 羅 浮 力 座 新 四 小 思 休 そ	何とせぬ 只 松 宣 世 何 小 一 吹 屋 夕 身 何 丁 百 松 何 思 休 そ
--	---

荷持ひよりふ
船出更は
森とふ起て
習て月を
あけおのる

やちまき
碑を御目
まき
命うめ

五言

同

隠し
め
片
竿
成
物
降
尾
店
侘
波
船
屋
志
漸
う

あ
お
ふ
日
さ
多
や
む
う
世
中
う
や
お
手

あ
基
馬
焼
降
号
道
面

あ
忘
髪
い
書
う
と

冠五言

同

い
歡
神
旅
福
股
新
大
加
入
下

夾
葉
園
婦
二
雪
立
あ
上
朝
橋

のちけしや
引すし
あけ
月あ
さ
少
雲
む

夕
陶
葉
ふ
面
ふ
わ

当五言

同

鼓
宿
羽
夾
拾
川
月
お
ふ
か
啼
お
う
う

袴
香
夾
さ
を
櫛
は
秋
乃
名
雨
貝
川
夾

○序題曲

荷
か
免
中
流
通
有
あ

帰
轉
川
さ
旅
お
幽
迷

え曲は序小田毎の日とて哀れ

○歌五体 ○お添

枯枝小鳥とありたり秋の暮

○遠附

月雲の裏ふ針をむき入

○花附

秋の暮は是ふもなほ秋
秋小松
○頃附
秋小松

のどけしや
川すし
夜 袴
月 ち 若
さ 中 也
少 小 ね
春 一 木
む 春

又 子 子
雨 袴
葉 秋
山 川
面 山
う 春
ふ 春
ね 春

沓五言

同

鼓 立 了
宿 ち ち
羽 お きて
尖 ち ち
拾 ち ち
川 ち ち
月 ち ち
お ち ち
ふ ち ち
春 ち ち
か ち ち
啼 ち ち
お ち ち
う ち ち

袴 ち ち
春 ち ち
尖 ち ち
さ ち ち
春 ち ち
梅 ち ち
春 ち ち
乃 ち ち
春 ち ち
乃 降 ち ち
貝 ち ち
川 ち ち
尖 ち ち

○序題曲

新 ち ち
か ち ち
春 ち ち
中 ち ち
春 ち ち
通 ち ち
有 ち ち
お ち ち

春 ち ち
春 ち ち
春 ち ち
春 ち ち
春 ち ち
春 ち ち
春 ち ち
春 ち ち
春 ち ち

え ち ち

曲 ち ち

秋 ち ち

曲 ち ち

○服五体

○お添

枯 ち ち

春 ち ち

○遠附

春 ち ち

○春附

春 ち ち

秋 ち ち

春 ち ち

○頃附

春 ち ち

秋 ち ち

頃〇小虫のききうし頃

〇對附

ききうしききうし雲の蓋は重く
暖き所をむこひは縁を
〇牙三句法〇杉形〇太山
むすむす日れききうし
木の風 ぬれぬのけり 雨のききうし

〇十五方附方

理

甲斐の根方ハ雲のききうし

達

須戸のききうし軍 雲中

離

縁ハうき物と云ふてききうし

其人

離ハうき物と云ふてききうし

其場

繩子と云ふてききうし

時分

うき物と云ふてききうし

時候

息ハ小根のききうし

景色

又ハ大木のききうし

悦より甲斐のききうし

向附

城の中におおききうし

迎

江戸のた右のききうし

心

妹と云ふてききうし

響

麦畑のききうし

寂

町内のききうし

境

江戸のききうし

包

あやうきききうし

是のききうし

右十七ヶ條畢

白雄房昨鳥著

原書有誤寫者今正此

十時蕉華庵乙彦

俳諧初學書目

俳諧寂榮

白雄坊撰

三冊

發句五百題

同撰

二冊

故人五百題

松露庵撰

二冊

新五百題

田喜庵撰

二冊

新々五百題

二冊

近世十家五百題

過日庵撰

二冊

近世百家五百題

二冊

文久五百題

二冊

元治五百題

二冊

安政付合集

半青居新甫著

二冊

蒼虬翁付合集

同撰

一冊

持扇跋

黃鸝嘆老杜鵲翔壯黃梅

天間居愛無事親四友蕭

然消日矣俄一書賈捧帙

而進啓視之乃俗稱俳諧

季寄者而卷末併載白雄

之苗代水一書蓋源出於

年浪草而汲玄同之歲時

記下流以別爲一支川者

也然其源流悉非清水而

濁水交有流傳宜不拾捨

謬損味惜哉這書隨流沿

習而不擇清濁音爲備習

學之便覽乎既刻成無如
 之何要知其事々物々之
 正誤者有積讀書之功焉
 出格亦可有其期余爲書
 賈聊訂正文字誤脫而一
 時煩机上之四友加勞午
 方先生而已
 音
 慶應歲次丙寅天中節日
 江都萩原乙彦識於焉
 大本



日本搦通二丁目
 須原屋茂兵衛
 同 二丁目
 山城屋佐兵衛
 同
 須原屋新兵衛
 銀座三丁目
 山城屋政吉
 芝神明前
 和泉屋吉兵衛
 同
 岡田屋嘉七
 横山町三丁目
 和泉屋金左門
 淺草第町三丁目
 須原屋伊八
 池ノ端仲町
 岡村屋庄助
 上野御成道
 英屋文藏梓
 林
 書
 行
 發
 都
 東

茂城在東壁鄉大國村西

盧永芳之助